
スーパーロボット大戦G . U .

サカガミ ヤスヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦G・U・

【Nコード】

N2248C

【作者名】

サカガミ ヤスヒロ

【あらすじ】

ミスリルに所属する少年・シオンに新たな指令が下される。それは一人の少女の護衛任務だった。プラントに渡った少年・シユンヤはザフト軍赤服となった。そして、彼は新造艦のパイロットに選ばれ、ゲシュペンストMK-2を与えられる。彼らは知らなかった。自分達が地球の存亡をかけた戦いに身を投じること。・・・

参戦作品（前書き）

これは、カテゴリーにもありますがファンフィクションです。その点を先にご了承ください。

そして、スパロボだけでなく、他にもオマージュがありますので、そちらもご注意ください。

追記：待っていた人はごめんなさい。そうでない人は流して読んで下さい。

スーパーロボット大戦G・Uはもうしばらく休載させていただきます。

それは、設定を参考にさせていただいている、コードギアス本編と、本作に誤差が生じているからです。

誤解されるといけないので言っておくと、ギアス本編はすばらしい出来だったと思います。（賛否両論あると思いますが・・・。）それに比べて、本作はもっと、ゴチャゴチャしてます。

なので、設定整理の為に、本作の設定にあうように、ファンフィクションとして、IFのコードギアスを先に書きたいと思います。その点をご了承ください。長文失礼しました。

参戦作品

機動戦士ガンダムF91

機動戦士Vガンダム

新機動戦記ガンダムW

機動戦士ガンダムSEED Destiny

機動戦士ガンダムSEED STARGAZER

機動戦艦ナデシコ

フルメタル・パニック！

フルメタル・パニック？ ふもっふ

フルメタルパニック The Second Raid

超時空要塞マクロス

超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか

マクロスプラス

マジンガーZ

グレートマジンガー

マジンカイザー

ゲッターロボ（設定のみ）

ゲッターロボG

真ゲッターロボ（原作漫画版）

勇者ライディーン

超獣機神ダンクーガ

超電磁ロボ・コンバトラーV

超電磁マシン・ボルテスV

トップをねえ！

新世紀エヴァンゲリオン

ラーゼフォン

バンプレストオリジナル

作者オリジナル（武装及びシステム面、キャラクター）

参戦作品（後書き）

参戦作品ははこんな感じです。出来る限りがんばりたいと思います。

プロローグ

数多の戦乱、大戦があった……。

人の欲望は尽きることが無く、それに押しつぶされ、踊らされた人間が何人いただろう……。

人類は何度も傷つき、しかしそれでも何度も何度も人類は立ち上がった。

そして、人類が本格的に宇宙に進出し始めて、一世紀が過ぎた時代。

新西暦111年人類は衝撃に襲われた。最初のコーディネイター、ジョージ・グレンの登場である。最初の頃、遺伝子操作の危険性等からの批判はあったが、一部の富裕層は、子孫を優秀にしようと、こぞってコーディネイター化を行った。しかし、コーディネイターとして生まれた来た子供達が成長すると批判は増大した。それは遺伝子操作云々でもあったが、それ以上に妬みから来るものが大きかった。ナチユラルによる、コーディネイター殺害事件が頻発し始め、コーディネイターたちは、宇宙に行くか、コーディネイターを受け入れてくれる国に移住するしかなかった。宇宙に移住した者達はプラントを形成した。

新西暦164年、地球の南アタリア島に巨大な物体が落下した。当初、この物体は隕石であるとされていたが、地球連邦の調査チームによって、未知の文明が作り出した超大型宇宙戦艦であると判明した。そして、この事実人類の他に知的生命体が存在し、太陽系外で大規模な戦争が行われていることを証明した。地球連邦政府は早急に対処し、新西暦166年に、EOTを利用した兵器製作及び軍の編成を開始した。

しかし、新西暦168年セカンドインパクトと呼ばれる災害が発生。さらに極東地区の要所・東京は外部侵入者の『MU^{ムウ}』により、その全体を半球（東京ジュピター）状の物によって外部から隔離されてしまう。これにより経済は混乱し、地球連邦は復興のために、軍編成を一部民間に委託した。そうして、連邦特別宇宙軍「SDF」、傭兵部隊「ミスリル」が発足した。

地球連邦は、異星人の存在を発表していた。しかし、なかなか回復しない経済や、実際に感じることの無い異星人の存在、「SDF」創設は非難され、人々の不満は高まっていった。特にコロニー群を初めとする宇宙に住む人々に・・・。

そんな中、地球連邦のコーディネイター殲滅派が、ユニウスセブーンに核攻撃を仕掛け、戦争が勃発した。当初は、物量に勝る地球連邦が圧倒的に有利であったが、ニュートロンジャマーにより従来の兵器が使用不可になった為、戦争は膠着状態に陥った。しかし、「ミスリル」が地球連邦側で参戦、さらに新兵器の開発に成功し、ニュートロンジャマーキャンセラーの獲得によって、核も再び使えるようになった為、戦況は傾く。しかし、「アークエンジェル」等の離反、「エターナル」の参戦などの要素が加わり、結局、停戦となった。この血のバレンタインを発端とする戦争の中で、コロニー群の中には独立を目指して着々と準備を整える者達がいた。

新西暦182年、恐竜帝国や悪魔帝国が極東を襲撃した。疲弊した地球連邦は窮地に立たされるが、「マジンガーZ」、「ゲッターチーム」、「ライディーン」、そして「ミスリル」の活躍により撃退。恐竜帝国に協力していたDr・ヘルや悪魔帝国のプリンス・シヤークンは再起の機会をうかがい、それぞれの軍団の増強を行っていた。

一方宇宙では、突如として出現した無人兵器群が火星を占拠、そして、反連邦組織・それを駆逐するための組織もその勢力を着々と伸ばしていった。

新西暦183年世界は混迷の闇の中を漂い続けていた。

Mission 1: STANDING BY Apart

M9のECSを不可視モードで使用しながら、宗介、クルツ、マオの三人は、慎重に保護対象を探していた。

『なあ、ソースケ。そっち見つかったか？』

クルツは集中はしているのだろうが、どこか気だるげな言葉で通信してきた。宗介は極めて無表情な声音で答える。そこには一縷の隙も感じられない。

「こちらはまだだ。ウルズ6」

『ソースケ、別に大した任務じゃねえんだからさ・・・』

『ウルズ6、任務は任務よ。きつちりやる!』

マオがクルツに注意をする。まあ、そんなに咎めるような口調ではないが・・・。

『姉さん、シオンが陽動に行ってるんだから、別にそんなにきつちりやる必要ないんじゃないか？』

『まあ、それもそうだけどね』

二人の会話をむつつりと聞いていた宗介の機体が爆発と戦闘ヘリを検知する。

「こちらウルズ7、付近に爆発とヘリを確認。そちらに向かう」

『ウルズ2、了解。』

『ウルズ6、了解。』

途端に、二人の口調が真剣なものに変わる。

爆発付近に近づくと、戦闘ヘリから少女が逃げていた。宗介は敵勢力と判断し、対戦車ダガーを即座に投擲する。

ダガーの灼熱の刃はヘリの機首に突き刺さり、激しい火花を散らす。

戦闘ヘリはバランスを崩し、少女のほうへと落下していく。宗介は少女を飛び越し、少女の盾となる。

激しい衝突音が当たりに響く。

M9は各関節から白い蒸気を噴出しながらも、ヘリをしつかりと受け止めた。ヘリを少女に影響が出ない地点まで運び、投げ捨てる。ややあつて、ヘリは爆発した。

「怪我はないか？」

少女のところに戻って、話しかける。

「君とヘリとの距離が近かったので、対戦車ダガーを使った。俺の散弾砲は威力がありすぎる」
ショット・キャノン

少女は返事をしなかった。宗介は少女の前にM9をひざまずかせ、コクピットのハッチを開ける。

救急セットを持って降りると、宗介は再び、少女に話しかける。

「痛いところはあるか？」

わずかに驚いた様子を見せる少女。それでも返事はなかった。宗介は続けて言った。

「日本語はわかるな」

少女は小さくうなずく。

「あの人の仲間なの？」

おそらく、少女を救出した男だろう。

「そうだ。ミスリル の人間だ」

「みすりる・・・？」

「いずれの国にも属さない、秘密の軍事組織だ」

「・・・」

宗介は応急手当を開始する。痛みが体を襲っているのだろうか、

少女の呼吸は荒かった。

「・・・あの人が死んだわ」

「そのようだな」

「わたしを逃がそうとして」

「そういう男だった」

「悲しくないの・・・？」

宗介は手当ての手を止めて、思慮深げに沈黙する。だが、それも少しの間で、彼はすぐに返答した。

「わからない」

宗介には本当にわからなかった。宗介達にとっては人が死ぬのは味方であれ、敵であれ、日常的に存在しているからなのかもしれない。

「わたしを・・・わたしをどうするの？」

手当てを終えた宗介に少女は、不安げに聞いた。

「連れて帰る」

「どこに・・・？」

「まず輸送ヘリの着地点まで、俺のASで運ぶ。ヘリに収容されたら、海で待っている母艦に帰還する。そのあとは知らん。俺達の任務はそこまでだ」

「おれ・・・たち・・・？」

森の木をかきわけて、マオとクルツのアーム・スレイブが姿を現した。それぞれ、油断なくあたりを警戒している。

「心配はいらない。俺の仲間だ」

「・・・あなたの名前は？」

少女が乞うようにたずねてきた。

「あまりしゃべらん方がいい。体力を浪費するぞ」
「教えて」

宗介は少し迷ったが、教えることにした。

「相良。相良宗介」

「攻撃ヘリが撃墜されました」

通信兵が、報告をあげてきた。

「撃墜？すぐに増援を出せ！」

指揮官はあせった。

（研究体が奪取されたことだけでも、失策だと言っのに、このままでは私は破滅だ！）

そんな事を考えながら、A S部隊に出撃命令を出していると、さらに報告があがって来る。その声は切迫しており、明らかに危険を示していた。

「正体不明の機体がこちらに接近しています！」

「くっ！総員第一種戦闘配備！」

今度はM Sにも出撃を命じる。指令室の中の緊張状態は最高潮に達していた。

《S t a n d i n g b y》

全兵装のロックが解除され、レーダーに映る敵のデータを確認する。

「敵は、ミストラル2・三体、ストライクダガー・二体か、さすがはロゴスということかな？」

「シオン、今回は陽動なんですから、暴れすぎないようにしてください？」

通信機から、テッサの声が響いてくる。コクピットの中のシオンと呼ばれた少年は少し驚いたように返答する。

「データ収集もかねてるから、暴れてもいいとロイド中佐が仰ってましたが・・・」

テッサは、ため息をつく。

『上官命令です。ほどほどに』

「そこまで暴れませんよ。話は最後まで聞きましょう。大佐殿？」

笑い声交じりに返答するシオン。完全にからかっているような感じである。敵基地からはすでに、敵機が発進されているにもかかわらず、かなり余裕でもある。

『シオン！』

「はいはい、説教は後でな。テッサ」

シオンは通信を終え、戦闘に集中する。彼の乗っている機体はA

Sではなかった。ガンダムに似た紫の機体。その名をヒュッケバインMK-2という。

ホバー推進をしながら、ヒュッケバインは敵研究施設に近づいていく。

発進した敵機体が攻撃を開始する。その攻撃を縦横無尽にかいくぐりながら、フォトンライフルを取り出し、敵機に放つ。ライフルの弾丸は見事に敵機を打ち抜き、一瞬にして一体目のストライクダガーを撃破する。

さらに、勢いを殺さずに、ミストラル2一機を蹴り飛ばす。機体はボールのように飛んでいき、錐揉みしながら落下。二、三回バウンドしてから、機能を停止する。

「あんだ達にうらみはないが、悪いな」

他の機体から射撃が降り注ぐ。しかし、ヒュッケバインの装甲に当たることなくそれらは見えない防壁に防がれる。

《Gテリトリの通常稼動を確認》

AIが防御システムの稼動を告げる。シオンはそれをかすかに聞きながら、次の敵を見据える。

接近戦を試みようとしてストライクダガーがビーム・サーベルを抜いて襲い掛かってくる。シオンはフォトンライフルを持っていないほうの手でビームソードを取り出し対抗する。

二つのビーム兵器がぶつかり、激しい火花を散らす。

ヒュッケバインはバルカンで威嚇射撃をしながら一度後退し、次の兵装を繰り出す。

「チャクラムシューター射出！」

シオンの言葉と同時に、先端に円盤状の物がついたワイヤーが射出され、ストライクダガーに絡みつき両断してしまう。

あっという間にAS二体まで敵機を減らしたが、敵基地からはさらに3体のストライクダガーと戦闘ヘリが二機出現する。

足止めして、その隙に宗介たちのところに行くつもりらしい。

「大丈夫だと思うが……。仕方ない、試してみるか……。《ア

クセルモード」

《AXEL MODE Standding by》

シオンの音声を認識して、ヒュッケバインの新たなシステムが起動する。ヒュッケバインの装甲色が紫から赤に変わる。

《Complete》

「《アクセルGスマッシュ》」

《Axel Gsmash Start up》

AIがそう告げると、ヒュッケバインの姿が消える。実際には消えていないのだが、敵機の兵士にはそう見えたはずだ。

赤い閃光が次々に敵機体にぶつかる。そして、ヒュッケバインがその姿を再び現した瞬間、敵の機体はことごとく、爆発していった。

《3・2・1 Time out Reformation》

ヒュッケバインの色が赤から紫へと戻る。そのとき通信が入った。

『ウルズ2よりガルム1へこちらの撤収は完了した』

「ガルム1、了解。こちらもこれより帰還する」

シオンは他に増援がないことを確かめると、帰艦の途についた。

指令室の中は騒然としていた。明らかに圧倒的に負けたのにもかかわらず、自分達は死んでいないからである。

そして、この施設に派遣された兵士はどの人物も一流だった。無論パイロットもエース級であったが、それがいとまたやすく撃破されてしまった。そして、ヒュッケバインの性能に驚嘆していた。

ふと一人の下士官がつぶやいた。

「あの機体の色・・・、死の恐怖？」

それは、ヤキン・ドゥーエ戦役、伝説のエースパイロットの二つ名だった。

Mission 1: STANDING BY B part

「シオン！なんですか今日の態度は！？」

シオンは彼らの母艦である潜水艦 トウアハー・デ・ダナンに
戻って来るなり、艦長室に呼び出され、説教を食らっていた。

最初に、マデューカス中佐に一時程度説教を食らった後だったので、シオンは少しげっそりしている。

「聞いてるんですか！？」

艦長であるアッシュ・ブロンドの美少女、テレサ・テストロツサは頬を膨らまして、睨みつけてくる。しかし全く怖くなく、むしろ愛らしいほどである。

「ああ。聞いてる、聞いてる」

シオンはマデューカス中佐に絞られていたし、テッサに怖さが全くなかったので、真剣に聞くつもりなど全然なかった。愛らしさに癒されている感すらある。

「聞いてないじゃないですか！はあ、マデューカスさんも言ってますけど、あなたには指揮官としての自覚が足りなさ過ぎなんです！あなたの階級は少佐なんですよ！？」

シオンは少佐という立場にありながら、言動にかなり軽いところがあるのも事実だった。しかし、作戦行動中は真面目にやっていたのだ。

シオンは気だるげに反論する。

「テッサ、あんまし根を詰めすぎるのもいけないと思うのだよ。かわい顔がすぐ老け込んだじゃうぞ？」

「そ、そうですね？じゃなくて！・・・はあ、もういいです」

肩を落として、テッサは説得をあきらめる。

「ごめん」

「へ？」

テッサは急に態度を変えて謝ってきたシオンに驚いた。続けて、

シオンはかしこまった口調でしゃべりだす。

「疲れさせるつもりじゃなかったんだ。最近、本当に根のつめすぎだから、リラックスさせようと思って、からかったんだよ。上官に対しての無礼とは知りつつもね。今度からは元に戻すから許してほしい」

「わたし、そんなに疲れてるように見えますか？」

「俺の目には多少、そう映った」

「そうですか・・・」

テッサはしばらく思索して、口を開いた。その口調は穏やかなものへと変わっていた。脳に直接染み入ってくるような声だった。

「プライベートでの言動は別に気にしません。でも、作戦行動中はやめてください。逆に心配になります。今回だってそうだったんですよ？」

「ごめん」

「本当にやめてくださいね」

「了解」

シオンは微笑みながら快活に答える。テッサもいつの間にか、微笑をたたえたい顔になっていた。

「それじゃあ、これで退室させてもらおうよ？」

「はい。あと、遅くなりましたが、お疲れ様でした」

「テッサも、お疲れ様」

シオンが退室した後、テッサは、ブリッジに連絡を入れる。

『なんでしょう？大佐』

マデューカスが、返答してきた。テッサはシオンに言われたことを確認してみた。

「私は、根の詰めすぎでしょうか？」

『そうかもしれません。多少、お疲れの様子ですので』

「そうですか・・・」

『いっその事、総動員して、どこかの南の島を占領して休息致しますか？』

「いい提案ですね。みんなでバカンスですね」

テッサは笑い声混じりに、マデューカスに答える。

『今の返事を聞くと、多少疲れは取れたようですね』

「はい」

シオンは格納庫に向かった。今回の戦闘データについての検討が行われるのだ。

格納庫に着くと、素っ頓狂な声で上官のロイドが歓迎してくれた。

「おーつかれさま！ またもや素晴らしいデータを本当にありがとー！ アクセルモードの稼働率も90%を超えている！ まったく、エクスレントだよ。君は！」

怒涛のように喋り捲ると、ロイドは機体のほうへ歩き出す。シオンもそれに続いて歩き出した。

機体のそばに常設してあるパソコンデスクに着くと、今回のデータ収集の結果が表示されていた。

「でも、ロイドさん。相変わらずエネルギーを食う武装ですね」

「そうなんだよねえ。核融合エンジンさえ使えば、問題ないんだけど・・・」

ぼやきながら、彼はデータを映像化したものをディスプレイに表示した。そこには、今回のアクセルモードのときの動きがCGで再現されていた。

ヒュッケバインは、連続で敵機に飛び蹴りを食らわせていつている。通常のスピードではなく、音速の50倍という超高速である。さらに、足にはエネルギーが収束しており、その破壊力も通常のものではなかった。しかし、それと同時に、機体のエネルギーは急速に無くなっていた。

「もし、アクセルモードで倒しきれなかった敵が大量に出たら・・・」

シオンは最大の懸念を口にする。

「ざーんねでした。ってことで撃破されちゃうだろうね」

ロイドは言いにくいことをさりりと说つてのける。

「おい、おい、そりゃねえんじゃねえか!？」

突然声がした。振り返るとそこには、獣戦機隊のリーダー、藤原忍が立っていた。

「仕方ないだろ？僕は事実を言つたまでだよ」

「だから、てめえはなんでそういうことを平気で言えるんだよ!」

忍はロイドに掴みかかるうとするがシオンはそれを制止する。

「よせ!心配してくれるのは有難いが、仕方ないだろ。相手はロイドさんだぞ・・・」

「そのとおり!」

ロイドはシオンの後ろから大威張りで言ってくる。シオンはムカツと来て、忍に許可を出す。獣戦機隊は彼の直属の部下なのだ。まあ、ロイドの直属の部下でもあるのだが・・・。

「自覚はあるんですね。忍、やっぱり一発くらい殴っていいぞ」

「了解!」

忍はゴチンとゲンコツを食らわせる。

「いったーい!」

「ロイドさんが悪いんですよ。無責任なことを言うから。それで、方策はあるんですね!？」

シオンが絶対にあるという前提で問い詰めると、

「うん、あるよー!」

痛みが吹っ飛んだかのように、ロイドは嬉々として、説明を開始する。

「簡単にいうと、今、新しい重力制御エンジンが開発中なんだけどね、それを積み込めばエネルギーの問題は解決だよお!」

「それならそれで、最初からそういってんだよ!」

忍が怒鳴るが、ロイドはそんなことは意に介していないようだ。

「それが、私の、ロイド・クオリティじゃないか」

「またもや他人を痛めつけるのを楽しんでいることを公言するロイド。シオンと忍はまたもやムカツときた。」

「忍、もう一度殴れ」

「了解」

「またもや、ゲンコツを食らってふらふらと椅子に座るロイド。今度は先程より痛かったのか、頭をしきりにさすっている。」

「シオンは気を取り直して、忍に問いかけた。」

「ところで、何で忍がここに？」

「ああ、カーリーニン少佐がお呼びだったぜ」

「カーリーニンさんが？」

「ちよつと、頼み事だとさ」

「そうか、ありがとう」

「いいってことよ。・・・それよりあの野郎はどうする？」

「忍はいまだに頭をさすっているロイドを指差しながら聞いてきた。」

「ほつとこう」

「了解」

「二人は、ロイドを置いて、さっさと格納庫を出て行った。」

「シオンがカーリーニンの部屋に着くと、カーリーニンは書類に目を通していた。」

「失礼します」

「シオン少佐。わざわざすまない。まあ、掛けてくれ」

「シオンは勧められるままに、席に着き、早速話を切り出した。」

「それで、頼み事って何でしょうか？」

「ああ、それなんだが、まずはこの書類を見てもらいたい」

「書類にはある少女の経歴と少女の写真が貼られていた。シオンはそれを読み上げていった。」

「千鳥かなめ、現在16歳、第三新東京市の高校に在学。父は連合

高等弁務官で、妹と共にニューヨークに在住。自身はウイスパードの可能性あり。・・・また、ウイスパードの関連ですか。で、俺は何をすればいいんです？」

「SRT要員のウルズ2、ウルズ6、ウルズ7、獣戦機隊と共に彼女を護衛して欲しい。もちろん指揮権は、君に完全委任する」

シオンは目を丸くした。一人の護衛としては、破格の人数を割いていたからだ。

「他にも理由がありそうですね」

シオンは少し探りを入れてみることにした。カリニンは、声色を少しもかえずに告げる。

「察しがいいな。しかし、それは向こうに着けばわかる」

シオンにとっては、カリニンからそれだけ聞き出せただけでも幸運だった。何かがあるとわかっていれば、それ相応の心構えができるというものだ。

「装備についてだが、M9三機、ダンクーガ、ヒュッケバインMK-2。各機体はネルフに管理してもらう」

（ネルフ・・・、日本の秘密機関が協力を・・・？）

「携行装備については君の判断に委ねるが、常識の範囲内で頼む。わかっているな？」

「わかっています。それでは、失礼します」

シオンが立ち上がろうとすると、カリニンが書類を差し出しながら呼び止めてきた。

「待ちたまえ、これを・・・」

「・・・何ですかこれは？」

シオンはいぶかしげに、その書類に目を通す。カリニンはまたもや平常の声音で告げた。

「見てわからんか？転入届だ」

「おお、ようやくお出ましか。シオン？」

クルツが待ちくたびれたように、伸びをしながら言葉をかけてきた。場所は、艦内の食堂、他には忍達、獣戦機隊のメンバーとマオ、宗介がいた。

「ヴィタール少佐。ご足労いただき、恐縮です」

「はい、やり直し」

いつも通りの丁寧な挨拶をしてきた宗介に、マオが駄目出しをする。

「しかしだな・・・」

その言葉をさえぎって、雅人が注意する。

「しかしだな・・・、じゃないだろ。そんな風に呼んで、正体ばれたらどうすんだ？」

「問題ない。正体を知られた場合は、その目標を・・・」

「“消す”なんて言わないだろうね」

「さすがは沙羅だな。その通りだ」

宗介はしきりに感心していたが、一同はため息をつく。宗介が普通の高校に順応するのはまず無理なような気がした。

「おっほん、こういう時はだな」

シオンは咳払いをして、宗介に命令した。

「ヴィタール少佐はやめること、シオンでいい。それから、千鳥かなめを守るときでも、相手がプロでなければ“消して”は駄目だ。いいな？」

「了解だ。ヴィタ・・・、シオン」

「上出来だな」

クルツは心底あきれ返って、宗介に問いかける。

「お前ってさ、本当に《軍人》だよな」

「それがどうした？」

「いや、やっぱ何でもねえわ」

クルツはそれ以上何も言わなかった。いや、言えなかったのだから？

マオがはつらつと、先へと話を進める。

「それじゃ、宗介の教育も終わったし、ちゃっちゃんと写真を撮っちゃいましょー!」

写真撮影は滞りなく進んだ。しかし、シオンが自然な笑顔でのもぞんだのとは対象的に、宗介は終始むっつりとした顔しかなかった。

Mission 2：急襲！第三新東京市！ A p a r t

機体などの運送を後に任して、シオンはネルフの最高責任者、司令碇ゲンドウの元へとおもむいた。碇ゲンドウはデスクの座席にすわり、手を組んで待っていた。その隣には副司令の冬月コウゾウが控えていた。

シオンは丁寧に挨拶をした。どうやら、こういう場面での礼節は心得ているようだ。

「ミスリル北大西洋戦隊所属、シオン・ヴィタール少佐であります。今回はご協力いただき、まことに感謝いたします」

「まあ、楽にしたまえ」

「はっ、失礼します」

シオンは直立不動の体勢から、少し体を崩す。休めの体勢である。今回の件については、こちらでも渡りに船だったのだよ」

冬月コウゾウが今回協力した理由を語り始めた。

「セカンドインパクトは知っているね？」

「はっ、南極への隕石落下だと心得ております」

セカンドインパクトの影響で、地球の環境が一変し、人類はさらに宇宙への進出を早めていたし、南極大陸はそのせいで消滅してしまっている。有名すぎるほど有名な事件だ。

「表面上はそうなっているな。では、もしそれが真実ではないとしたら・・・、君はどう考える？」

冬月がとんでもないことを言い出したので、シオンは思わずギョツとしてしまった。これだけの災害を隕石以外の何が引き起こしたというのだろうか。

「無理もないな。こちらを見てくれ」

スクリーンが現れ、そこには白い人影のようなものが映し出されていた。

「これは？」

「南極大陸に現れた光の巨人だ。われわれは、アダムと呼んでいる」
「まさか・・・」

「察しがいいな。そう、この巨人がセカンドインパクトを引き起こした」

にわかには信じられない話だったが、画像を見せられると、それなりに理にはかなっているようでもあった。

「この巨人はすぐに消失したのだが、研究の結果、さらにこれと同じようなものが存在することがわかった」

「われわれは、その化け物どもから、世界を守る為に組織されたのだよ」

冬月の言葉をついで、ゲンドウが締めくくった。

「そこで、われわれにも、その化け物たちへの攻撃に協力しろと」

「それもあるが、足止め程度でかまわん」

「なぜです？」

ゲンドウの言葉に戸惑いを隠せないシオン。そして、冬月が絶望的なことを言い出した。

「使徒には、通常兵器がまったく効かないのだよ」

同い年くらいの一人の少年と一人の少女が、第三新東京市に向かう電車を待っている。少年はどこか憂鬱な面持ちで、少女は穏やかな表情で、電車が着くのを待っていた。

「シンジくん。浮かない顔してますけど、行きたくないんですか？」

今朝、いや、手紙が届いた日からどこか元気のないシンジに少女が話しかけた。シンジは少し考えていたが、口を開いた。

「会いたくないんだ。父さんに・・・。シノちゃんのことを考えるとわがままだとは思っけど・・・」

「いえ、そんなことは・・・。お父さんは厳しいんですか？」

「どうか・・・。父さんは僕にあんまり興味がないみたいだった

から……。それなのに、いきなり呼び出されて……。だから、怖いんだ」

淡々としたシンジに、シノと呼ばれた少女は、優しく微笑みながら告げる。まるで、シンジの姉、もしくは母親のような感じだった。「大丈夫ですよ。どんなときでも私だけは、シンジくんの味方ですから」

シンジは、微笑みながら、それに答える。若干元気を取り戻したようにも見えた。

「ありがとう」

シオンはかなめの通っている高校に向かっていた。もちろん、高校生らしくキチンと学生服を着込んでいる。

しかし、街行く人たちは、皆シオンのほうを振り返った。格好が変だったからではなく、ブロンドの髪に碧眼、しかも、顔立ちは整っていたからだ。

（あんまり目立ちすぎるのはなあ・・・）

シオンはそんなことを考えながらも、学校の近くにたどり着いた。見ると、校門前には、行列が出来ている。

（なんだ！？）

シオンがびっくりして、立ち尽くしていると、後ろから肩を叩かれた。シオンは緊張しながらも、後ろを振り返ると、そこにはツインテールで眼鏡の少女とロングヘアの先を赤いリボンで結んだ少女が立っていた。制服から察するに、ここの生徒だろう。

「ぼさつとしてると、始業時間に間に合わないわよ！ほら、並んだんだ！」

ロングヘアの少女が話しかけてきた。そうして、強引に列に並ばされた。初対面の相手に対してはすいぶんとなれなれしい態度である。眼鏡の少女がそれを苦笑いでたしなめた。

「カナちゃん、初対面の相手にそれは無いんじゃない？」

カナちゃんと呼ばれた少女は今気づいたと言わんばかりに、手を合わせて弁明してくる。

「そういえば、見たことないわね。ごめんごめん。間違えちゃった。てつきり知ってるもんだと思って」

「すまない。今日、転校してきたばかりなんだ」

シオンは気にしていないことを微笑交じりに告げる。

「へえー、そうなんだ。どこから？」

眼鏡の少女が興味津々といった感じで、たずねてきた。

「父さんの仕事の都合で、ニューヨークからね」

もちろんこれは嘘っぱちである。眼鏡の少女はちよつと驚いた感じで、さらに続けてきた。

「カナちゃんのお父さんと妹もニューヨークに住んでるんだよ。奇遇だね」

「そうね。ああ、やっぱり持ち物検査か・・・」

ロングヘアの少女は同意しながらも、前方を見て、落胆した声を発した。この行列はどうやら持ち物検査のために並んでいたらしい。

「カナちゃん。変なものでも入ってるの？」

「うえ？別にそういうわけじゃないけど・・・」

「ならいいじゃない。マシンガンとか、爆弾とかを持っていたら問題だけ」

瞬間、シオンは常人にはわからない程度にびくつとした。鞆に入っていたが、制服の下には少しだけ、銃器とナイフを隠し持っていたからだ。

「あれ？どうしたの？」

眼鏡の少女がそれに気づいて、聞いてきた。意外と鋭い感性の持ち主のようだ。

「いや、普通にマシンガンとか爆弾とかの発想が出てくるのにびっくりしてね」

「まったくね。キョーコ、それはどこの世界の住人よ？」

ロングヘアの少女も同意してくる。どうやら、うまくごまかせた様だった。

「あははは、それもそうだね。あ、そういえば自己紹介がまだだね。私は常盤恭子。よろしくね」

話題を変えて、彼女は自己紹介をはじめた。眼鏡の少女は常盤恭子というらしい。続けて、カナちゃんと呼ばれた少女も自己紹介をしてくれた。

「私は、千鳥かなめ。よろしく！」

どうやら、この少女が護衛対象らしい。写真の13歳当時から見て、さらにきれいになっていた。そんなことはおくびにも出さずに、シオンは自己紹介をする。もちろん偽名だ。

「俺は、シオン・ハルザードだ。よろしくな、常盤さん、千鳥さん」
「シオン・・・、なんか他人のような気がしないわね」

シオンが名乗ると、かなめは首をかしげた。

「カナちゃん・・・、何言ってるの？」

「な、なんでもないわ。うははは」

恭子がきよとしながら、質問すると、かなめはわれに返って、首を振るのだった。

「転校初日からそういう態度で、許されると思ってるの？」

列の先頭から女性の大声がした。見ると、人だかりが出来ている。

「あ、神楽坂先生の声だ」

「何かあったのかしら？行ってみましょう」

二人が行こうとするのを、シオンは呼び止めた。

「なあ、列は！？」

「また並び直せばいいわよ！」

かなめに言われ、シオンは仕方なくついていくことにした。人だかりの後ろから、様子を伺うと、宗介が教員らしき人物に、叱られていた。

（あいつ、何やってるんだ！？）

シオンは頭を抱えたかったが必死にこらえて、様子を伺い続けた。

宗介はこちらには気づいていないようだ。

「そのカバンの中を見せない限り、絶対に学校には入れないわよ！？」

「ですが・・・」

冷静を装ってはいるが、宗介が当惑しているのは明白だった。

（まあ、学校の持ち物検査なんて、受けたことないしな・・・）

「いいから見せなさい！ほら！」

神楽坂恵理は宗介のカバンを引ったくった。

「あ・・・」

「まったく。どうせタバコでも持つてるんでしょ？」

彼女の想像は常識的には間違っていないかったが、宗介のそれは、常識をはるかに超えていた。彼のカバンから出てきたのは、銃器類だった。

「・・・きみねえ」

「はっ」

困り顔の宗介。困ってるのはこっちだと言って、宗介を張り倒したい衝動を必死に押さえるシオン。

「こういうオモチャは没収します」

「・・・は？」

「ほら、きみは先に職員室で待つてなさい！始業時間が近いんだから」

宗介はぼかん、とする。野次馬たちは笑ってその場を離れていった。かなめは心底嫌そうな顔になる。

「やだ。軍事オタクよ。気持ち悪い・・・」

「はは、なんだかおもしろそう人じゃない？ね、シオンくん？」

シオンに同意を求めた恭子だが、シオンはかなめと同じような態度をとった。まあ、かなめとは意味合いが全然違うが・・・。

「いや、俺はものすごく危険だと思うぞ」

「そうよね、あんたとは気が合いそうだわ」

「そうだな・・・、ははは・・・」

変なところで意気投合するかなめとシオンだった。

「あ！始業時間に遅れる！」

恭子が言くと、三人は慌てて、持ち物検査を受ける。

シオンは、神楽坂恵理にカバンを差し出した。とうぜんカバンの中からは、変なものは出てこなかった。

「君も転校生だったわね。職員室で待つてなさい」

それだけ言くと、恵理は他の生徒の対応に回った。

宗介とシオンは静まり返った廊下を神楽坂恵理に付き従って歩いていた。

（まさか所持品の検査を行っているとは・・・）

宗介は最初は、任務失敗かと思ったが、シオン曰く、日常的なことからしい。

（銃器類を持ち込む生徒が多いのか？そうは見えんが・・・、だとしたら大変な任務になるだろう）

宗介は見事にはき違えていた。

（とはいえ、M9も待機しているし、少佐もおられる。大丈夫なはずだ）

もし、シオンに宗介の心の声が聞こえていたなら、「一番の不安要素は貴様じゃ、ぼけえ！」と張り倒されていたに違いない。

宗介は一番の懸念を解消するために恵理に話しかける。

「・・・先生」

「ん、なあに？」

「例の銃ですが・・・」

「ああ、あれならちゃんと返してあげるから。学期の終わりにね」

少し意地わるく恵理がこたえる。

「いえ、そういう問題ではなく・・・あの銃の薬室には、すでに初段が装填されています。危険ですので、絶対に引き金には触れな

チエンバー

いでください」

「？ああ、そう」

「非常に殺傷力の高いスプラット弾です。暴発すると死人が出ます。お願いします」

「わかったから安心しなさい」

（わかっていない。安心できない）

宗介は口をむすんで頭をふった。その後ろでシオンは青い顔をしながら、どうか一般人に死者が出ませんようにと祈っていた。

恵理に続いて、シオンと宗介が入ると、クラスがざわついた。かなめと恭子はジェスチャーで無言の会話をする。

（ほら、あいつ・・・）

（銃器オタクだ・・・！シオンくんもいるね）

恵理は出席簿で、黒板を叩いて叫んだ。

「はい、見んな静かにして！新しいクラスメートを紹介するから！」生徒達は一応、口をつぐむ。

「じゃ、シオンくんから自己紹介をお願いね」

「はい」

シオンは、一歩前に進み出て、自己紹介を開始する。宗介に比べれば、いたって普通の挨拶だった。まあ、女子達は、かなりざわついていたが・・・。

続いて宗介が自己紹介を開始する。

「相良軍曹であります」

よく通る声で言った。言った直後、自分のバカさ加減に宗介は青くなった。

クラスがざわつく。

たまにいるバカのタワゴトだろうと、ほとんどの生徒が解釈した。シオンは、頭を抱えそうになるのを必死にこらえた自分を内心でほめていた。

「静かに！ほら、まだ続くから！相良くんも、ふざけてばかりいないで！」

「も、申し訳ありません」

宗介は、額に汗をかきながら、続ける。

「・・・相良宗介です。恐縮ですが、軍曹は忘れてください。以上」
それきり、黙り込む。

「・・・それだけ？」

「はっ。それだけです」

恵理は生徒達に向きなおり、

「だれか、質問は？」

その後色々な質問が飛んできて、それに答える宗介を見て、改めてシオンは思った。

（ホントに、ネクラで、軍事オタクだな・・・。テッサは好意を持っているみたいだけど、なんでだ？）

休み時間、シオンのところには結構な人ばかりが出来た。人だかりが去ると、一人の男子生徒が近づいてきた。その生徒は見覚えのある顔をしていた。

「よう、シオン。久しぶりだな！」

「甲児じゃないか、久しぶり！この高校だったんだな」

それは、マジンガーZのパイロット兜甲児だった。

放課後に入り、宗介が名誉挽回のため、一人で任務を遂行したいと言ったので、シオンは甲児と一緒に帰ることにした。

「しかし、よく進級できたな、機械獣との戦闘とかで忙しかったろ？」

「もう、大変だったぜ。そりゃ死に物狂いで勉強したからな」

甲児たちマジンガーチームは機械獣との戦いに常に身をおいていた。学校と両立するのはきつかったはずだ。

「ところで、何でお前は転校してきたんだ？いまさら高校に来る必要もないだろ？」

確かに、ミスリルに所属している分には、学校などに行く必要は無いだろう。それに、シオンは物好きが講じて、一般教養は高い水準にあった。

「まあ、任務だよ任務。これだけしか言えないけどな」

「なるほどな。じゃあ、あの相良って奴もそうなのか？」

甲児には話しても問題は無いと思い、シオンは肯定する。

「他には、誰が来てるんだ？」

「獣戦機隊のメンバーとマオ姉さん、知らないだろうけど、クルツって奴も来てる」

「結構大人数だな」

シオンは肩をすくめ、苦笑いをしながらうなずいた。

「そうかもな」

「ところで、テッサは元気にしてるか？」

「ああ。お前、一番聞きたかったのはそれか？」

甲児の態度は変わらなかったが、表情は少し緩んだものになったのですぐわかった。シオンはさらに揶揄を入れる。

「さやかさんに聞かれたら危ないんじゃないか？」

「別に、元気かどうか聞いただけじゃねえか」

テッサは、結構アイドル的な面も抱え込んでいることが良くわかる。まあ、密かにファンクラブがあるくらいだから当然だが・・・。
「むきになるなよ。俺だって言ったただけだ」

甲児は気を取り直して、話題を変えることにした。

「ところで、今度光子力研究所でマジンガーの模擬戦をやるんだけどよ。見に来ないか？」

シオンは、手をあごに当てしばらく思索してから答える。

「まあ、暇が出来たらな」

「おう。それじゃあ・・・」

そのとき、けたたましいサイレンの音と共に、緊急の放送が入った。

『全校生徒の皆さん。第三新東京市付近に機械獣が現れました。速やかにかつ落ち着いて、シエルターに非難してください。繰り返しです・・・』

「機械獣!？」

「Dr・ヘルの野郎、こりもせずにもう仕掛けてきやがった!」
走り出す甲児にシオンは叫ぶ。

「どうするつもりだ!？」

「ホバースクランダーを近くに止めてあるんだ。それで戦ってやる」
そう言つと、甲児はどこかへと走り去った。シオンは宗介に指示を出す。

「ウルズ7、聞いたか？」

『はい、少佐。我々も戦闘に参加しますか!？』

「いや、お前とウルズ6は千鳥かなめの監視を続けてくれ」

『了解』

次にシオンは、獣戦機隊とマオに通信を入れる。

「スクランブルだ。獣戦機隊は、直ちに機械獣達の撃破に当たってくれ、ウルズ2はウルズ6、ウルズ7のバックアップを頼む。獣戦機隊には合体許可も出しておく。以上!」

『了解!』

通信を切ると、シオンはヒュッケバインを取りにネルフへ向かった。

甲児は、自宅付近に止めてあったホバースクランダーに乗り込み、エンジンをかける。

「機械獣どもめ！覚悟しやがれ！シオン達が出てくる前に、ぶちのめしてやらあ！」

甲児の気合いとともにホバースクランダーは空へと舞い上がった。すでに、機械獣たちは暴れ始めていた。ジオフロント内に収納されていない、建物を破壊している。

「全く、地球連邦軍は何やってるんだ！？」

甲児は、その中の一体、頭に鎌をつけた機械獣、ガラダK7にミサイルを撃ち込む、ミサイルは見事に命中し、敵をひるませることに成功する。しかし、機械獣は倒れずに、こちらに向かって頭の鎌を投げつけてきた。

甲児はそれを何とかかわす。

「あぶねえじゃねえか！それでも食らえ！」

ホバーパイルダーからビームが発射され、またもや見事に命中し、今度こそ機械獣を破壊する。

「よっしゃあ！」

「ふははは！そうはいかん！」

甲児が次の敵に照準を合わせていると、声と同時にビームが飛んできた。すんでのところであれをかわすと声の主に叫ぶ甲児。

「あしゅら男爵か！性懲りもなく出てきやがって」

空から翼竜型の要塞が降りてくる。あしゅら男爵の乗るグールだ。「ふふふふ。ホーバースクランダーが有ったとわな。だが、そんなもので倒せるかな？」

「馬鹿にするな！お前なんかけちよんけちよんにしてやるぜ！」

「まあいい、兜甲児。どちらにしろお前は終わりだ」

甲児は他の機械獣達へ牽制の攻撃は仕掛けながら意味がわからず聞いたです。

「どういうことだ!？」

「冥土の土産に教えてやろう。今、別働隊がマジンガー本体を破壊しに動いておる。さあ、どうなるかな」

「ちくしょう!」

今、光子力研究所には、ダイアナンAとボスボロットがいるが、それだけではきつい戦いになるだろう。そして、マジンガー本体を失えば、甲児は戦う力を失ったも同然になってしまう。今すぐにでも救援に向かいたかったが、街を破壊している機械獣たちを放っておくわけにもいかない。

「まったく、相変わらず卑怯な野郎だぜ!」

その声と同時に、一体の機械獣を赤い閃光が貫く。忍の乗るイーグルファイターだ。他の機械獣たちもアグレッシブ・モードに入つた他の獣戦機が次々に撃破していった。

「馬鹿な! 獣戦機隊がなぜここに!？」

「残念だったな。俺達は悪あるところにどこにでもいる」

ビッグモスのパイロット、司馬亮が皮肉交じりにあしゅら男爵に答える。あしゅら男爵は地団太を踏んだ。

「おのれ! おのれ!」

「一気に決めるぞ! 皆合体だ!」

「「「OK、忍!」」」

「うおおおお! やってやるぜ!」

獣戦機達が空中に飛び上がり一箇所に集まる。

「させるか!」

あしゅら男爵は、合体を阻止しようとするが、そのとき片方の羽を衝撃が襲った。

「なんだ!？」

「残念だが、おまえはここで終わりだ。甲児! 君は先に光子力研究

所へ」

シオンがフォトンライフルでグールの羽を打ち抜いていた。

「すまねえ！恩に着るぜ！」

甲児は、ホバースクランダーを全速力で光子力研究所へ向かわせた。

「くっ、おのれ、死の恐怖！」

「久しぶりだね。その名で呼ばれるのも。で、悠長に話してるとやばいんじゃないか？」

合体を完了したダンクーガが空に舞い上がる。

「ば、馬鹿な！ダンクーガは飛べないはず！」

忍は断空剣を構え、言い放つ！

「いつまでも、同じ欠点を抱え込んでるわけねえだろ！お前達がドムンだけ強くなっても、俺達はさらにその上いつてんだよ！」

「く・・・」

「はあああああ！」

気合とともに、ダンクーガは一気にグールに詰め寄ると、断空剣で縦一文字に一閃する。その直後にグールは爆発。激しい爆炎が上がる。

「覚えている！」

脱出したあしゆらは捨て台詞を残して、すたこらと逃げていった。

「獣戦機隊は甲児の後を追ってくれ」

シオンがすぐさま指令を出す。

「了解！シオン、お前はいかねえのか？」

疑問を感じ、指令を受け入れながらも、問いただす忍。確かに数多いに越したことはない。

「行きたいのは山々だけど、行けそうにない。・・・使徒が出現して付近の地球連邦軍が壊滅したそうだ。」

葛城ミサトはカーナビをにらみつけながら、無人の街を走っていた。ミサトはシンジ達と第三新東京市で落ち合う予定だったが、機械獣と使徒の来襲によってそれができなくなり、非常事態のため、連絡も取れなくなってしまったのだ。この状況にばやくミサト。

「ああ、よりによってこんなときに見失うなんて参ったわねえ」

一方、シンジとシノも困っていた。二人にとっては見知らぬ土地である。どうすればいいかまったく見当もつかない。しょうがないので、だめもとで電話をかけてみることにする。

『非常事態宣言発令のため、現在、全ての通常回線は不通となっております』

公衆電話からは、無情にも不通のアナウンスが流れるだけだった。「どうですか？」

シノが不安げに聞いてくる。シンジはだめだったという風に首を横に振る。

「待ち合わせはたぶん無理だと思う。シェルターに行こう」

「そうですね」

シンジはふと道路を見た。そこには一人の少女が立っていた。シノではない、別の少女が。

「どうかしましたか？」

シノが不思議そうに聞いてきた。我に帰り、もう一度道路を見ると、少女はどこにもいなかった。見間違いだっただろうか。

「何でもないよ。行こうか」

シンジがそう言っ、歩き出そうとした瞬間、地面が突然大きく揺れた。店のシャッターや、窓ガラスがびりびりと揺れている。

二人が後ろを振り返ると、山の方からモビルスーツと戦闘ヘリが何かから間合いを取るように後退してくるのが見えた。そして、山の裏から、巨大な人型の怪物がのっそりと現れた。

シノとシンジは啞然としてその光景を見ていた。

Mission 3 : Angel Attack Apart

ネルフ指令室には逐一、使徒の移動が報告されていた。使徒はますますに第三新東京市に向かっていているらしい。使徒がモニターに映し出されると、冬月は静かに冷静すぎるほど冷静に言った。

「十五年ぶりだねえ」

ゲンドウもそれに静かに答える。しかし、その声にはどこか嬉しさがかもっているようにも思えた。まるで、子供がなくなっていたと思ったおもちゃを見つけたような感じだった。

「ああ、間違いない。・・・使徒だ」

モニター越しの使徒は、二人を見つめているかのようなだった。

地球連邦軍は攻撃を開始した。ビーム及びミサイルを惜しげもなく、使徒に撃ち込んでいく。

「目標に全弾命中！」

報告をするが、それはあまりにも無意味な行為だった。なぜなら、使徒には傷一つ、ついてはいなかったからである。

使徒は右手からビームのようなものを放出し、戦闘ヘリを貫く。

ヘリは、シンジとシノの目の前に落下する。思わず二人は尻餅をついた。

使徒はふわつと飛び上がり、ヘリを踏みつける。ヘリは爆発し、爆炎をあげる。

そのとき、一台の車が目の前に現れた。ドアが開き、女性が声をかけてくる。

「ごめん。お待たせ」

使徒に踏み潰されそうになりながらも、シンジとシノを乗せ、車は発進した。モビルスーツ隊と戦闘ヘリ群は攻撃を続けるが全く効

果はなかった。

ネルフ指令室では、報告が上げられるたびに、連邦軍の将校達が檄を飛ばしていた。使徒に傷一つつかない現状に焦っているようだ。ゲンドウと冬月はその光景を冷ややかに見つめていた。

「やはり、A・T・フィールドか？」

「ああ、使徒に対し通常兵器では役に立たんよ」

冬月の問いに、ゲンドウは連邦軍をあざ笑うかのように答えた。

「はい、予定通り、発動いたします」

連邦軍将校達がなにやら指示を受けている。作戦の命令のようだが……。

戦闘の影響のないところから観察していたミサトは連邦軍の動きを見て、叫んだ。

「ちよつと、まさか、N2地雷を使うわけ！？」

とつさに、シノとシンジをかばうミサト。

「ふせて！」

巨大な爆発、使徒は爆炎に包まれる。次の瞬間、爆発の衝撃が車を襲って、吹き飛ばすのだった。

ネルフ指令室では、連邦軍の将校達だけが、歓声を上げる。

「残念だが、君達の出番はなかったようだな」

いやみな一言に、冬月は顔を少しだけしかめたが、ゲンドウは全く動じていなかった。

「大丈夫だった？」

口の中が砂だらけで、しゃべりにくそうにしながら、ミサトは二人に問いかける。

「はい、私は大丈夫です」

「僕も大丈夫です。口の中がシャリシャリしますけど」

シノもシンジもかなりしゃべりづらそうにして答える。

「そいつは、けっこう。それじゃあ、いくわよ。せーの！」

三人で力をあわせて、横転した車を押す。どうにか元の体勢に戻すことが出来た。

「ふうー。どうもありがとう。助かったわ」

「いえ、僕らのほうこそ、葛城さん」

「どうもありがとうございます。葛城さん」

シノとシンジは先ほどのお礼を丁寧にする。

「ミサトでいいわよ。改めて、よろしくね。碇シンジくん、神威シノさん」

「「はい」」

二人は控えめに、しかし、しっかりと返事をした。

指令室では、使徒がどうなったかを調べていたが、センサーとモニターがやられたために難航していた。

連邦軍の将校達は倒しているはずと、たかをくくっていた。

「センサー、回復します」

「爆心地にエネルギー反応」

切迫した声で、報告が上がってきた。

「馬鹿な！」

将校の一人が、怒号を発する。

モニターが回復する。そこには、使徒が映し出されていた。

「我々の切り札が・・・」

核を除けば最強の兵器が、使徒には通用しなかった。

ぼろぼろの車でネルフに向かいながら、本部に連絡を入れると、ミサトは内心でばやいた。

（ああー、もう最悪。せっかく買ったばっかなのに、もうべっこべ

こ！ローンが後33回と修理費か……。おまけに一張羅の服まで台無し！せっかく気合入れてきたのに。とほほ……)

何の為に気合を入れる必要があったのだろう……。

「あの、ミサトさん？」

ミサトはシノの一言で、われに返る。ミサトは平静を装って、答える。

「ん、なに？」

「良いんでしょうか？こんなことして……」

後部座席に座っていたシノは隣においてあるバッテリーをしきりに見つめていた。

「ああ、平気平気。今は非常時だし、車が動かなきゃどうしようもないでしょ？それに、私甲見えても、国際公務員だしね」

ミサトは、豪快に答える。シノは完全に圧倒されてしまっ言葉も出ない。

「説得力に欠ける言い訳ですね」

シンジは思ったことを述べた。ミサトの格好を見るとどうも国際公務員には見えない。それに、車が動かないのなら、迎えを呼べばいい話だ。

「かわいい顔して、意外と落ち着いてんのね」

「そ、そうですか」

シンジはムツとした様に返答する。ミサトは冗談交じりに告げる。

「ごめん、ごめん。おっとこの子だもんね」

「ミサトさんも年の割りに、子供っぽい人ですね」

シンジはまたしても思ったことを冗談半分で言った。

(シンジくん。そんな事を言ったら……)

シノの心配どおりに、ミサトは車を左右に揺さぶった。自分がかかわれるのが癪に触ったらしい。

シオンはネルフへの指揮権委譲に伴って、指令室に呼び出された。千鳥かなめの監視は獣戦機隊とウルズチームが行っている。

光子力研究所には、ゲッターチームが新型機のテストを兼ねてやってきていた為、さほど苦戦はしなかったのだ。

「シオンくん、すまないね」

ゲンドウの言葉には抑揚がなかったので、感情が読み取れなかった。何を考えているのかわからない。

「使徒ですね・・・」

モニターを見て、シオンは率直に告げた。

「そうだ。足止めをしてほしい」

「わかりました。しかし・・・」

「その間の監視は我々で行おう」

シオンが要請する前に、ゲンドウは承諾する。まあ、シエルターにいる限り、大丈夫なはずではあるが・・・。

「足止めの方法は、そちらに任せるよ」

「それでは・・・」

至って、事務的なやり取りを終えて、シオンは格納庫に向かった。それと同時に、全員に集合をかけた。

シオンが格納庫に着くと、全員そろっていた。その中には、兜甲児やゲッターチームの姿もあった。

「協力してもらってすまない」

シオンはまず、謝辞を述べた。甲児は気にするなと言う風に、答えてきた。

「なあに、困ったときはお互い様ってことよ！」

「そうさ。気にすることは無い」

竜馬もそれに賛同した。結果として、獣戦機隊が行かなくても、勝てたわけだが、その心遣いだけでもありがたいがたかったのだらう。

「で、シオン俺達はどうするんだ？」

クルツが先を、うながしてきた。シオンは少し渋い顔をしながら話す。

「使徒の足止め、つまりはおとりだそうだ」

「はあ、天下のスーパーロボット達を捕まえて、そりゃねえよなあ」
「そこでだ」

クルツのぼやきに、シオンは不敵に笑いながら、宣言するように言い放つ。

「俺達で、使徒を撃破しようと思う」

「でも、通常兵器が効かないんでしょ？」

マオがすぐさま問いかける。N2地雷さえ効かなかった敵に、M9は当然として、スーパーロボットと言えども、対抗できるかは、微妙なところだ。

「それについては、ロイドさんから説明があります」

ロイドが、自信満々に前へ出てきた。

「ロイドの科学講座！」

「真面目にやってください」

シオンは、頬をひくつかせながら、注意する。だが、ロイドはそれでもノリをかえようとはしない。

「はいはい、それでは説明しよう。使徒はA・T・フィールドと言うバリアを張れるらしいのです。したがって、そのバリアを突き破ればいいのですが、光子力やゲッター線の力なら、つきやぶれる可能性が高い。こんなんでましたけど」

「よくわからねえな」

甲児がぼやく、他の一同もなんだかよく理解していないようだった。

「つまり、マジンガーやゲッターロボなら使徒を倒せるかもしれないってことだよ」

シオンの言葉に少しは納得する一同だが、亮だけは難色を示した。
「可能性の話だろ。バリアを破壊できなかったら？」

「そのときは撤退するぞ」

シオンはさざりと言つと、使徒殲滅の作戦について話し始めた。

Mission 3: Angel Attack B part

結果的に言えば、全力で倒す気で行かなければ、全員死んでいただろう。そういう意味では、シオンの決定は正しかった。

使徒が現れると、まずは遠距離からクルツが狙撃をした。予想通り、弾丸はA・T・フィールドに阻まれて、使徒には当たらない。『ウルズ6（クルツ）から各機へ、A・T・フィールドに阻まれ、狙撃失敗。これより第二ポイントに移る』

続いて、宗介とマオのM9が使徒に向かって、ハーブン・ミサイルとショット・キャノンを発射、しかし、これも効果がない。今度は使徒も反撃に出る。ヘリを撃墜したときのようにビームを出す。宗介とマオはその攻撃をよけながら逃げていく、その間も攻撃の手は休めない。

使徒は、M9を追っていく。そこへ、狙撃の第二段が襲う。今度もA・T・フィールドに阻まれ、弾丸は届かない。だが、動きに俊敏さのない使徒は後ろを振り向こうとした瞬間、無防備になる。

そこへマジンガーとゲッタードラゴンが現れ、使徒に攻撃する。

「うなれ、鉄拳！ロケットパンチ！！」

「トマホウウウク・ブーメラン！」

二つの攻撃が使徒へと迫るが、これもはじかれてしまう。

「だめか・・・、第二段階へ移行」

シオンは作戦を第二段階へ移行させた。

ミサト、シンジ、シノはネルフ内部で迷子になっていた。

「おつかしいなあ。この道で合ってるはずんだけど・・・」

ミサトは地図とにらめっこをしながら、必死に道を確認している。「しかし、リツコはどこいったのかしら？ごめんね、まだ

なれてなくて・・・」

ミサトは申し訳程度に謝った。シノは丁寧には仕方ないという風に言葉をかけたが、シンジは車の中で渡されたマニュアルに目を落としましたま、

「さっき通りましたよ。ここ」

冷静に答える。シノは苦笑いをし、ミサトはばつの悪そうな顔をした。

「でも、大丈夫ですよ。システムは利用するためにありますから」「そうよね。シノちゃんは優しいわね」

シノのフォローを利用して、シンジへのあてつけのように言ってみたが、シンジはマニュアルに没頭していて、聞いていなかった。

ダンクーガが使徒へと断空剣を振り下ろす。A・T・フィールドを切り裂き、使徒にその刃が届きそうになるが、間一髪で避けられてしまう。

すかさず、鉄拳を繰り出すがこちらはA・T・フィールドに阻まれる。しかし、ダンクーガは確実に使徒を追い込んでいった。

「真っ暗ですよ」

「何も見えませんね」

赤木リツコ博士と合流し、なにやら暗い部屋に連れて来られた。

シノとシンジはそれぞれに言葉を発した。

次の瞬間、明かりがつく、そこには巨大な顔があった。いや、巨大なロボットが液体につかっていた。

「顔？巨大ロボット？」

シンジはただ驚くばかりだったが、シノは嫌なものでも見るかの

ように、目をそむけた。シノにはなぜ、自分が目をそむけたのかわからなかった。

とっさにシンジはマニュアルを開く。リツコが真実を告げた。

「マニュアルには載っていないわよ。人が作り出した究極の汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機。建造は極秘裏に進められた。我々人類の最後の切り札よ」

リツコがそこまで話し終えたところで、シンジは誰にともなく疑問をつぶやいた。

「これも、父の仕事ですか・・・」

「そうだ。久しぶりだな」

その疑問に答えたのは紛れもなく、父親である碇ゲンドウその人であった。防護された部屋の中で、こちらを見下ろしている。シンジは思わず目をそむけた。

その様子を見て、いや、シンジの姿だけを見ると、ゲンドウは告げる。

「出撃」

使徒のビームをダンクーガは何とかよける。そして、間合いを取る。

『ポイントに到達したぜ』

シオンに忍からの通信が入る。シオンは待つてましたとばかりに、ダンクーガ、ゲッタードラゴン、マジンガーZに指示を出す。

「今だ！」

ダンクーガが両手を突き出し、使徒を全砲身でロックオンする。

マジンガーとゲッターもスタンバイに入る。

「断空砲フォーメーション！やってやるぜ！」

「ブレストファイヤー！」

「ゲッタービーム！」

三方向から巨大な破壊エネルギーの塊が襲ってきて、使徒は飛び上がって、逃げようとするが、いつの間にか片足を切断されていたために、逃げ切れず、直撃を受けるのだった。

《3・2・1 Time out Reformation》

アクセルモードでバリアを展開されるより早く足を切断したヒュッケバインが現れると同時に、爆発が起きた。

『ヒュー、派手な花火だな』

『油断すんじゃないわよ。まだ倒したって確認してないんだから』
『全くだ』

マオと宗介はクルツを注意したが、内心では勝利を確信していた。しかし、シオンだけは、嫌な予感がして、すぐに全員を下がらせた。かなりのダメージを受けていたものの使徒は健在だった。

『あいつ、化け物か！？』

クルツはただ驚愕するしかなかった。シオン以外の一同もただ茫然としている。全機体のエネルギーもぎりぎりだった。シオンは作戦失敗を悟ると、直ちに撤退を命じた。

『足止めにはなった。・・・撤退だ』

シオンは苦虫を噛み潰したような表情で、モニターに映る使徒をにらみつけた。

エヴァ格納庫では押し問答が繰り返されていた。

「出撃！？零号機は凍結中でしょ！？まさか、初号機を使うつもりなの！？」

ミサトは初号機を一瞥すると、困惑したように言った。それに対し、リツコは決然とした態度でのぞむ。

「他に方法はないわ」

ミサトはさらに困惑を深めていた。

「レイは、動かせないでしょう！パイロットがいないわよ！」

そう、パイロットがいなければ、エヴァは動かせない。“パイロット”がいなければ・・・。

ミサトは一瞬シンジを見たが、思い直した。しかし、その予想は当たっていた。

「さっき届いたわ」

「マジなの？」

リツコはそれに沈黙で答え、シンジに呼びかける。

「碇シンジくん」

「はい」

「あなたが乗るのよ」

「え？」

シンジはただ、立ち尽くすだけだった。その後も押し問答が続いたが、結局ミサトが折れた。

シンジはゲンドウに問いかける。

「父さんは、なぜ僕を呼んだの？」

「お前の考えている通りだ」

「じゃあ、僕がこれに乗ってさっきのと戦えって言うの!？」

「そうだ」

シンジは裏切られた気分だった。確かにそこまで期待していたわけじゃない。でも心のどこかでシンジはそれを信じていたのだ。

シンジは涙ながらに訴える。

「嫌だよ。何をいまさらなんだよ!父さんは僕が要らないんじゃないのかなかったの?」

しかし、その言葉の真意はシノ以外には伝わらなかった。そして、シノはだんだんと腹が立ってきた。

ゲンドウは冷徹に告げる。

「必要だから呼んだまでだ」

シンジはうつむいて訴え続ける。決して届くことのない訴えだった。

「なぜ、僕なの?」

「他の人間には、無理だからなあ」

「無理だよそんなの。見たことも聞いたこともないのに、出来るわけないよ！」

「説明を受ける」

「そんな……。できつこないよ。こんなの乗れるわけないよ！」
「乗るなら早く乗れ。乗らないなら帰れ！」

周りの人間はただ黙っているだけだった。沈黙を破ったのはシノだった。シノの怒りは頂点に達していた。

「シンジくん。帰ろう！」

全員の視線がシノへと注がれる。それを蚊ほどにも感じずにシノは続けた。

「帰ろ。こんなのにシンジくんが乗る必要なんてないよ！」

ミサトはシノに近づくと、その頬を平手で打った。

「いい加減にしなさい！ そんな事言ってる場合じゃないのよ！」

シノはひるまずに言い返す。

「じゃあ、なんで他にも乗れる人を育てなかったんですか？ 探さなかったんですか？ 乗れるように設計しなかったんですか？ それに、中学生に戦わせるなんて、地球連邦の法律に違反しますよ？ ああ、超法規的組織でしたよね。でも、モラルってものを考えたらどうなんですか？ この偽善者！」

シノが、そこまでまくし立てるとは思っていなかったのか、ミサトは思わずたじろぐ。

「……シノちゃん。ありがとう」

「当然のことですよ。さ、帰りましょう」

「……うん」

しばらくシンジは考えていたが、うなずいた。その様子を見て、ゲンドウは冬月に指示を出す。

「レイを起こしてくれ」

「使えるかね」

「死んでいるわけではない」

「わかった」

ゲンドウはレイに呼びかける。その声にはどこかいたわりの気持ちがあるような気がした。

「レイ」

「はい」

「予備が使えなくなった。もう一度だ」

「はい」

レイは今にも消え入りそうな声で返事をした。

リッコもシンジの様子を見て、エヴァのプログラムをレイ用に書き換えさせている。

ただ一人、ミサトだけが、シンジを呼び止めていた。

「駄目よ逃げちゃ。お父さんから何よりも自分から」

「逃げちゃ、どうして駄目なんですか？」

シンジは静かに反論した。逃げ出してもいいことなんてなかったけど、今はシノがいる。ミサトには答えることが出来なかった。

使徒が活動を再開した。今度は目から極大のビームを放った。それはジオフロント内部にまで貫通するのだった。

衝撃がドック内を襲う。衝撃で、照明が落下してくる。

「危ない！」

シノとシンジは危うく、下敷きになるところだったが、何かが守ってくれた。見上げると、それはエヴァンゲリオンの腕だった。

リッコは驚愕の表情でそれを見つめている。

「まさか、ありえないわ！エントリープラグも挿入していないのよ！動くわけないわ！」

「インターフェイスもなしに動かした。いえ、守った！？いける」
ミサトは確信した。シンジにならエヴァに乗り、使徒を倒すことが出来ると。

シンジはシノを見た。さっきまでの強気が嘘のように不安な顔をしている。それでもシノは立ち上がって、シンジをうながした。
「行こう」

（上にいるのか・・・、さっきのやつが・・・。今は出て行けない。それなのに、攻めてきたらどうなる？シノはどうなる！？）

シンジは自問する。そして、決意を固めるためにつぶやいた。

「逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ！」

「シンジくん？」

シノが不安そうに見つめる中、シンジはスッと立ち上がるとリツコのほうに向き直った。そして、言い放った。

「やります。僕が乗ります」

エヴァ発進の準備が始まった。エントリープラグが挿入され、ＬＣＬが注入される。シンジは思わず息を止めてしまう。

「大丈夫。肺がＬＣＬで満たされれば、直接血液に酸素を取り込んでくれます。すぐに慣れるわ」

しばらくして、抵抗むなく、肺にＬＣＬを受け入れるシンジ。

「気持ち悪い」

「いったん乗ったなら、我慢なさい。すぐに慣れるわ」

シンジはミサトにはげまされたが、このままでは出撃する前に死んでしまうのではないかと思った。

シンクロー率は安定していた。これならエヴァを動かすのには何の問題もなかった。

主電源が接続され、拘束器具がはずされる。そして、エヴァはリフト台に乗せられて、発進のときを待った。

「かまいませんね？」

ミサトがゲンドウに最終確認をする。

「もちろんだ。使徒を倒さなければ、我々に未来はない」

「いいんだな？本当に」

冬月の問いかけに、ゲンドウはうつすらと笑ったが、誰にも気づかれはしなかった。

「発進！」

急激な加速でリフトが上昇していく、シンジには巨大なGがかかり、苦悶の表情になるが、何とか気絶はしなかった。地上に出るとすぐ目の前には、使徒が立っていた。

別室に通されたシノは必死に祈っていた。

（シンジくん、死なないで！無事に帰ってきて！）

Mission3:Angel Attack B part(後書き)

一気にここまで投稿しましたが、いかがでしたでしょうか？
今後の参考にもなりますので、感想などお待ちしています。(出
来れば、評価もお願いします)

Mission 4：憑神覚醒 A p a r t

「シンジくん。いいわね!？」

「はい」

シンジはミサトの言葉に答える。声音は平静そのものだ。

最終安全装置がはずされ、エヴァがリフトオフされる。エヴァは腕をだらんと下にたらし、猫背の状態で立っていた。

リッコはシンジに指示を出す。使徒殲滅をぶつけ本番でやるしかなかった。

「シンジくん、今は歩くことだけを考えて」

(歩く・・・)

シンジは戸惑いながらも指示に従った。そして、歩くことをイメージした。すると、エヴァは見事に一步を踏み出した。

指令室ではどよめきが起った。レイでさえ、7ヶ月かったことを彼は乗ってすぐにやってのけてしまったのだ。

リッコも驚きを隠せずに、つぶやいた。

「歩いた」

「歩く・・・」

シンジは次の一步を踏み出そうとしたが、エヴァはバランスを崩して転倒してしまう。

「シンジくん、しっかりして。早く、早く起き上がるのよ!」

ミサトは早口のそう告げたが、エヴァは使徒に頭をつかまれて、持ち上げられてしまう。そのまま腕をもがれそうになり、シンジは自分の腕でもないのに痛みを感じて、苦悶の表情で腕を押さえる。

「エヴァの防御システムは!？」

リッコはオペレーターの伊吹マヤに確認する。

「シグナル作動しません」

「フィールド無展開」

マヤに続き、日向マコトからも防御不可を告げられる。

「ダメか」

リッコは焦った。やはり、エヴァを完全に操ることは出来ないらしい。

そうこうしているうちに、ボキッという嫌な音と共にエヴァの腕が折られる。さらに使徒は、エヴァの頭部に腕から直接光弾を打ち込む。ミサトは必死に叫ぶ。

「シンジくん！よけて！」

よけるはずもなく、右目に激痛を感じて抑えるシンジ。使徒は続けざまに光弾を放っていく。だんだんと、装甲が破壊されるエヴァ。

ついには、右目を貫通する光弾、エヴァは串刺しにされたまま、ビルに縫い付けられる。さらには、右目から血のようなものが噴出するのだった。

次々と絶望的な状況が報告される。シンジの生死も不明だ。

「シンジくん！」

ミサトは必死に呼びかけるが応答はなかった。

「初号機、完全に沈黙」

オペレーターの青葉が初号機の戦闘不能を告げる。リッコは焦燥を露わにして、ミサトに指示を仰ぐ。ここでの作戦指揮官は彼女なのだ。

「ここまでね。作戦中止。パイロットの安全を最優先！プラグを強制射出して！」

マヤに指示を出す。しかし、返答は制御不能という、さらに絶望的な内容だった。ミサトはさげんだ。

「何ですって！？」

シオンは機体のエネルギー補給が終わるまで、他のメンバーは待

機させた。そして、格納庫に戻りロイドに詰め寄っていた。

「なゼリミッターを？」

各機体には武器の出力にリミッターがかけられていた。つまり、武器の威力が落ちていたのである。

そんなことができるのはロイドくらいなものだろう。

「大変だっただよ？」

いつものごとくかわそうとするロイドにシオンは強い語調になる。

「話をそらさないでください」

ロイドはため息をつきながら、話し出した。

「ネルフからの依頼だよ」

「ネルフが・・・？」

シオンは困惑した。使徒を倒してしまっただけなら、不都合でもあるのだろうか？

「ネルフが欲しいのは、自分たちが使徒を倒したっていう事実だからねえ。ただ、使徒を倒せばいいわけじゃないのさ。それに、彼ら、エヴァのデータやら何やらをくれるって言うしね」

考えてみれば、確かに当然のことだ。シオンたちで倒せるなら、戦闘での経験が上のシオンたち（ミスリル）に頼んでしまえばいいのだ。ネルフはその存在意義を失ってしまう。

まあ、ロイドにはそんなことはどうでも良く、データが欲しかっただけらしい。

しかし、そんなことを言っていて、地球上の生物が滅んだらどうするのだろうか。相手はセカンドインパクトを引き起こした怪物と同類なのである。

「でも、そんなことを言っていたら、何も救えない」

「確かに、失敗だったかもね・・・。外の様子を聞くと・・・」

エヴァの苦戦は、格納庫にも伝わってきていた。

「それに、エヴァのパイロットは14歳だって言うしね」

ロイドの何気なく告げた言葉にシオンは敏感に反応した。

「なんで、言ってくれなかったんですか！？」

「言ったら、僕らじゃどうにもできないのに、君はネルフにたてつくだろうからね」

確かに、ネルフのことに口出しすべきじゃない。口出ししてもどうにもならないことはわかってる。しかし、シオンは憤りを感じずにはいらなかった。口出しについては、ミスリルに対しても同じことだ。

しかも、14歳の少年を乗せるなどもつてのほかだった。いくら超法規的組織だとしても、モラルは守るべきだ。

「ヒュツケバインを出します」

シオンはヒュツケバインのところへ向かう。ロイドもそれに続いた。シオンが不思議そうにみると、ロイドは飄々と答えた。

「まあ、データもらつても、死んじゃあ意味ないからねえ」

使徒はゆっくりとエヴァに近づき、止めを刺そうとしたが、何者かに割つて入られ、吹き飛ばされてしまった。

それは、アクセルモードのヒュツケバインMK-2だった。

《3・2・1 Time out Reformation》

時間制限を使い切り、通常形態に戻るヒュツケバイン。

「こちらはシオン・ヴィタールです。援護しますので、パイロットの救助をしてください！」

指令室にシオンの声が響き渡る。ミサトはシオンに返答する。

「了解！感謝します。しかし、あなたは・・・？」

エネルギーはロイドがブラックホールエンジンの封印を解いたため、問題なかったが、通常形態では傷一つつけられないのは、わかりきっていた。アクセルモードはエンジンの暴走の恐れがあるので、もう使えないのだ。

「大丈夫です。それよりも早く救助を！」

シオンは通信を切ると、使徒に向き直った。マジンガーたちの補

給が終わるまで、耐えるしかない。

『シオンくん、聞こえるかい？』

ロイドが通信を入れてくる。口調はいつもの飄々としたものだ。

「なんですか？」

シオンはほとんど聞き流しに近い状態で返答する。

『ブッラクホールエンジンを解禁したから、新しくモードチェンジが使えるよ』

「な？」

アクセルモード以外にモードチェンジがあるなんて聞いていない。
『時間がないからね。よく聞くんだよ。わかったかい？』

「いいから、早く言ってください！」

シオンはあせった。使徒がこちらに攻撃を仕掛けようと、近づき始めたからだ。

『名は《アバターモード》、解除キーワードは《スケイス》。強く叫ばないと起動しないから』

「なんでですか!？」

シオンは不可解に感じて問う。

『僕の趣味!』

「ああもう!」

時間の無駄だったと後悔しながらも、シオンはすぐさま起動にはいる。思い切り息を吸い込み、叫ぶ。

「スケエエエエイス!」

《AVATAR MODE Awakening》

AIがモードチェンジを確認し、ヒュッケバインの色が紫から黒へと変わる。それは、死神か悪魔、いや、魔王が光臨したような姿にヒュッケバインをかえた。

《Complete》

シオンは機能を確認する。通常形態のものとこの形態専用の機能があるらしい。しかし、戦闘に使える専用機能は三つしか使えなかった。

「ロイドさん、これってまさか・・・」

『未完成だよ!』

ロイドは恐ろしいことをさらっと言ってきた。

(本当に生き残れるのか!?)

シオンは巨大な不安に襲われるのだった。使徒はすぐそこまで迫っていた。

「くっ、やるしかないな・・・」

シオンはフォトンライフルを放つ、弾丸はA・T・フィールドを突き破り、使徒の肩に穴を開ける。シオンは思わず間抜けな声を出してしまった。

「へ？」

《第七の碑文タルヴオス、それは復讐するもの、復讐それは現実と他人の拒絶。夢の許容》

兵装管理画面に不可解な文章が表示される。シオンにはなぜか、その書いてある意味がわかった。

「つまり、これは・・・」

使徒が光弾を放ってくる。しかし、シオンは機体を全く動かさなかった。誰もが直撃だと思ったが、光弾は何かの障壁にはじかれる。日向が信じられないとでもいうような声で報告してきた。

「こ、これは! A・T・フィールドです!」

リッコがそれに反応する。エヴァと使徒以外は持ち得ないものだった。いや、使用できないものだったほうが正しいか・・・。

「そんな馬鹿な! ありえないわ!」

「何でもいいわ。パイロットの救助急がせて!」

そんな事よりも、ミサトはシンジの救出を急がせた。

シオンはビームソードを取り出す。そして、ビームの刃にA・T・を収束させるように念じる。

《Exceed Charge》

それに呼応するかのように、AIが告げ、ビームソードは巨大な剣と化する。

それを引つさげ、シオンはヒュツケバインを宙たかくに舞い上がらせ、落下と同時に使徒に切りつける。

「くらえ！A・T・ブレイカー！」

真一文字に両断され、使徒は青い体液を噴出する。ヒュツケバインはその体液をもろにかぶり、青く染められていった。

しかし、それだけのダメージを受けながらも、使徒はまだ立ち上がる。

「なら・・・」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！」

シオンがもう一度切りつけようとしたその瞬間、ヒュツケバインの横を影が通り抜け、使徒に飛びついた。それはエヴァだった。

「・・・どうということだ？」

動かなかったエヴァがいきなり動いた。困惑してシオンはつぶやいた。

しかし、悩んでいる暇はなかった。

エヴァはヒュツケバインにも襲い掛かったのだ。

Mission 4：憑神覚醒 B part（前書き）

今回は、会話パートメインです。それで、いつもより長くなってしまいました。

Mission 4：憑神覚醒 B part

「エヴァ、再起動！そんな！？動けるはずありません！」

マヤが混乱気味に報告してくる。

「まさか・・・」

「暴走！？」

ミサトとリツコが順番につぶやいた。その表情は驚愕で満ちている。

シオンが使徒に切りつけると同時に、初号機が立ち上がった。咆哮の後に、いったんしゃがみこみ、ヒュッケバインの横を通り過ぎて、使徒に飛び掛る。使徒も抵抗を見せたので、エヴァは一度後退する。

そして、ヒュッケバインに気づき、襲い掛かってきた。

「ちい！」

シオンはA・T・フィールドを展開するが、エヴァはそれを引きちぎろうと手を差し入れる。

『シオン、戻れ！』

ロイドの呼びかけにシオンはいったん撤退をすることにした。このままやれば、シンジを殺してしまうかもしれない。

シオンは目くらましにバルカンを使い、撤退する。

エヴァはヒュッケバインを追おうとはせず、咆哮をあげ、再び使徒に向かっていった。

「勝ったな」

冬月は確信的につぶやいた。

使徒はA・T・フィールドを展開する。それに止められるエヴァ。

「ダメだわ、あれがある限り」

「使徒には接触できない」

またもやミサトとリツコが順番に分析を述べる。

エヴァは腕の破れた装甲板を修復する。

「すごい」

ミサトの驚愕の声と同時に、またもやA・T・フィールドを引きちぎろうと、手を差し入れる。そして、その腕にありったけの力を込める。

「初号機もA・T・フィールドを展開。位相空間を中和していきます」

マヤが矢継ぎ早に報告を入れる。しかし、リツコはそれを否定した。

「いえ、侵食しているんだわ」

ついに、初号機はフィールドを完全に引きちぎり、破壊する。使徒は咆哮を上げるエヴァにビームを食らわせる。しかし、エヴァはのけぞっただけで、使徒の腕をつかみ、お返しとばかりにその腕を引きちぎり、蹴り飛ばす。

使徒は吹き飛ばされ、ビルに激突してようやく止まる。

エヴァは使徒をビルごと押して、のしかかる。そして、殴る。使徒の突起物をもいで、それを使って殴る。本能が告げるかのように、使徒の赤い水晶の部分を叩き続ける。

水晶体にひびが入り、今にも破壊されそうになると、使徒はエヴァに絡みついた。

「まさか、自爆する気!？」

ミサトが直感で叫ぶのと同時に、使徒は光を発して自爆した。十字の爆炎があがる。

「エヴァは？」

ミサトが反射的につぶやくと、それに答えるかのように、エヴァが爆炎の中から現れた。

シンジが意識を取り戻すと、彼はまだエヴァの中にいた。そう、シンジは生きていたのだ。そのとき、エヴァの頭部装甲板がはずれ、その真実の顔が露わになる。シンジがビルの窓越しに見ると、それはとてもグロテスクな、生物的な顔だった。

そのとき、突然右目が再生され、シンジを見つめてきた。その瞬

間、

「う、う、うわあああああああああああ！」

シンジは悲鳴を上げると、また意識を失った。

目覚めると、そこは病室だった。真っ白な天井、真っ白な壁、隣を見るとシノがベットに突っ伏して眠っていた。一晩中看病してくれていたようだ。

「知らない天井だ・・・」

シンジはふと思いついたことをつぶやいた。

3日後、シオンとロイドはゲンドウに呼び出された。部屋に入ると、シオンは開口一番で謝罪した。

「この度は、差し出がましい事を致しまして、まことに申し訳ございませんでした」

深々と礼をするシオンにゲンドウは平静な声で告げる。

「頭を上げたまえ。シオン少佐。こちらは、気にしてはいない。むしろ感謝している」

シオンはホッとした。かなめの護衛に支障をきたしてしまうことになったら大変だからだ。

ジオンが頭を上げると、冬月が改めてしゃべり出す。

「今日呼び出したのは他でもない。面通しだよ」

「自己紹介ですか？何のために？」

ロイドは時間の無駄だと思い、率直に聞いた。シオンにも面通しをする意味がわからなかった。

「失礼します」

後ろから女性の声が聞こえてきた。ロイドとシオンが振り向くと

そこにはミサトが立っていた。

「ネルフ作戦部長の葛城ミサト一尉です。どうぞよろしく」

シオンは慌てて名乗り返す。

「ミスリル作戦部、シオン・ヴィタール少佐です。よろしく」

「じゃあ、借りてきますね」

「は？」

シオンは意味がわからず、聞き返す。ミサトはシオンをどうするつもりなのだろうか？

「いいから、来て」

ミサトは有無を言わせぬ口調でシオンを引きずり、どこかへと連れて行ってしまう。

「どういうことですかねえ？」

ロイドはシオンを勝手に連れて行かれて、少しだけムカツとして、問いただす。

「正式な指令は後から来ると思うが、使徒との戦いに全面的に協力してもらうことになるだろうから、シオンくんを面通しさせるのだよ。エヴァのパイロットと」

冬月の答えに、ロイドは納得したが、ひとつだけ忠告した。

「あのー、構わないんですけど、そちらのほうこそ覚悟できてますか？」

「なんの覚悟だね？」

冬月の口調からすると、彼らは何も知らないようだ。

「エヴァのパイロットを一人失う覚悟ですよ」

ロイドはとても嫌味に二人にそう告げた。

「それでは、しーつれい！」

ロイドはいつもの調子に戻って、部屋から退室した。後に残された、ゲンドウと冬月は顔を見合わせた。

「葛城一尉！」

シオンは後を追いつながら、ミサトに呼びかける。

「ミサトでいいわよ」

「それじゃミサトさん。俺に何をしろって言うんです？」

シオンには理解不能な事態だった。突然呼び出され、面通しだとかわけのわからないことを言われて、今はミサトについていくしかない状況だ。

「面通しよ」

「だから、誰とですか？」

だんだん指令室とは違う方向に来ていて、今は医療関係のゾーンになっている。医者とても面通しをさせようというのだろうか？それこそ、ナンセンスすぎる。

「着いたわ」

ミサトはある、部屋の前で立ち止まった。シオンは入院患者のプレートを見た。

「碇シンジ？」

「そう、碇シンジ。エヴァのパイロットで碇司令の息子よ」

シオンの疑問に答えるかのように告げると、ミサトは病室に入っていた。そして、シオンもそれに続いた。

病室には誰もいなかった。

「あれ？」

ミサトは間抜けな声を上げる。シオンは冷たいまなざしで告げる。

「どういうことですか？」

「お、おかしいわね。あ、看護師さん」

どうやら、迎えに行く場所を間違えたらしい。シオンはため息をついた。こんな人物が作戦指揮を執って大丈夫なのだろうか。

シンジとシノはロビーに向かっていた。向こうからストレッチャ

ーに乗せられて、少女が運ばれてきた。その隣にはゲンドウが付き添っている。シンジはとっさに目をそらす。

すると、ストレッチャーの少女と一瞬目が合った。それは不思議な雰囲気少女だった。

過ぎ去って行くゲンドウをシノは睨みつけた。

「行こう」

シノはシンジをうながして、先へ進んだ。シンジは少しだけ後ろが気にはなったが、シノについていった。

シオンとミサトは急いでロビーに向かっていた。

「ごめん。間違えちゃった」

「大丈夫ですよ」

シオンは気にしていなかった。ロイドの意地悪さに比べたら、かわいなものだ。

「このエレベーターに乗ればすぐだから」

エレベーターがつく、それに乗り込む二人。扉が閉まるとミサトはシオンに質問した。

「ねえ、子供との接し方ってわかる？」

「良くわかりませんよ。ただ、個々の人物にあわせるべきだと思います」

シオンは推論を述べる。子供ではなく、一人の人間として扱うこと、それが重要だと彼は思った。ミサトが聞き返す。

「それは、経験上？」

シオンは微笑しながら首を振る。

「一般論ですよ。ある種のね」

「なるほどね。ありがとう」

シオンはミサトが何でそんな事を聞くのか理解に苦しんでいた。エレベーターが止まり、扉が開く。

ロビーのベンチには背の細い少年と長い髪のすらっとした少女が座っている。シオンは少女の顔に見覚えがあった。どこで見たかは覚えていなかったが……。

「ごめんね。お待たせ」

「いえ、大丈夫ですよ」

ミサトが謝ると少年は静かに答える。年の割りに落ち着いているようだ。

（この子がシンジくんか、確かに父親と似ているな）

「そちらの方は？」

少女がシオンに自己紹介を求めてくる。

「こちらはシオン・ヴィタールさん。シンジくん、あなたを救ってくれた人よ」

シオンに代わって、ミサトが紹介する。

「はじめまして」

シオンは二人に挨拶をした。シンジは驚いていた。

「シオン・ヴィタールって《死の恐怖》の？」

子供にまで浸透しているとは、通り名とは恐ろしいものだ。

「よく知ってるね」

「ええ、シノちゃんに聞きましたから」

「シノちゃん？」

隣の少女が自己紹介をした。

「お久しぶりですね。私です。神威シノです」

それは、ウズミナラアスハと運命を共にした閣僚、神威トウゴの娘だった。シオンは、オーブ解放戦に参戦したときに会っている。通りで、見たことがあるわけだ。

「久しぶりだね。元気そうで何よりだよ」

シオンは素直に再開を喜んだ。シンジが横から話しかけてくる。

「あの、助けてくれてありがとうございました」

「いや、別に当然のことをしたまでだから……」

「あのー、盛り上がってるところ悪いんだけど、そろそろいいかし

ら？」

ミサトは蚊帳の外に置かれたようにつまらなそうな顔をしながら話しかけた。

ロイドはリツコからデータを受け取ると、質問を受けた。

「あの、機体は何なんです？」

ロイドははぐらかしもせずにシステムの根幹について話す。

「占拠される前、火星の遺跡から発見された技術を使用した機体なんですよ！技術については、ロスト・テクノロジーと呼んでいます」

シンジとシノはどういう訳か、ミサトが引き取ることになった。シノとシンジはネルフの施設でいいと言ったのだが、ミサトは強引に決めてしまった。

「で、何で俺までつき合わされてるんでしょう？」

面通しが終わるとシオンは自室に戻ろうとしたのだが、またもやミサトに強引に引っ張られてきてしまった。

「気にしない、気にしない！大勢のほうが楽しいでしょ！」

「気にしますよ！報告が・・・」

「大丈夫、大丈夫！」

ミサトは根拠もないのに、そんな言葉を繰り返していた。

「シオンさん大丈夫ですか？」

シンジに心配されて、シオンはどうしようもなく答える。

「ああ、大丈夫だよ」

「ちよつと寄り道するわよ」

ミサトは車を走らせ、第三新東京市を一望できる場所に着いた。
「もうそろそろね」

ミサトは時計を見ながら、街を見下ろす。他の三人もそれにならう。

サイレンと共に、地面の中からビルがはえてきた。夕日をバックにしたその光景は絶景と呼ぶにふさわしかった。

シオンたちはただただ、圧倒されるだけだった。

ミサトはシンジに語りかける。

「これがあなたの守った街よ」

ミサトはマンションに車を止めた。シオンはまたもや既視感を覚えた。

「ここが、あなた達の新しい家よ。荷物はもう、届いてるから」

シンジとシノは遠慮気味に、入ろうとする。ミサトは待ったをかけた。

「ストップ！ここはあなた達の家だって言ったでしょ？」

シンジとシノは躊躇いながらも、告げる。

「「ただいま」」

「お帰りなさい。シオンくんも上がっていった」

シオンはもはやあきらめたのか、部屋に上がることにした。

「お邪魔します」

部屋に入ると、奥から酒の臭いがして、さらに、笑い声が聞こえてきた。聞き覚えのある声だった。そう、酒宴など開いているはずのない人物達だった。

シオンはダッシュでリビングに入ると、笑い声の主は声をかけてくる。

「お！我らが女神のご帰宅か？」

「ミサト。勝手に始めてるわよ！」

クルツとマオはそう言って振り返ると真っ青になる。上官のシオンに作戦行動をそっちのけで、酒宴を開いているのを見つけたの

だから当然だ。

「シ、シオン。なぜここに？」

シオンはクルツの言葉を見無視して、告げる。

「覚悟は出来てる？」

「いや、これは・・・」

マオの言葉も無視して、シオンは静かに告げる。

「減給決定」

「ままま、抑えて、抑えて」

ミサトがなだめに入るが、シオンの怒りは収まらなかった。宗介はきちんと任務をこなしていると思ったからだ。そのとき、誰かが部屋に入ってきた。

「食料を調達して・・・」

宗介は真っ青になる。

「しょ、少佐、なぜここに！？」

シオンはもう言葉もなかった。いくらネルフも監視についているとは言え、これはあんまりだ。

「私が誘ったのよ」

ミサトが弁明してきた。説明によると、昨日、偶然、隣の部屋でかなめの監視をしているとミサトが挨拶にきたそう。そこで意気投合して、今日に至るそう。

シオンはミサトに注意する。

「誘わないでくださいよ。こちらの任務があるんですから」

「いいじゃないか。危険は半減したんだぜ？」

クルツが訳のわからないことを言ってきたので、シオンは思いっきり怪訝な顔をする。マオがきちんと説明をしてくれなければわからなかっただろう。

「かなめをねらってる敵の施設を破壊したそうよ」

「なるほど」

シオンはようやく納得する。クルツはそれに釈然としない様子だ。
「お前さあ、もうちょっと推理しようぜ」

「クルツ、あんたの言葉には指示語が足りなさ過ぎなんだよ」
シオンは正論で言い返した。

「ところで、減給は・・・」

マオが上目目線で迫ってくる。シオンは苦笑交じりに答える。

「色仕掛けしなくてもいいですよ。減給無しです」

宗介はほつと胸をなでおろし、クルツとマオは万歳をしている。

「ビールと缶詰しかない・・・」

ほっておかれたシンジは、冷蔵庫を開けた。ビールと缶詰がぎっしり詰まっている。

「ミサトさん、どういう食生活を・・・？」

シノはあきれたようにミサトに聞いた。ミサトはあっけらかんと答える。

「若いうちは大丈夫だって！それに、宗介くんが何か買ってきてくれたみたいだし」

ミサトとの同居に一抹の不安を覚えるシンジとシノだった。

本格的に酒宴が始まった。その途中で、クルツとマオが宗介の学校での失敗談や、パンティ事件などを話すと、ミサトは大爆笑だった。（シノは顔を赤らめ、シンジは苦笑いだった）

さらに、料理などの当番がそこで決められて、ほとんどがシンジとシノの分担になった。

みんな、楽しそうにしていたが、シンジはそうでないような気がシオンにはした。

酒宴から離れてシンジとはベランダに出た。それを追って、シオンは優しくシンジに問いかけた。

「疲れたかい？」

シンジは苦笑混じりに肯定した。

「ええ、大勢で食べるのになれてなくて」

「まあ、あれだけのことがあったのに、いきなりこれは無いな」

シオンはシンジに同意した。外傷はほとんどなかったにしても、退院したばかりの人間にこの騒ぎはつらいだろう。

さらに、シンジにとっては初対面の人間だらけだ。緊張するだろう。他のメンバーが思いやりと繊細さに欠けているのだ。

「でも、皆根はいい奴なんだ。仲良くしてやって。まあ、君が決めることだけさ」

シンジは外の景色を眺めながら、返事をする。

「はい」

「・・・ちよつと質問してもいいかな？しゃべりたくなければ、俺は戻るけど・・・」

シオンはかなり遠慮気味に聞いてくる。シンジにとってはかなりまれな経験だった。シンジはもうちよつとしゃべることにした。シオンとは話しやすかった。

「いいですよ」

「これからもエヴァに乗るの？ああ、別に答えなくてもいいよ」

シンジは少し考えた。

「乗るつもりです」

「なぜ？」

シオンに理由を聞かれ、シンジは戸惑った。今ならば、逃げることも出来る。それに、シンジ自身が戦わなければならない理由もない。だけど、乗っていれば、周りがシンジを認めてくれる。

シオンはシンジの答えを待たずに、語り始めた。

「俺はね、シンジくん。君にエヴァに乗ってほしくないんだよ」

「なぜですか？」

シオンにはシンジがこわばったのがわかった。しかし、それでも続けた。

「エヴァに乗って戦うなんてくだらないことをしてほしくないからさ」

「くだらないですか・・・」

シンジは落胆しているようだった。それはそうだろう。ミサトにはほめられたのに、シオンには否定されたのだ。

「街を守ったのはえらいよ」

「なら・・・」

「でも、それでも君はこれ以上乗らなくていいと思う」

「くだらないから？」

「ああ」

シオンの言葉にシンジは逆に反撃に出た。

「じゃあ、シオンさんのやってることもくだらない」

「ああ、くだらないよ。いや、もっと悪いな。殺人をしているのだから、殺しているのだから・・・」

シオンは自分が偽善者だと知っている。多くの憎しみを買う行為をし続けていることも知っている。それでも、シオンは自分の目的のために戦っていた。

シオンは優しい口調でシンジに語りかけ続けた。

「君がやるうとしてるのは、そういうことだよ」

「使徒は人じゃないです」

シンジが言ったことは正論だった。しかし、シオンはそれを肯定した上で、なおも続ける。

「確かに、でも生物ではある。それと、兵器に乗ると、戦争に駆りだされる可能性もあるしね。だけど、今なら間に合う。今なら君はひきかえせる。逆に言えば、エヴァに乗るなら、それほどの覚悟をしなきゃいけないってことなんだよ・・・あ、長々とごめん。別に忘れていいよ。最終的に決めるのは君だから」

シオンはそう言うとりビングに戻るうとした。しかし、シンジに腕を引かれて、立ち止まる。シオンは振り向かなかったが、シンジは語りだした。

「僕には、わかりません。エヴァに乗る意味とか覚悟とか・・・、でも、エヴァに乗ることで僕は僕でいられると思うんです」

シンジはしっかりとしゃべりきった。シオンは振り返って、優しく告げる。

「乗りたければ、乗ってもいいよ。最終的な決定権は君にあるから。でも、一つだけ忘れないでほしい」

「なんですか？」

「エヴァに乗ることだけが君の価値じゃないって事さ。少なくともシノには、必要とされてるだろ？」

シオンはリビングに戻っていった。一人残されたシンジは遠くを見つめながらつぶやいた。

「『エヴァが全てじゃない』か」

酒宴が終わり、シオンたちが引き上げると、シンジは風呂に入つて、自分の部屋に戻った。次にシノが風呂に入って、彼女もまた自室に向かった。

最後にミサトが湯船につかっていると、ドアをノックする音がした。

「だれ？」

「シノです」

「どつたの？」

眠れないのだろうか、そんな事を思っていると、いきなり謝罪の言葉が告げられた。

「この前は、ごめんなさい！」

「へ？」

「ミサトさんだって、本当は凄く心配だったはずなのに・・・」
格納庫で言ったことを気にしているようだった。

「気にしないで、あなたが言ったことのほうが正しいんだから」
実際、ミサトはシンジを道具扱いしてしまったことも後悔していた。

「でも、謝っておきたかったんです」

「真面目ね」

「そついうしつけだったんです」

「そつ、もう寝たら？明日から学校でしょ？」

「そうですね。では、おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

ミサトはシノと関係を改善できてよかったと思った。これからの生活が本当に楽になる気がした。ホッとしてミサトは自嘲気味につぶやいた。

「彼女のほうがよっぽど大人ね」

M i s s i o n 4 : 憑神覚醒 B p a r t (後書き)

いかがでしたでしょうか？感想などお待ちします。

番外編：第一回スパロボ講座（前書き）

原作の設定を少しずつ紹介しようと思い、さらに、ただ書いたのでは、おもしろくないと思って、書いてみました。

番外編：第一回スパロボ講座

「ロイドの第一回スパロボコーギー！」

いきなりロイドが叫んだので、シオンはぎょつとしてロイドに話しかけた。

「ロイドさん！？一体何を！？」

「いやあーね、これってファンフィクションでしょ？」

「はい？」

ロイドはいつもの調子で答えたが、シオンは全くわかっていないようだった。しかし、ロイドはそのまま続ける。

「色々な作品が登場している訳なんだけど、その作品がわからない人がいると思うんだよ。そこで！作品の設定とかを紹介しようとするという企画なんだよ！」

「いまいちわかりません」

シオンは困惑顔だ。ロイドは思案して、こう告げた。

「ま、いいや。とりあえずこれ読んで」

シオンは訳がわからないまま、読み始めるのだった。

「はあ、『この講座は上の通り、作品を知らない人の為の作品紹介コーナーです。ですので読み飛ばしてもらってかまいません。本日の紹介作品はスーパーロボット大戦シリーズ、フルメタル・パニックシリーズ、新世紀エヴァンゲリオンです』」

「はい、ありがとうございます！」

「もう一回聞きますけど、何ですか、これ？」

「読者サービスだよあ！それでは、はじめのよー！」

ロイドは嬉々として、説明を開始した。

「まず、この小説の大元になっている。スーパーロボット大戦から、シオンくんこれ読んで」

シオンは反論したが、あきらめたのかわたされた紙を読み始めた。
「『ゲームソフト、スーパーロボット大戦シリーズは、古今東西の

戦闘ロボアニメが一つの世界に集約されたらという、IFの物語（クロスオーバー作品）。クロスオーバーすることによって、死ぬはずの人間が助かったり、敵の人間が仲間になったりする。主人公達の会話パートも人気をかくしており、キャラクターゲームとしての一面もある」

「はい、ありがと。つまり、いろんなアニメのロボとキャラクターの夢の共演なのだよ」

ロイドがまとめた。シオンはいまだに理解できなかった。ロイドは心を読んだかのように、シオンに言った。

「読者サービスだよ！次、いってみよう」

今度はロイドが自ら説明する。

「『フルメタル・パニックシリーズ、賀東招二先生原作の小説をアニメ化した作品。小説でのキャラクターの挿絵は四季童子先生が書かれています。』

ストーリー：傭兵集団ミスリルは出来る限りの平和を目指して、活動していた。ミスリル所属の相良軍曹に新たな指令が下される。それは千鳥かなめの護衛だった。しかし、なれない学校での生活、もとい潜入は彼を窮地に追い込む。果たして彼の運命は！？

まあ、ロボットアクションもさることながら、学校でのギャグも秀逸だね。僕はギャグパートの方も好きですね。

作品の主題に一つに、恋愛もあります。最新刊では、相良宗介が千鳥かなめに告白してます。

ウイスパードの能力の謎つてのも主題の一つですね。ラムダドライバという謎の装備も出てきますし、『・・・ラムダドライバは僕でさえ発明出来なかったんだよ！あー！くやしー！』

ロイドが悔しがって、床を転がり始めたので、シオンは先へと進めた。

「えっと、次は新世紀エヴァンゲリオンを紹介します」

シオンは苦笑いしながら説明を開始した。

「『新世紀エヴァンゲリオン、監督は庵野秀明さん、キャラクター

デザインは、hackのキャラデザもやっている貞本義行さん。
ストーリー：謎の生命体、使徒と戦うために結成された組織ネルフ、
主人公碇シンジは父であり、ネルフ司令である碇ゲンドウに呼び出
される。彼は必然的に使徒との戦いに巻き込まれていく。

キャラクターの魅力、ロボアクションのカッコ良さ、緻密なストー
リー性と多くの謎が人々の心をつかみ、社会現象にまでなった。し
かし、原作、劇場版共にラストには賛否両論が存在する。』

ロイドが復活して感謝をする。

「ありがとう。シオンくん。今回はこんな感じです。気になった人
は原作を読んだり、鑑賞したりしていただけたら、よりふかーく理
解出るといいまーす！」

「で、結局これって何だったんですか？」

シオンは、怪訝な顔をしながらロイドに聞く。

「だから読者サービスだよ。スザク君！」

「俺はシオンですよ！それと、読者って誰ですか！？」

「読者は読者だよ」

「だから・・・」

シオンとロイドはいつまでもそんな押し問答を繰り返していた。

第一回講義終了

番外編：第一回スパロボ講座（後書き）

どうだったでしょうか？かなり足りないとは思いますが、興味をもたれた方は、原作を鑑賞していただいたほうがいいと思います。文字だけでは限界があるので。

もしくは、Wikipediaでもいいと思います。ここより、はるかに詳しく書かれてあります。

これも私の文才のなさが原因ですが、なにとぞお許しください。感想などお待ちしております。長々と失礼しました。

M i s s i o n 5 : L e t ' s C o m b i n e A p a r t (前書き)

試験で、なかなか更新できず、ごめんなさい！B p a r t も明日にはアップします。

Mission 5: Let's Combine Apart

宴会から戻って来て、しばらくすると、テッサから通信がはいった。シオンは丁寧に挨拶する。

「お疲れ様です。大佐殿」

「もつと楽しっていていいですよ」

シオンはふうっと、息を吐き出した。そして、プライベート用の口調に戻す。

「怒らないんだな」

「なんのことですか？」

テッサはわからないという風に答えてきた。これには、シオンは驚いたようだ。

「いや、ネルフとの関係無視して、使徒を倒そうとしたことだよ」

テッサはようやく気づいた様な声を出しながら告げた。本当に意に介していないようだった。

「気にしてないですよ。あれは正しい判断でした。ところでシオン、エヴァのパイロットが14歳って本当ですか？」

シオンは何でそんな事を聞くのか不思議だった。シオンならともかく、テッサは他の協力組織（つまり敵組織以外）の内部事情に深く干渉するような人物では無いからだ。

「ああ、そうだけど」

「そうですね……。また、私達と同じような子供が……。」

シオンとテッサはその能力ゆえに幼少の頃に親を亡くしている。そして、戦いの運命をたどるしかなかった。二人はそんな子供は自分たちだけでいいと思っていた。

だから、そんな子供が少しでも減るように偽善と知りながら、二人は戦いに身を投じていた。シオンがシンジを説得しようとしたのも、そのためだ。

「シオン？シンジくんを説得できそうですか？」

テッサが少し不安げに聞いてくる。シオンはかなり相手を言いくるめるのがうまい。まあ、それも時と場合によるが……。

「もうしたよ。けど、50%ってとこかな」

今回は自信がなかった。あの年頃の少年を説得したことは無いし、それに、彼は他人に認められたがっている。だから、迷いながらも自分の意思で乗ってしまいかもしれない。シオンはそう思っていた。「それに、人殺しの言うことを聞くのもどうかと……」

『シオン！』

テッサがいきなり大声で叫んだ。シオンは耳をキーンとさせながら、やってしまったと思った。それはテッサの前では禁句なのだ。

『あなた、まだそんな事を……』

テッサは悲しい声になる。しかし、これはどうしようもないことだ。いつかそれが重荷になって、シオンを死に追いやるとしても、彼はそれを背負うと決めたのだから……。

「なんてねー！冗談だって！ホント、テッサはかわいいよな」

シオンは極めて明るい声で返答する。テッサは恥ずかしくなったのかまたもや声を荒げる。

『シオン！』

「いや、お前だって時々やってるだろ？それに、プライベートの時はこれでいいって、言ってたじゃん」

『言ってます。やってません！』

シオンはテッサをからかうことで前言を忘れさせようとした。しかし、テッサはそれに乗るような振りをしつつも、シオンのことを気遣っていた。テッサは話題を変える。

『まったく。それで、エヴァのパイロットですけど、自分の意思で乗るなら……』

「わかってる。サポートするよ。全力でね」

自分の意思で乗ると決められてしまったら、シオンとテッサにはどうすることも出来なかった。心が命じたことは本人でも逆らえない。

テッサは最後に、シオンに正式に通達した。その口調は作戦中の凜としたものに変わっている。

『では、引き続き、千鳥かなめの護衛とネルフへの出向任務をお願いします』

「了解」

明日から修学旅行だということもあり、次の日は午前中授業だった。シオンは学校から戻ると、ヒュッケバインの設定をチェックしながら調べものをしていた。

それが終わり、ヒュッケバインから降りると、ロイドが立っていた。

「さうて、ハッキング・ツールの感想は？」

ヒュッケバイン・アバターモードには戦闘に使えるものの他に、もう一つの機能があった。それは、アバターモードを発動したおかげで、いつでも使えるようになっていた。

「かなり使えましたよ。それにしても、『第六相マハ、それは魅惑するもの、魅惑それは心惑わすこと、そして、心への侵入』第七相もですけど、しゃれた文句ですよ。機能の説明」

シオンは皮肉を込めて、ロイドに言った。もし、理解できなかったらどうするつもりだったのだろう。

「そのときは、残念でした。で、終了。それで、なーにを調べてたんだい？」

しかし、ロイドは意に介していないようで、いつもどおりの態度だった。まあ、わかっていたことではあるが……。

シオンは、話題を変えるために、ロイドの質問に答えることにした。

「OZの動向をば」

OZ、事実上地球圏を支配しているロゴスの秘密結社の一つで、

昨今の地球連邦に反抗する組織を駆逐するために暗躍してきた。しかし、ある意味、人道的でもある。この前に、少女を救出するために奇襲をかけたのは別の組織の施設だ。

「それで何がわかったんだーい？」

「色々とわかりましたよ。コロニーの動きとか、新型機の開発状況だとか、異星人のこととかね」

ロイドは、他のことには興味がないように、シオンに頼んできた。「それじゃー、新型機のことだけパソコンに送信・・・」

「もう、しました」

ロイドが言い終わらないうちに、シオンはそう告げて、足早にどこかへ去っていった。

ロイドはそんなことは気にも留めず、パソコンのほうへ走っていった。

体育館の裏、シンジの目の前には二人の同級生が立っていた。一人は黒のジャージを着たスポーツマンタイプの少年。もう一人は、眼鏡をかけた、機械に詳しそうな、よく言えば、インテリ風の少年である。

シンジが現れるなり、ジャージの少年がシンジを思いっきり殴り飛ばした。シンジは背中から倒れて、口から血を流す。

シンジがそれをふき取ると同時に、相手を睨みつけると、こぶしを揉みながら、少年は堂々と言い放った。低いが、とてもはつきりと聞こえる声だった。

「すまん、転校生。わしはお前を殴らないかん。殴っとな、気がすまへんのや」

シンジには全く理解できない状況だったが、眼鏡の少年が説明してきた。

「悪いね、この間の騒ぎで、あいつの妹さん、怪我しちゃってさ。

ま、そういうことだから！」

眼鏡の少年は笑顔でそれだけ言うと、ジャージの少年と共に去って行こうとした。シンジは、

「僕だって、乗るしかなかったんだ。乗りたくて乗ったんじゃない」
その眩きが聞こえたのか、ジャージの少年が眼鏡の少年を押しつけて、再びシンジに殴りかかるうとした。

しかし、その手は取り押さえられた。三人が見ると、シノが立っていた。

シノに手を抑えられて、ジャージの少年はシノの手を振り払おうとするが、出来なかった。少年はシノに食って掛かった。

「なんや、自分は？」

「あなたが私の友人にひどいことしたから、止めただけです。鈴原トウジさん」

シノははつきりと断言した。トウジは思わずひるんでしまった。

シノは、シンジを立ち上げらせると、シンジと去ろうとした。

「待たんかい！」

トウジはシノにつかみかかるが、シノはあっさりとそれを避け、足を引つ掛けて、転ばすのだった。

「私、コーディネーターだから、あなたの数倍強いですよ？」

シノはトウジを見下ろしながら、言い放つ。トウジは立ち上がり、食って掛かる。

「なんで、そいつをかばうんや！そいつがおらんたら、妹は怪我せんですんだんや！」

「さつきも、言いましたけど、友達だから。それにしてもあなた最低ですね。自分で守りきれなかったからって、八つ当たりですか？妹さんが見たらどう思つかしらね？」

トウジは完全にシノに圧倒され、言葉を詰まらせた。シノとシンジはその場を離れるのだった。

ネルフ本部は会議室でシオンと獣戦機隊のメンバーがミーティングを行っていた。

退屈なのか、忍があくび混じりに言う。

「なあ、シオン。本当に異星人なんているのか？」

「OZの情報だから、確実だろうな。数日中に異星人の行動が開始されるはずだ」

シオンはスクリーンに映像を出した。そこには、明らかに地球のものではない何かが映っていた。

「OZの情報によると、数日前、この物体が宇宙から飛来したそう
だ」

雅人が疑問を投げかける。

「どうして、数日中に活動を開始するとわかるんだ？」

「俺と同時にOZにハッキングしてたからな」

「それじゃあ、発信源とかわかってるんじゃないか？」

雅人の問いにシオンは質問で返しながらも答えた。

「異星人と戦闘しに行くつもりか？残念だけど、向こうも巧妙で、
発信源は特定できなかった」

「しかし、OZは何をしていたんだろうな？」

亮の問いかけにシオンはこう言った。

「異星人が何を目的にしているかわからない以上動けないだろうな」

OZも普通の会社などと同じで、利益になることなら率先して行動する。つまり、得体の知れないものに手を出すことは出来ないはずだ。

そして、シオンにはもう一つの可能性が見えていた。

「もしくは、異星人なんかより、重大なことが起きるのかもしれない
い」

「重大なこと？」

沙羅の問いかけに、シオンはうなづく。

「また戦争が始まるかもしれない」

そのとき、放送が入った。

『シオン少佐、シオン少佐。指令室までお越しください。繰り返します……。』

シオンはミーティングをそこで終了させ、すぐに指令室に向かった。

Missions: Let's Combine Apart (後書き)

ご感想などお待ちしております。

Missions: Let's Combine Bpart (前書き)

お待たせしました。Bパートです。

Mission 5: Let's Combine B part

南原コネクションに四人の少年が集まっていた。コネクションの一室に集められた彼らは着替えさせられた。

彼らは待たされていた。それも長い時間。かれこれ二時間は経過している。

赤い服を着た。やんちゃそうな少年、あおいひょうま葵豹馬はイライラを隠せない様子だ。

「ちえつ、何だよ。あらゆる手段を使って南原コネクションへ急いで来いとかいったくせに・・・」

向かい側に立っているどこか斜に構えた少年、なにわじゅうぞう浪花十三も同意して、文句を言う。

「こんなに待たせるなんて、一体どういっつもりや!？」

さらに、この中では最年少であろう眼鏡をかけた小学生くらいの少年、きたこすけ北小介も賛同する。

「そうですね。僕なんか、空港から特製ジャイロで急いで飛んできたって言うのに・・・」

最後に巨漢の少年、西川大作が発言した。

「オイは消防車ではるばるここまで来たのに!」

彼らがそんな事をぶつくさ言っていると、扉が開き、老人と少女が出てきた。

「ようこそ、諸君。私が君達をお招きした南原だ」

老人が歓迎の挨拶をすると続いて少女が挨拶をした。

「孫の南原ちづるです」

待たされていた面々は怒っていた事など忘れて、ちづるに見ほれてしまった。

しばらくして、はつとした豹馬が南原博士に食って掛かる。

「ん!？何だよ、おっさんは自分の孫を見せるために俺達をここへ呼んだのか!？」

「いや、そうではない。もう一つ、君達に紹介した物がある。ちづる準備を」

しごくもつともな意見に南原博士に弁明して、ちづるに何かの準備を始めさせた。

「はい」

ちづるが返事をして、近くにあった操作盤のスイッチをいくつか押すと、ガラス越しに巨大な顔が現れた。覗き込んでみると、それは巨大なロボットだった。

豹馬は驚き、叫んだ。

「うわわ！何だ、このロボットは！？」

南原博士が説明を開始する。

「地球を守る超電磁ロボ、コン・バトラーV。君達に乗ってもらうために誕生した最新メカだ」

十三は呆然とつぶやいた。

「このバケモンにワイらが・・・」

十三の言葉をついで、豹馬がまたもや叫ぶ。

「乗るんだって！？」

他の二人はあまりにも突拍子もない、話にすっかり言葉をなくしてしまった。南原博士は説明を続ける。

「私は以前から異星人による地球侵略の危険性を提唱していた。そして彼らは姿をあらわし、ここに向かっておる」

とんでもない話に小介は仰天して聞き返す。

「ほ、本当ですか！？」

南原博士はうなずいて肯定し、五人に出撃を命じる。

「諸君！ちきゅうを守る為に、コン・バトラーVで彼らと戦うのだ。諸君ならば出来る！」

南原博士の言葉に葵豹馬はすぐに決意したのか、威勢良く乗ることを宣言した。

「よ、よおし、わかった！やってやらあ！」

時間は少しさかのぼり、ネルフの指令室。シオンは猛然と反論していた。

「救援に行くのは構いません。しかし、それにシンジ君まで連れて行くのは・・・」

「反対ですか？」

リツコがシオンが言葉を言い切る前に、問いかけてくる。

「ええ、はつきり言って、彼にそんなことをさせる必要はないでしょう？」

スペック上はエヴァは戦力として申し分ない。しかし、シンジを対使徒戦以外に参加させる前例を作りたくなかった。こちらのほうが重要な問題だった。

しかし、ゲンドウはシオンに告げた。

「問題ない。君が指揮をする必要も守る必要もない。あれは、こちらの所有物だ。それに、エヴァに乗りながら、この戦闘で生き残れないようなら、そこまでの素材だったということだろう」

あまりにも冷酷な言葉にシオンは、激昂しかけたが、なんとか抑えながら、反論した。

「実の息子さんに対して言うことですか？」

「人類の存亡がかかっているのだよ」

確かに、ゲンドウが言うように、人類全体から見れば、一人に生命などちつぽけなものかもしれない。しかし、自分の息子の命と人類の存亡を天秤にかけるなどナンセンスだ。シンジを思いやる気持ちは無いのだろうか。

「僕は乗ります」

ふと見ると、指令室の入り口付近にシンジが立っていた。

どのくらい前からそこに立っていたのだろう。どれくらい話を聞いたのだろう。

「心配してくれて、ありがとうございます。シオンさん」

シンジの一言にシオンは何も言えなくなってしまった。

「話は終わりだな。出撃を頼む」

ゲンドウの一言で全てが動き出した。シオンはシンジに駆け寄って、たずねる。

「いいのか？本当にそれで」

シンジは微笑みながら答えた。

「はい」

南原コネクションに巨大な飛行物体が接近していた。その飛行物体の指令室で一人の男が笑いながら、眼下に広がる景色を眺めていた。

「ハッハッハ！こうも容易くわがキャンベル軍の侵入を許すとは・・この星の防衛網はどうなっているのだ？この分では地球の軍隊もたかが知れておるわ！」

言いながら、鳥の顔をしたその男は高らかに笑った。相当に自信があるようだ。

「ガルード様、恐れながら申し上げます」

男のそばに控えていた髪の毛が異様にカラフルな男が進言したきた。ガルードは興味深そうに聞き返す。

「侮るべきではないと言うのか？シャピロよ」

カラフルな髪の毛の男、シャピロ・キーツはうなずく。

「はい、特にミスリルという傭兵部隊はなかなか手ごわいかと存じます」

「ほう、貴様がそこまで評価するからには、それ相応の力を持っているようだな。だが、わが軍団の前では無力よ。全力だ叩き潰してくれよう！」

ガルードはあくまでも、自分の軍隊が最強であると考えているようだった。

その様子を見て、キーツはそれ以上何も言わなかった。しかし内心では、

（ふん、敵の戦力を見もせずに過小評価するなど・・・、なぜ、俺ではなくこいつが指揮官なのだ？）

この待遇に満足はしていないようだった。しかし、それは当然のことだった。なぜなら、彼は裏切り者なのだから・・・。

「さて・・・、超電磁エネルギーとやらを研究しているのは、あの基地らしき建物のことか？」

キーツは肯定して説明をした。

「はい、南原コネクションが所有する研究所です。防衛システムなども配備されています」

ガルードは、厳しい表情になり（鳥の顔なのでよくわからなかったが）、全軍に指示を出す。

「よし、あの建物を攻撃せよ！！」

飛行物体は高度を下げ、地上に近づく、それと同時に、飛行物体から巨大なトゲのある甲羅を背負った怪獣が十体降下する。怪獣が降り立つと地面が揺れ、砂埃が上がる。

それと同時に南原コネクションからも五体のマシンが出撃する。

先ほどの巨大ロボットが分離した状態のようだ。

豹馬は敵を目の前にして、誰にともなく叫んだ。

「自動発進したのはいいけど・・・、どうやって操縦するんだよ！！」

南原博士は冷静に告げる。

「心配は要らん。操縦方法や武器の使用方法はヘルメットから君達の脳に直接入力される」

驚いた十三が声を上げる。

「ホンマや。手が勝手に動きよる。これやったら何とかやれるで！」

豹馬は勢いづいて、またもや叫んだ。

「よし、行くぞ！異星人め！！」

飛行物体からマシンを見ていたガルードは嘲笑した。

「フン。あんな戦闘機もどきで余に立ち向かおうというのか・・・、手始めにあやつらから地獄に叩きこんでくれるわ!」

豹馬の乗る戦闘機方のマシンが一体の怪獣に攻撃を仕掛ける。戦闘機の両翼から四枚刃のカッターが展開され、それが回転しながら怪獣に切りつける。

しかし、怪獣は頑強で表皮を少し傷つけたのとどまった。

続いて十三の爆撃機型のマシンがミサイルを発射する。これも見事に命中、しかも豹馬のつけた傷の部分に命中するが、やはり致命傷には至らない。

南原博士が渋い顔をしながらつぶやいた。

「やはり、このままでは不利か。豹馬君、コンバインして戦うのだ!」

南原博士の言葉に豹馬はつぶやく。どうやらよく解っていない様だ。

「コンバイン・・・!?」

見かねた小介が簡潔に説明する。

「合体してさっきのロボになることでしょう!」

南原博士はそれを肯定して、合体の詳しい説明を開始する。

「そうだ。諸君の脳波が一致することによって、五体のバトルマシンは一体の超電磁ロボとなる!」

十三は博士の言葉につっこみを入れる。

「だったら最初から合体したままで出撃したほうがよかったんちゃうか!」

そのつっこみに反応して、電子音の混じった声がしゃべりかけてきた。

「ソレハ 言ワナイ オ約束デス」

豹馬は真っ先に反応する。通信用の画面にはなにやらロボットのようなものが映っていた。

「何だそのロボットは!」

南原博士が解説し、全員に指令を下す。

「このロペット君が君達の脳波を感知し、コンバインへ導く。諸君、心を一つにするのだ!!」

豹馬はさっきまでの威勢のよさを少し削がれて、困惑した声を上げた。

「う．．．いきなりそんな事を言われても．．．」

「さっきあつたばかりで心を一つになんかできるかいな!」

豹馬の言葉をついで、十三が威勢良くつつこむ。ロペットは5人の脳波を感知して、南原博士に告げる。

「5人ノ 脳波ガ 乱レテ イマス。初メテノ 実戦体験ニヨル 緊張ガ 原因デス」

南原博士は渋い顔をしながら、決断する。

「むう、やむをえん。諸君バトルマシンで敵を撃破するのだ」

言われて、豹馬たちは再び攻撃を行うが、撃破は難しく、だんだんとジリ貧になっていく。そして、怪獣はトゲの甲羅をかぶって、ボール状になると体当たりを繰り返し、バトルマシンに激突しそうになる。

思わず目をつぶった豹馬たちだが、目を開けると目の前には紫色のロボットが、怪獣を受け止めていた。

そのロボットは、怪獣を投げ飛ばすと、背中に背負っていたライフルを取り出し、怪獣に対して放つ。怪獣は蜂の巣になり、その活動を停止する。

豹馬は呆然としながらつぶやいた。

「あれは一体．．．」

「間に合ってくれたか．．．」

南原博士はそれを見て、胸をなでおろしたようだ。どっかりと椅子に腰を下ろす。

『シンジくん、アンビリカブル・ケーブル無しのEVAは5分しか活動できないわ。気をつけて』

ミサトはシンジに注意を促した。EVAといえども動かなければ鉄くずと同じである。

「はい」

その返事と共に、シオンたちの乗る機体も輸送機から地上に降り立った。シオンは全員に告げた。

「相手は異星人だ。どんな手段を使ってくるかわからない。気をつけろよ！」

言いながら、シオンは宗介・マオ・クルツのM9と共に一体の怪獣に攻撃を仕掛ける。

クルツがねらい済まして、ライフルで怪獣の目を打ち抜く、続けて宗介とマオがそれぞれ怪獣の足に向かって、攻撃する。

怪獣がよろめくと、宗介たちはその場を離れる。輸送機からは銃が射出されヒュッケバインがそれを装備する。

「G・インパクトキャノン、シュート!!」

シオンの言葉と同時に銃から黒いエネルギーが放射され、怪獣に殺到する。そして、怪獣に大穴が開き、爆炎とともに吹き飛ぶ。

ダンクーガは断空剣で敵を一刀両断する。

「諸君！ここは彼らに任せて、一時撤退するんだ」

南原博士は指示を出す、豹馬は突っぱねた。

「俺達はまだ戦える！」

十三もそれに同意して、

「そや！他人任せに出来るかいな！」

他の三人もそれぞれ戦うことを告げる。そのときロペットが反応した。五人の脳波が一致したのだ。

「コンバインOK！　コンバインOK！」

南原博士は五人に再び合体を指示する。

「よし、合体するのだ！」

脳に直接、合体方法が流れ込み、豹馬たちは叫んだ。

「レッツ！コンバイン！」

バトルマシンがVの字に並び、変形を開始する。そして各部が結合し、一体の巨大ロボットが完成する。

「よし行くぜ！ツインランサー！」

豹馬は声を上げながら、コン・バトラー用のクナイのような武器を取り出し、敵に斬りつける。その威力はすさまじく敵はばらばらになってしまう。

「はあああああ！」

シンジはプログレッシブ・ナイフを敵に突き刺す。ナイフを指した部分から、激しく火花が散る。じたばたしていた敵はその機能を停止し、動かなくなる。ゲージを見ると残りのエネルギーがもう残り少なかった。

そのとき、敵がEVAに襲い掛かった。吹き飛ばされるEVA、そして、更なる攻撃をシンジが覚悟したとき、敵の動きが止まる。

「超電磁スピン！」

豹馬の掛け声と共にコン・バトラーが回転しながら突っ込んでくる。そして、敵を貫き、空中で動きを止めると同時に、敵は爆発した。

シオンは、敵一体の足をチャクラム・シューターで切断し、そこへ宗介たちの攻撃を殺到させて、破壊すると、

「これで、あと四体か、一気に決める！《アクセルモード》！」

《AXEL MODE Standing by》

ヒュッケバイン・アクセルモードが起動する。

「《アクセルGスマッシュ》」

《Axel Smash Start up》

AIが武装の名称を復唱し、ヒュッケバインは動き出す。すると、まわりの時間がゆっくりになる。ヒュッケバインは次々に敵へと飛び蹴りを繰り返していく。

《3・2・1 Time out Reformation》

全ての攻撃を終えて、ヒュッケバインは停止する。そして、次々に敵は爆発していった。

「な、なんだ。これは・・・」

ガルダは呆然とつぶやいた。彼の軍でも下級クラスのマグマ獣だとはいえ、こうもあっさりとやられるとは、思いもしなかった。

「見慣れぬ機体もありますが、彼らがミスリルです」

シャピロは表情を変えずにガルダに告げる。

「奴等がか。ならばこのガルダ、直接・・・」

ガルダは自分の乗っているこの艦を特攻させかねない勢いだつた。シャピロはそれをいさめる。

「ガルダ様、今日はこのくらいでいいでしょう。私達の物量は彼らだけで対抗できるものではありません。それに、今あなたを失うわけにもいきません」

まあ、これは本心でもなんでもないわけだが、ガルダは納得して、撤退することにした。

ゆつくりと去っていく飛行物体。豹馬はそれを見ながら、叫んだ。
「おととい来やがれってんだ！」

戦闘が終わり、シオンは南原博士に呼び出された。

「救援していただき、感謝します」

南原博士は感謝の言葉を述べる。シオンはそれに笑顔で応えながら、

「いえいえ、これも任務ですから。ところで、さっきのロボットは一体・・・？」

南原博士はロボットについて説明を始める。

「私は長年の間、異星人の存在について研究し、それは隕石の落下によつて証明されました。そして、私は異星人の侵略から地球を守る為にこのロボットを開発したのです。ところでお願いがあります。コン・バトラークとその操縦者をあなたの隊に加えていただけないでしょうか？」

シオンは少し考えてからナンバラ博士に確認をした。

「自分の部隊は地球人同士の戦争に駆り出されることもあります。それでもかまいませんか？」

地球人を守る為に作り出されたロボットが地球人を殺してしまっ
ては本末転倒だ。まあ、ダンクーガにも言えることではあるが・・・。

「覚悟の上です。彼らにはもっとレベルを上げてもらわなければな
りません。たとえ、犠牲を払ったとしても・・・」

シオンはもう一回考えて、返答した。

「わかりました。では、彼らはこちらで預かります」

格納庫でシオンは南原博士とのやり取りを説明し、バトルチーム
の五人を紹介した。

「というわけで、バトルチームのメンバーだ」

豹馬が威勢良く挨拶する。

「バトルチームのリーダー、葵豹馬だ。よろしくな！」

十三がそれに反発する。

「なんで、お前がリーダーなんや!？」

豹馬は当然だというように理由を説明する。

「マシンの一号機に乗ってるのがリーダーって相場が決まってるん
だよ！」

雅人が納得しながら、うなずく。

「確かに、そうだな。忍も一号機に乗ってるし」

豹馬はそれを聞いて、声を上げる。

「ほら見たことか」

亮はそれに疑問を投げかける。

「確かに、忍はそうかもしれないが、ゲッターチームは確か二号機の
隼人がリーダーだぞ？」

今度は十三が豹馬に切り返す。

「ほら、見てみい！」

ふたりはにらみ合い、今にも取っ組み合いを始めてしまいそうだ

つたので、シオンは先を続けることにした。
「そういうことは、後でやってくれ」
とりあえずの挨拶が済み、シオンたちは帰還した。

『目覚めよ・・・』
声がする。かすかな声だった。しかし、はっきりと聞こえる声だった。

『目覚めよ・・・』
男は目を覚ました。

(ここは・・・?)
『目覚めたか・・・?』

また声がする。今度は男にも声の主がわかった。

「はい、わが主よ」
声は男に告げた。

『この宇宙は静寂でなければいけない・・・』
男は反応する。

「はい」
声はさらに告げる。

『この宇宙の人間は・・・失敗だ』
男は理解したようにうなずきながら、声の主に告げる。

「はい。人間を抹殺します。そして、新たな宇宙の創生を・・・」

Missions: Let's Combine B part (後書き)

これからの参考になりますので、よろしければ、感想・評価をお願いします。

Mission 6 Apart: ナデシコ発進

マオとクルツは、次の任務のために佐世保市にやってきていた。宗介とシオンは朝一の飛行機で修学旅行に出掛け、明日の朝一の飛行機で戻ってくる予定だそうだ。

獣戦機隊とバトルチームも機体の調整もかねて、第三新東京市で待機している。

M9を乗せたトレーラーを運転しながらクルツはぼやく。

「あーあー、やってられないぜ。今頃シオンは飛行機で女子といちやついてんだろぅなあ」

マオは苦笑いをしながら、クルツに切り返す。

「それは、あんたの願望でしょ？修学旅行と言っても、任務の一環なんだから。シオンはそんな事しないわよ」

クルツは意気消沈しながら、運転を続ける。突然クルツが悲鳴を上げる。

「いててて・・・！」

「なに、これ？」

マオは太ももをさわろうとしていたクルツの手を、思いきりつねりあげながら、凄みを利かせて、クルツを睨む。

「いいじゃねえか！ちよつとくらい・・・」

クルツはマオに反論しようとしたが、言い終わる前に鉄拳を食らい、それ以降さらに消沈して、運転を続けた。

「ここね」

目的地に到着し、マオがつぶやく。トレーラーは施設の中に入っていく。運転しながらクルツは疑問を投げかける。

「なんで、こんな遠くにドックを作ったんだ？佐世保基地があるだろぅに・・・」

マオは知らないという風に答える。

「あれじゃない？民間人を遠ざけるとか」

クルツは事前の情報から、真面目顔で反論する。

「でも、クルーのほとんどは民間人なんだろう？それに、連邦政府の管轄外みたいだぜ。俺らみたいに・・・」

マオは驚きながら、狼狽した声を出す。

「あ、あんた。熱でもあんの？そこまで資料を読み込んでるなんて・・・」

「ふふ、俺だつてやる時はやるんだぜ」

クルツは自然に答える。しかし、その内心は違った。

トレイラーからM9を移動させ、出向先の戦艦にのブリッジに入ると、マオはクルツの内心を理解した。

女性が多いのだ。それも、普通の戦艦にあるまじき人数である。しかも皆美人だった。艦長はまだ来ていないそうだが、その人もまた女性なのだという。

クルツは早速、女性陣とお近づきになろうと行動を開始していた。マオもヒマなので会話に参加しながら、艦長がやってくるのを待つのだった。

車の中で、ナデシコ艦長ミスマル・ユリカはさっきの男の事を考えていた。副艦長であり、親友のアオイ・ジュンはずっと考えて込んでいるユリカに思い切つて聞いてみた。

「ねえ、そんなにさっきの奴のことが気になるの？」

ユリカは難しい顔で答える。

「うーん、やっぱりどつかであつた気がするのよ」

「気のせいだよ。きつと」

「そうかなー？」

ジュンの言葉にユリカは首を傾げるばかりだった。

ユリカの乗った車を、自転車で必死に追いかける男が一人。

「あつてる、あつてるぞ」

背中にはフライパンの柄が飛び出たリュックサックをしょっている。その男が汗をかきながら必死で、車を追っている。

「確かめなきゃ」

何を確かめるつもりなのだろう。全ては男しか知りえない。

ナデシコのブリッジでは地球連合から派遣された将校達の一人がわめいていた。やはり、この異例さがそうさせているのだろう。

「バカ、ばっか」

その様子を尻目にクルーの一人、ツインテールでアッシュブロンドの少女がぼそりとつぶやく。そして、三つ編みの少女もそれに反応して、制服をセクシーに着こなしている女性に話しかけた。

「ハルカさん、あの人たちですよ？火星でコロニーに戦艦落としたの」

聞かれてハルカは三つ編みの少女に答える。

「まあ、キャンキャン騒ぎなくなる気持ちもわかるけどね」

「俺はわからないな。これだけ美人のクルーがいるのに、文句を言うなんて。いわばここはパラダイスなのに・・・」

クルツが口を挟むと三つ編みの少女が聞き返す。

「そうなんですか」

「そうなんだよメグミちゃん。うちの部隊にも女性はあるんだけど、いかんせん一人はアイドルのような存在で手が出せないし、もう一人は強暴だし・・・」

「誰が、凶暴ですって？」

クルツの物言いに、マ才は彼の首根っこをつかむ。

「だれも、姉さんのことなんて言っていないでしょ」

マ才は首をつかむ力を強くする。

「す、すみません。マ才様は美しい僕らの女神様です」

二人のやり取りをメグミとハルカは半笑いで見つめていた。アッシュブロンドの少女がまたぼそっとつぶやく。

「ばかばっか・・・」

そんな中、将校に対応しているネルガル工業の社員ゴートはがっしりとした体格と軍人のような面立ちふさわしい対応を見せていた。「彼らは各分野のエキスパートです。そして、艦長は地球連邦大学在学中、総合的戦略シミュレーションにおいて無敗を誇った逸材です」

わめいていたマツシールムカットの将校はゴートに詰め寄る。

「その逸材はどこなの!？」

「いえ、それが・・・」

ゴートが始めて言葉に詰まったそのとき、ブリッジのドアが開いた。

「みなさん! 私が艦長です! V!」

極めて軽いノリで挨拶をし、Vサインをしながら、笑顔で立っているユリカを見て、全員が呆然となるのだった。

アッシュブロンドの少女は覚めた目でつぶやく。

「またバカ?」

みんなは大概引いていたのだが、ユリカだけは、

(これで、みんなの心をキャッチよ!)

内心でガッツポーズをしていた。

「と言う訳で、門のところで暴れていた自転車男を拘束しました」

警備員の男が言うとネルガル工業社員、プロスペクターは自転車男の手の模様を見て質問する。

「パイロットかね?」

男は手を隠して、顔を背け、つぶやく。

「違う、俺はコックだ」

「こういう具合でして・・・」

警備員は困り果てたようにプロスペクターに告げる。プロスペクターは何かの機械を取り出すと、男に舌を出させて、ペンのようなもので下に触れる。

「あなたのお名前さっがしまっしょっと」

右手の機械のディスプレイに男の名前が表示される。テンカワ・アキトというらしい。居住地は、驚くべきことに占領された火星になっている。

「どうやってこの地球へ!？」

プロスペクターは驚愕と共にアキトに聞いた。だした。

「よく覚えていないんだ。あの前後のことは・・・、気がついたら地球にいた」

本人が覚えていないのなら仕方ないので、プロスペクターは別のことを聞くことにした。

「ユリカさんとはお知り合いで？」

「火星のコロニーで、あいつとあいつの家族は、俺の両親がなぜ死んだのか知っているはずなんだ」

プロスペクターは無表情ではあったが、アキトに言葉をかける。

「そうですね、あなたも大変ですねえ・・・。コックさんでしたよね？」

プロスペクターの問いかけにアキトは顔を上げる。

「よろしい、それではあなたは今日からこのナデシコのコックさんです。しっかり働いてくださいよ？」

プロスペクターの突然の申し出にアキトは呆然としたが、聞き返す。

「ナデシコ？」

「そうナデシコです」

プロスペクターが繰り返して肯定すると、彼の後ろに戦艦の映像が現れた。

そして、プロスペクターはアキトに艦内を見て回るように勧める

と、どこかへ行ってしまった。

アキトは艦内を歩き回り、格納庫のようなところへ出た。
すると大声で叫ぶ声が聞こえてくる。

「レッツゴー！ゲキガンガー！」

そう叫びながら、ロボットを動かすパイロットに整備班長のウリバタケはつぶやく。

「エステバリスだろうがよ・・・」

それを尻目に、パイロットはポーズを決めるが、ウリバタケは拡声器片手にそれを制止させる。

「ちよつとちよつと、あんた！なんなんだよ？パイロットは3日後に乗艦だろ？」

まだ調整の途中にもかかわらず、エステバリスに乗り込まれて、ウリバタケはいらいらしながらパイロットに問う。

「いやー、あはははははは！本物のロボットに乗れると思ったら、一足先に来ちまいしました。いやん、ばかん、どっかーん！」

豪快に笑いながら弁明するパイロット、それに合わせてエステバリスは動く。それはかなりコミカルな動きだった。そして、なぜかこちらから見て後ろを向いてしまう。

「なんだ、なんだ、何のまねだ！」

ウリバタケは理解できないらしく、パイロットを怒鳴りつける。
しかし、パイロットは一向にやめようとしなない。

「諸君だけにお見せしよう！このガイ様の超スーパーウルトラグレイト必殺技！人呼んで」

そう叫ぶとパイロットはエステバリスを動かしながら叫ぶ。

「ザ・スーパーアップー！」

見事なアップーのポーズをとるエステバリスだが、調整が不十分だったためか、バランスを崩して転んでしまう。

（ゲキガンガーか・・・）

アキトは苦笑しながらその光景を見つめる。

「だーははは、すげーよなロボットだぜ！手があって、足があって、

そんなもって思ったとおりになんて、なんかすごすぎてかよ」パイロットの男は子供のようにしゃいでいた。ウリバタケはそれに水を差すように、パイロットの手袋を示しながら、いやみに発言する。

「最新のイメージフィードバックだからさ。これさえありゃ、子供だって動かせるけどね」

しかし、パイロットは、鼻息一つでそれをスルーして名乗る。

「俺は、ガイ。ダイゴウジ・ガイだ。ま、ガイって呼んでくれ」

ウリバタケはデータをしながら、突っ込みを入れる。

「山田二郎ってなってるけど・・・」

ガイは、データの表示されているディスプレイを手でどかし、山田二郎について説明する。

「それは、仮の名前、ダイゴウジ・ガイは魂の名前、真実の名前なのだよ」

ガイはおもむろに立ち上がると、宣言した。

「木星人め、来るなら来い！」

しかし、その表情は見る見る曇り、顔は真っ青になる。ウリバタケは問う。

「どしたの？」

ガイはさっきまでの声とは比べ物にならないほどに弱い声で答える。

「いや、足がね。痛かったりするんだなこれが・・・」

そして、そのまま倒れてしまった。

足が少し変な方向に曲がっていたし、ウリバタケが触つてみると、それだけで痛みが走る状態のようだ。間抜けな話だが、ガイは骨折してしまったのである。

担架で運ばれる途中、ガイはアキトに話しかける。

「おい、そのしょうねーん！」

アキトは間の抜けた返事を返す。

「え？」

「あの、コクピットの中に俺の大事な宝物があるんだ！すまーん、持ってきてくれ！」

簡単な頼みだったので、アキトはコクピットの中に入る。そこには人形があった。もつと貴重なものかと思っていたアキトは拍子抜けした。

「はあ、宝物つてゲキガンガーの人形かよ」

そのとき、振動が起こり、アキトは人形に鼻をぶつける。そして、アナウンスが流れた。

『現在、敵機動兵器と地上部隊が交戦中、ブリッジ要員は直ちに戦闘艦橋に集合せよ。繰り返す・・・』

「やつらが、やつらが・・・きた」

アキトはつぶやいた。

無人の兵器たちは、小型で人が乗っていないので、恐れを知らずに突っ込んでくるために、破壊はかなり難しかった。

地上部隊はかなり善戦したが、カモフラージュのためにMSなどを一体も配備しなかったのが原因でかなり追い込まれてしまった。佐世保基地からの援軍も間に合うかどうか微妙なところだった。

戦闘艦橋に集まったユリカたちは策を練った。幸いにも敵はナデシコだけをねらっているようで、真上に集中しているらしい。

マツシールムカット将校は意気込む。

「そうと解れば反撃よ」

「どうやって!？」

ゴトーは疑問を発した。ナデシコはドックにいるのだ。すると将校はとんでもないことを言い出した。

「ナデシコの対空放火を頭上に向けて敵を下から焼き払うのよ!」
ハルカが鋭く突っ込む。

「上にいる軍人さんとか吹き飛ばすわけ？」

しかし、将校は安易に答えを出す。それは、ひどい理由だった。
「きつと、全滅してるわ」

今度はメグミが鋭く突っ込む。

「それって、非人道的って言いませんか？」

マツシユルムカット将校は二人を睨みつけるも何も言う事は出来なかった。

老いた将校、フクベはユリカに話しかける。

「艦長は何か意見があるかね？」

「はい。海底ゲートを抜けて、一旦海中へ。その後浮上して敵を殲滅します」

ユリカは凜とした態度で発案する。それにあわせてガイが発言する。

「そこで、俺の出番さ！俺様のロボットが地上へ出て敵をひきつける。その間にナデシコは発進する。かぁー、燃えるシチュエーションだ！」

しかし、ウリバタケはガイに残念なお知らせを告げる。

「お宅、骨折中だろ？」

「はっ、そうだった・・・」

ガイは心底間抜けな声をあげる。アツシユブロンドの少女、ホシノ・ルリは告げる。

「もう、でてるわ。しかも二機」

そのとき通信が入る。マオからだった。

『私達がおとりになります。今のうちに準備を』

「すみません。頼みます」

ユリカがそう言うと、マオは返事を返して、地上に出る。
「もう一機発進しようとしています」

ルリが告げた。

アキトを乗せたエステバリスはエレベーターに乗っていた。

「もう、閉じ込められるのはごめんだ。俺はコックになるんだ」
そつつぶやきながら、地上に出るのを待っていると通信が入る。

『誰だ。君は？』

「はいっ!？」

フクベに問われて、間抜けな声を上げるアキト。

『パイロットか!？』

「いやぁ・・・」

アキトはやっぱりと否定した。

「あー！あいつ俺のゲキガンガーを！」

ガイは、思い出して、さけぶ。

それを無視して、フクベはさらに問う。

『所属と名前を言いたまえ!』

「テンカワ・アキト、コックです」

アキトは顔を引きつらせながら答える。

「なにー!」

ガイは驚きの声を上げる。ジューンはユリカに確認した。

「ユリカ、あの人・・・」

「うん、・・・テンカワ・・・アキト」

返事をして、ユリカはアキトの名前を反芻する。彼女の脳内には一つのひらめきが生まれた。

「アキト、アキトだ!」

ユリカはまわりなどお構い無しに、嬉しそうな声を上げる。

『懐かしい!そっか、アキトかぁ!何でさっきは知らん振りしてたの?そっかぁ相変わらず照れ屋さんだね』

ユリカは勝手に自己完結してしまう。しかし、アキトはそんな事より、ユリカが何をしているかが気になったようだ。

「ちよちよちよ、ちよつと待て!お前そんなとこで何やってるんだよ!？」

プロスペクターが割り込んで説明する。

『彼女はこのナデシコの艦長です』

「ええー!？」

アキトは天と地がひっくり返ったような衝撃に襲われて、声を上げる。

『そうだよ。ユリカはナデシコの艦長さんだよ。えっへん』

ユリカはまた、嬉しそうにアキトに自慢する。その様子を見て、ジyunは慌てながら、ユリカに質問する。

「ちょっとユリカ、あいつ誰なの？」

ユリカは少ししてしながら、笑顔で説明する。

「うん、ユリカの王子様！ユリカがピンチのときにいつも駆けつけてくれるの！」

勝手に決め付けられて、アキトは待ったをかけるが、ユリカは構い無しに続ける。

『でも、私・・・アキトをおとりになんて出来ない。危険すぎる』

「おいおい、なに言ってるんだ？」

アキトは状況を理解できていないようだ。しかし、さらにユリカは続ける。もはや妄想の域では無いだろうか？

『わかってる。アキトの厚い決意を女の私がどうこうでき無いわよね』

「おい！ちょっとー！」

アキトの言葉はユリカに全然届かず。ユリカは勝手に決めつけて発言する。

『わかった。ナデシコと私達の命、あなたに預けるわ。だから、必ず生きて、帰ってきてね』

そういつて通信を終えるユリカ。アキトは何とか反論しようとしたが、エレベーターに乗ったのが運のつきだ。

『地上に出ます』

ルリは情報をただ伝える。

『がんばってください』

メグミは応援し、

『ゲキガンガー返せよな！』

ガイはゲキガンガーをとにかく、返還してほしいようだった。一斉にいろいろなことを言われて、アキトは混乱して叫ぶ。

「うるせー！」

しかし、わめいている暇は無い。すでにエステバリスは囲まれている状態だったのだ。

『作戦は十分間、とにかく敵をひきつける。健闘を祈る』

ゴトーの通信が切れると敵に囲まれてアキトはひるむが、しかし、さっきのユリカの言葉が脳裏をよぎる。

アキトは決意をし、敵を飛び越えて、逃走を開始する。

クルツのM9がライフルを放ち虫の姿に似た敵は爆散する。マオのM9は日本刀に似た単分子カッターで敵を切り払っていく。

次々と敵を撃破する二機だが、物量の前に苦戦していた。しかし、その状況は一転した。それには二つの要因があった。

一つはアキトのほうに敵が集中したおかげで、敵自体が減ったこと、もう一つは援軍の到来であった。

クルツとマオの機体が挟撃されかけたとき。それらはいきなり現れた。突然空から降ってきた。実際には降下しただけなのだが・・・。

一体は角のある赤い機体。もう一体は長い砲身の銃を持った白い機体。

赤い機体の両肩が開き、ベアリング弾が大量に射出される。下手な鉄砲も数を撃てばなんとやらだが、その攻撃はまさにそれで、射程内にいた敵をほとんど破壊してしまった。

白い機体も同じような感覚で、ビームを乱射して、殆どの敵を破壊してしまう。

「助かったぜ」

クルツは大きくため息をつく。弾数がぎりぎりだったのだ。マオは二機に所属を確認する。二機から返答が入る。

赤い機体のパイロットは無骨な挨拶を、

「こちらは、地球連邦軍所属、キョウスケ・ナンブだ」

白い機体のパイロットは、軽めの挨拶をした。

「同じく、エクセレン・ブラウニングよん。よろしくねん」

ナデシコではアキトが逃げる映像を見ながら、急ピッチで発進作業を進めていた。

「注水、八割方終了、ゲート開く」

まず、ルリが出る道を確保したことを告げる。

「エンジンいいわよ」

続いて、エンジンが起動したことをハルカがユリカに伝える。ここに、発進準備は整ったのである。

「ナデシコ発進です」

ユリカの発進命令をルリが復唱する。

「ナデシコ、発進」

それと同時に、ルリの手の文様が光り、ナデシコは完全に起動す。そして、ゆっくりと推進を開始するのだった。

アキトは逃げていた。ディスプレイには準備完了まで後七分と表示されている。

「あと、七分！？七分も逃げられるわきゃねえだろうが！」

絶叫して、なおも逃げながら、アキトはつぶやく。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう・・・」

その声はだんだんと大きくなる。

「いい加減にしるおお！」

ついにキレたアキトに呼応するかのように、エステバリスは敵に向き直り、腕を突き出す。するとジェット噴射でワイヤーにつながれた腕が飛んでいき、敵を破壊する。

「すげえ、ゲキガンパンチみてえ」

アキトは素直に凄いと思った。そして、素直な感想を述べた。そして、勢いづいたアキトは叫びながら、エステバリスを空中に舞い上がらせる。

「こうなったら、やるしかねえ！」

空中に上がるとアキトは二体の敵をワイヤードフリストでつかむ。「なんだ、俺って結構やれるじゃん！」

しかし、頭を一人の少女のことがよぎり、アキトに隙が生まれる。そこを見逃さずに、敵は地上用の敵とドッキングし、アキト機に向かってミサイルを発射する。

「うわあ、どうすれば！」

アキトは腕をばたばたさせる。それが操縦間に当たる部分に触れると、エステバリスはつかんでいた敵を放り投げ爆発から身を守るのだった。

エステバリスは緩やかに降下して、海面に近くなったところで何かの上に乗った。

それは、ナデシコだった。ナデシコは朝日と共に浮上するのだった。

「お待たせ、アキト」

ユリカから通信が入り、ホツとしてアキトは聞き返す。

「でも、まだ十分たってないぞ」

ユリカはまたもや笑顔で答える。

「あなたの為に急いで来たの」

ルリが敵の残存兵器を確認して、ユリカに告げる。

「敵残存兵器、ほとんど射程に入ってる」

ユリカは主砲の発射を命じる。

「目標、敵まとめてぜーんぶ！うてー！」
主砲が発射されると一瞬で敵は全滅してしまった。

一方、シオンと宗介は窮地に立たされていた。彼らの乗る飛行機がハイジャックされたのだ。

Mission 6 Apart: ナデシコ発進(後書き)

次回は、フルメタ編でアーバレストが登場します。
感想などお待ちしております。

Mission 6 B part : 攻防

修学旅行中は何もおきること無く、シオンと宗介は普通の休暇を満喫したような感覚だった。

しかし、平穏なときは破られる。

帰りの飛行機に乗ってから一時間後、シオンは独特の空気を感じとった。それは戦場でのみ感じられる独特の空気。

窓の外を見ている。しかし、どこを飛んでいるのか確認は出来なかった。

「ねえ、シオンくん。シオンくんも軍事方面とかのこと詳しいんだよね」

風間信二が話しかけてくる。彼はクラスメートで、軍事方面の情報に詳しく、そして、パンティ事件の原因でもあった。まあ、それを機会に、宗介と仲良くしているようだ。

「なんだ？」

シオンは聞き返す。何の話をしていたのだろう。

「さっき、君がキラ・ヤマトさんに会ったことがあるって聞いたんだけど・・・」

シオンは宗介を見る。宗介は申し訳なさそうな顔をしていた。シオンは宗介に言った。

「気にすんな」

別に言いふらされても支障は無い情報だ。宗介はホッとしたのか、息を吐く。

「で、会ったことあるの？」

風間の再びの問いに、シオンはどう答えようか困った。実際には会ったところの問題ではなく、共に戦ったと言うのが正しいのだ。

「ああ、会った事はあるよ。オーブにいたときにね。でも、そんなに大したことじゃないよ?」

「大したことあるよ!」

信二は興奮して、まくし立てる。

「現在の連邦の主力モビルスーツ、ストライクダガーや、オーブのM1アストレイのOS開発に大きく貢献してるんだ。いわば、彼無しに、現在のモビルスーツは無いんだよ!」

「さ、さいですか」

シオンが多少引く中、宗介はむっつりした顔をさらにむっつりさせ、苦言を呈する。

「しかし、風間。確かに、OS面では飛躍的に進化したかもしれないが、全体的に見れば、やはり、一年戦争からの積み重ねも重要では無いか? 連邦のモビルスーツの出発点は、アムロ・レイが操縦したモビルスーツなのだから」

風間は首を振りながら、さらに宗介に反論しようとする。シオンはこれ以上はついていけないと思い、しばらく外の景色でも眺めることにした。

ふと外を見ると、いつの間にかいたのだろう。戦闘機が飛んでいた。日本のものではない。

「韓国空軍のF-16戦闘機・・・」

風間がつぶやく。どうやら、旅客機は日本では無いどこかへ飛んでいるらしい。

シノは仲良くなったクラスメート、洞木ヒカリと町へ買い物へ出かけていた。食事をとるためにハンバーガーショップに入る二人。

中に入ると、シノはものめずらしそうにあたりをきよるきよると見回す。その様子を不思議に思い、ヒカリは話しかける。

「シノちゃん。こういう所は初めて?」

シノはヒカリに笑顔を向けながらうれしそうに答える。

「はい、一度は来たいと思ってたんですが、なかなか来る機会がなくて……。だから、今日はありがとうございます」

「こつちこそ、今日は付き合ってもらっちゃって……」

シノがお辞儀までしたものだから、ヒカリもつられて、お辞儀してしまう。周りから見れば変な光景だ。そこへ声がかかる。

「どいてんか」

二人が顔を上げるとシノと声の主が声を上げた。

「「あ」「」

その声は見事なまでにユニゾンしていた。

「状況は、最悪か？」

シオンはつぶやきをもらす。

小一時間経過しただろうか、飛行機は着陸体勢をとった。日本の空港ではなく、外国の飛行場にある。

着陸すると、乗客たちはざわめきだした。空港には数々の兵器が飛行機を歓迎するかのように並んでいる。

シオン、宗介は確信する。

間違いなく。ここは敵地であると。

そんな折、機内放送が入った。

『機内の皆さん。本日は当機をご利用いただき、まことにありがとうございました』

出発の時とは違う男の声だった。

（ハイジャックを利用しての誘拐……。木を隠すなら森の中とはよく言ったものだな……）

シオンはそう思っただけ感心しながらも、次の手を考えた。

トウジは不機嫌な顔をしながらカウンター席に座っていた。そして、一人を間に挟んで、横に座っているシノに文句を言い出す。

「なんで、じぶんがここにおるんや？」

シノはあくまでも笑顔でしかし、声には多少のとげを含ませながら返答した。

「あら、いちやだめでしょうか？」

二人の間にピリピリとした空気が流れる。間に座っているヒカリは苦笑いをしながら、二人をなだめる。

「二人とも、落ち着いて？ね？」

しかし、トウジはそっぽを向いて黙り込んでしまいうし、シノはヒカリに対して、こんなことを言う。

「いえ、私は冷静そのものですよ？」

先日の争いを見ていたヒカリは学級委員長として、二人に仲直りをしてもらいたかったのだが、二人は一向に折れなかった。

シノもトウジも自分なりに理由があつてのことだったので、仲直りをする必要さえ感じてはいなかった。

不意にトウジは立ち上がる。

「どうし・・・」

ヒカリの言葉をさえぎって、トウジは歩き出す。

「わるいなあ、委員長。ケンスケと約束があるさかい、これで失礼させてもらうわ。それと、シノとかいうたな。じぶん、ヒーロー気取りでいると痛い目みるで？」

シノは笑いながら、トウジに言い返す。

「それはあなたのほうでしょう？」

機内はハイジャックされているとは思えないほどにぎやかだった。

乗客の大半を占める修学旅行生たちが騒いでいるからだ。教師陣やスチュワーデスたちは目を離すと騒ぎ出す生徒たちに半ばさじを投げていた。

しかし、マシンガンを持ったスーツ姿の男達が機内に入ってくる
と、生徒たちはシンと静まり返る。

さっきまでは、まだ現実感のなかった、死というものが現実味を
帯びたからかもしれない。

一番最初に入ってきた額に傷のある男はかなめに近づいていった。
そして声をかける。

「その君」

かなめは反応を示さなかったので、男は特徴を述べて、自覚させる。
る。

「聞こえないかな？ ロングヘアのきれいなお嬢さん」

「………？」

「君のことだよ」

男はさらに近づく、ちょうどかなめを見下ろすような形になった。
少女はようやく反応を見せる。その顔からは緊張と嫌悪が見て取れた。
た。

「………なんですか？」

「マスコミに送る映像を作りたくてね。出演してくれる人を探して
いたところなんだ」

「はあ、そうですか。それはごくろーさまです」

かなめは精一杯丁寧な言葉で対応しようとしたが、棒読みだった。
「君に出てほしいんだが。いい素材だと思ってね」

男はうつすらと笑いながら、用件を告げる。かなめは手を振りな
がら、

「いいいえ。私なんかは……もう。見ての通り、ケチなコムスメ
ですから。視聴者のみなさんが不愉快になるだけですって。ホント」
「いいから来いって、なあ、遠慮せずに」

「あの、ちよつと、えーと……」

男が目配せをすると、男の部下がかなめを引つ立てた。

ここにきて、かなめも冷静さがなくなり、悲鳴のような声を上げる。

「お勧めできませんよ、あたしなんか・・・ねえ、はなして。イヤだったら・・・。どうして、あたしの!？」

必死に抵抗を試みるかなめに呼応して、恭子も悲鳴をあげる。

「カナちゃん!」

すぐさま、神楽坂恵理が駆けつけ、男たちに猛抗議する。

少しだけ応対して、リーダーらしき男はまわりに目配せすると、男たちはにやりと笑った。男は懷から拳銃を取り出すと、恵理の額に突きつける。

そして、引き金が引かれそうになる刹那、甲高い音が発せられた。かなめは思わず目をつぶっていたが、それは銃声ではなかった。

見ると宗介が、食器を拾っている。

「失礼」

それだけ言うと、宗介は席に座り、じっとコップを見つめて、沈黙した。

男は興がそがれたのか、銃をしまい、かなめをつれて、外へと出て行った。

それと同時に恵理は自分が九死に一生を得たことを理解して、倒れてしまった。

「こっちの都合はお構いなしか、女性に嫌われるタイプね」

第三新東京市に警報が鳴り響く。

ネルフ指令室のモニターには、多足の使徒が映し出されていた。

「碇司令のいぬまに、第四の使徒襲来。意外と早かったわね」

ミサトは不敵に微笑みながら、モニターを見つめている。

「前は、15年のブランク、今回はたったの1週間ですからね」

オペレーターの日向はそれに同調する。使徒は確実にここへと向かっている。

前回同様、通常兵器は意味を成していない。

「税金の無駄遣いだな」

冬月が自嘲気味につぶやいた。

「委員会から再び、特機及び、エヴァンゲリオンの出撃命令が出ています」

青葉からの報告に、ミサトは興をそがれたように、つぶやく。

「言われなくても出すわよ」

すぐさま、メンテナンスの終わったダンクーガとコンバトラーV、エヴァンゲリオンが発進体勢に入る。

「たった、一体ぐらい楽勝だぜ！」

豹馬は意気込む。ほかのメンバーもそれなりに、戦いに向けて集中力を上げていった。

（本当に大丈夫だろうか？ シオンさんがいないのに？）

ただ、シンジだけが、シオンの不在を理由に自信を持てずにいた。しかし、それでも思い直す。

（シノを守らなきゃ！）

宗介は調理室で肩で息をしていた。さっきの自分の行動によって、彼は氣力を使い果たしてしまったのだ。

「大丈夫か？」

声がかけられる。びくつとして見てみると、シオンだった。

「大丈夫であります」

「大丈夫じゃねえだろ。・・・なんであんなことを？」

宗介にはわからなかった。優先すべきは、任務であって人命ではないはずだ。なのに、なぜ、それに反したのか。

沈黙を破って、シオンがやさしく告げる。

「わからないのか……。まあ、それでもいい。お前はよくやった」
「?・・・ありがとうございます」
皮肉の一つでも言われるかと思っていたが、存外そんなことはなかった。宗介は疑問の表情を浮かべる。
真意を探ろうとしたが、シオンはいつもの調子に戻ってしまった。
「さあ、ここから状況を覆すぜ」
その言葉には、強い意志と周りを安心させる力がこもっていた。

シノは、ヒカリと共にシエルターに入っていた。
「せっかくの休日なのになあ」
ヒカリはぼやいた。一週間前に非常事態宣言が出されたばかりだというのに、またもやシエルターにいるからだ。
「仕方ないですよ。また、今度行きましょう」
シノは取り繕いながらも、また、使徒との戦いに赴くであろうシンジのことを思っていた。
(シンジくん大丈夫かしら?)
「ねえ、シンジくんのが心配?」
シノはちよつと驚いた。表情には出ていなかったはずだ。ヒカリは少しバツの悪そうな顔をしながら、
「ごめん、あてずっぽう」
「いえ、おっしゃるとおりですから」
シノは優しく微笑みながら、すつと立ち上がる。
「どうしたの?」
ヒカリは不安げに聞いた。やはり、怒らしてしまったのだろうか?
シノは、恥ずかしげに告げる。
「ちよつと、お手洗いに・・・」

宗介とシオンは旅客機の貨物室にやってきた。そして、装備を確認する。

「少佐、よく持ち込めましたね」

宗介は感嘆していた。あらゆる銃器が目の前に広がっている。

「少しばかりネルフに頼んだのさ」

シオンは自分の装備を選び始める。そして、コンバットマグナムを手にとると、いきなり後ろを振り向かず、肩越しに発砲する。

弾丸は、後ろに迫っていた敵の兵士の眉間に突き刺さり、瞬時にその命を奪う。

宗介はその神業を当然のように受け止め、トウアハー・デ・ダナンへと連絡を取り始めた。

Mission 6 B part : 攻防（後書き）

すみません、長らくお待たせした割には、中途半端なところで、終わってます。

次回こそは、「新機体登場!!」といきたいと思います。

根拠はありませんが（えー

感想などお待ちします。

Mission 7: Arbalest Apart

シオンはクルツをつれて、森の中を逃げていた。

（糞！あの銀色のASさえ出てこなければ！）

シオンは心の中で悪態をつきながら、先ほどの状況を思いおこしていた。

シオンと宗介は、トウアハー・デ・ダナンに通信した後、二人はかなめを探して、外へ出る。敵兵士を殺してしまった為、情報はなかったのだが、シオンは確信的に、敵に見つからないようにしながら進む。宗介もそれに倣う。

さもそれが当然であるかのように・・・。

かなめはトレーラーの中でCTスキャンの機械のようなものに入られ、奇妙な映像を見せられていた。

それは意味のない文字列や化学式や数式であったり、意味があるようではあるが読み方がわからない文字列だったり、単純な英単語であったりした。

最初はまったく訳がわからなかったが、何回も繰り返し読むうちに、彼女の頭には何か訳のわからない言葉が浮かんできた。意味のない文字列の意味がわかった。まるで最初から知っていたと言わんばかりに・・・。

「あ・・・あっ」

ディスプレイが突然切れて、情報の噴出は突然途切れた。

かなめは憔悴しきった目で、研究者に問いかける。

「もう、終わりにしてくれないかしら？」

「気の毒だけど、まだ続けるわよ」

女性研究者は、同情をまったく見せずに告げた。

「すみません。お願いします」

『いえいえ、困ったときはお互い様だし、これからは一緒に作戦行動をとるんですから！』

「では、失礼します」

『じゃあ、のちほど』

初対面にしてはフレンドリーなナデシコ艦長との通信をきくと、テッサは直ちにこちらの準備も開始した。

ブリーフィングルームには、数十人のさまざまな人種の兵士たちが顔を並べる。

正面のディスプレイの前には、カリニンとテッサが立っている。「すべてを迅速に進める。これ以上後手に回れば、事態は悪化する一方だろう。ミスリルとしては、こうした全世界の注目を集めている事件に関与するのは避けたいところだ。しかし、この事態を防げなかった責任があるのも、遺憾ながら事実だ。以上を踏まえた上で――」

カリニンはそこで一回言葉を切り、一同を見渡した。

「われわれ トウアハー・デ・ダナン が救出作戦を敢行する。なお、この作戦には新造艦ナデシコも参加する。次に、作戦のスケジュールだが……」

分刻み、秒刻みの作戦スケジュールが発表され、準備は着々と進んでいく、同時に格納庫では一体の獣がその起動の刻を待っていた。

同時刻、ナデシコブリーフィングルームでも作戦概要が伝えられていた。ネルガル重工の本社は渋っていたが、連邦からの正式な依

頼があつたのでは、どうしようもない。

「というわけで、皆さんがんばりましょー！」

ハイテンションを崩さず、ユリカは総員に声をかける。

「大丈夫なのかよ……。素人なんだろほとんど……」

アキトは暗くなった。戦闘後に聞いた話を思い返したのである。

「くあー！燃えるシチュエーションだぜ！」

アキトの隣でガイはハイテンションだった。げんなりしながら、アキトは問いかける。

「あんた、出撃できないだろ？」

「いや、無理にでも出撃する！別に、手を骨折したわけではないから」

頭を抱えながら、アキトはもうひとつの問題に辟易した。

「なんで、俺がパイロット登録されてるんだよ！」

「ごめんねー。」

ユリカが近寄ってきていた。

「今は、少しでも戦力がほしいの。力を貸して！」

「嫌だよ！」

「大丈夫よ！さっきの戦闘でもちゃんと戦えてたじゃない！」

「あれは、まぐれだ！」

きっぱりと断言するアキトに、ユリカは少しだけ顔を曇らせたが、につこり笑って告げる。

「ごめん。そうだね。大丈夫、アキトが出なくても何とかしてみせるから！」

そのまま去っていつてしまうユリカに、アキトは声をかけようとしたのだが、何を言っているのかわからなかった。

「大丈夫だって！お前の分まで、この、ダイゴウジ・ガイ様が活躍してやるから！」

「うわーお！青春してるわねん！」

うらやましいのだろうか、そんなことを口にするエクセレン。作

戦前だというのに、気楽なものだ。

しかし、それは彼女だけに限ったことではないらしい。

「よし！まだ俺の入る隙はありそうだぜ！」

クルツはユリカを口説くつもりらしい、本当にお気楽である。

「わお！それじゃ、修羅場になるかもねん！」

「ふっふっふ、そうなたら、俺のリーサルウェポンが発動するだけさ」

「いつまで、続けるつもり？」

マオがまじめな空気に戻そうと、あきれた口調で告げる。

「あらん、マオちゃんはいかわらず委員長キャラなのね？」

「言ってる意味がわからないんですが、エクセレン少尉」

マオは別に委員長キャラではない。どちらかと言えば、エクセレンよりの性格だ（普段の生活では）。

「前にも言ったが、気にしないほうがいい。病気のようなものだからな」

キョウスケがため息混じりに話しかける。

「キョウスケひどーい！」

「それよりも、この作戦は成功するんだろうか？」

「？」

キョウスケのつぶやきに、エクセレンは疑問の顔を浮かべる。不穏な空気を読みとってクルツとマオも表情を変える。

それに答えるように、キョウスケはつぶやいた。

「嫌な予感がする」

「セシルくん、終わったかい？」

ロイドが格納庫にて、女性に声をかける。

「はい。これで、大幅な戦闘力の向上が見込めます」

「《エド》の調子は？」

「良好です」

セシルは振り返りながら、上司に答える。

「後は、シオンくんに渡すだけだねえ」

ロイドは機体を見上げながら、にんまりと笑った。そこには、フライトガンナーが装着されたヒュッケバインMK-2があつた。

「ところでロイドさん、第三新東京市でのことは聞きましたよ？」
不意にセシルは笑顔でロイドに詰め寄る。

「あれは、シオンくんがもういいって・・・」

「それは、“シオンくんが”ですよ？」

「おたすけー！」

「あ、待ちなさい」

走り出すロイド、それを追うセシル。ヒュッケバインは何も言わずにその光景を見守っていた。

「対象が連れ込まれたトレーラーを発見した。これより突入する」

シオンは簡潔にテッサに伝える。

「ちよつと待て！上官命令だ！」

テッサは威圧をこめて命令した。

「無理だよ。宗介はもう突入しちまったんだから」

「ええー！」

それまでの威厳はどこへやら、指揮官にあるまじき声を上げるテッサ。シオンは畳み掛ける。

「あきらめろ。先に陽動を起こすってことにしときゃあいい。通信
終わり！」

「ちよつと、むちゃく」

さつさと通信をきると、シオンはトレーラーの前にいた敵兵士にアサルトライフルを乱射する。

「It's show time！」

突然の銃撃に何人かが倒れ、何人かは物陰に隠れる。

シオンはトレーラーの中に入る。そして、なかの様子を見ると愕

然とした。

「君たち、なにやってるんだ？」

そこでは、こんな状況の中で宗介とかなめが見苦しい押し問答を続けていた。

かなめの制服をシオンが数瞬で見つけ出し、それに着替えさせるとシオンたちは外へと飛び出し、近くに止めてあったジープに飛び乗る。

すぐさま発車、それと同時に、銃弾が通る。シオンがそれに応戦する。敵兵は追いつがるが、加速したジープに追いつけるはずなかった。

「すぐに追いかけてくるはずだ。宗介！このまままっすぐだ。そこに、ASの格納庫がある！」

「了解です！少佐！」

またもや確信的に告げるシオンに答えて、宗介はなおもスピードを上げる。

「あんた達何者なの？どこに行くの？これから一体どうする気！？」
かなめは告げる。シオンはこともなげに言つてのける。

「逃げてるんだ。そんなこともわからないか？」

「そついうことじゃなくて！」

かなめはもどかしげに、声を上げる。それに対して、宗介が反応する。

「少佐は何か知っているのかもしれないが、実は俺も、詳しく事情を知っているわけではない。君が何か特殊な存在で、ある機関が生体実験に使うとしていたことくらいだ」

「キカン！？セータイジツケン！？」

シオンが弾幕を張りながらその声に返答する。

「そう、それを未然に防ぐために、俺達が護衛として派遣された兵士というわけ」

かなめは露骨に疑わしそうな顔で、

「兵士い……？自衛隊？」

「ちがう。ミスリルだ」

宗介が反論する。シオンは言わせるがままにしている。

「みすりる？」

「いずれの国にも属さない、秘密の軍事組織だ」

かなめはシオンにも確認を取る。

「本当に？」

「ああ、本当だよ。残念ながらね」

それを聞くと、かなめは二人を心配し始めた。

「相良くん。あなたが軍事マニアなのはよくわかったわ。でも、そういうのはヤバイわよ？そして、シオンくん、あなたもこんな与太話を本気で信じちゃだめよ！」

「？何の話だ」

その様子を見て、シオンはクツクツと笑い出す。かなめは気が狂ったのかと思った。

「こんな非日常の光景を目撃して、まだそんなことが言えるなんてある意味、図太い神経してるよ」

シオンの物言いに、かなめは宗介に告げる。

「ああ、手遅れね。相良君もああなりたくないなら、冷静になつて！きつと、錯乱してるのよ」

シオンは錯乱しているのは君だと言いたかったが、言えなかった。後ろからは装甲車が迫っていたのだ。

「落ち着いて、自分に言い聞かせるの。『僕はただの高校生だ』つて。まだ間に合うわ。さあ、一緒に深呼吸を――」

宗介がハンドルを切る。

車のすぐ横を機関銃の銃撃が通りすぎる。シオンはアサルトライフルを投げつけ、両手に銃を握り、装甲車に威嚇射撃する。再び銃撃。シオンは身を隠す。

シオンは驚きの声を上げ、かなめは叫び、宗介はかなめに怒鳴る。「あいつら、かなめのことはお構いなしか！？」

「きゃー！止めて！降ろして！」

「黙ってつかまつてろ」

右に左に車体を振り、敵の射撃をよける。シオンはその間も射撃を続ける。ようやく基地の格納庫が見えてくる。

シオンは射撃をやめてふせる。宗介はかなめに告げる。

「ふせている」

「な、なんで？」

「突っ込むからだ」

「ちよっ・・・」

かなめが身構えるのとジープがシャッターに激突するのはほとんど同時だった。

シオンはジープが止まるのを待たずに、飛び降り、追ってきた装甲車の方へ走っていった。その手には日本刀が握られている。

装甲車は機関銃を放った。しかし、シオンは先ほどのジープさながらにそれをジグザグによけて、走行者の横を通り過ぎながら抜刀し、切りつける。

シオンが立ち止まり、振り向くと装甲車はばらばらに分断されてしまった。搭乗者達は一目散に逃げ出した。

シオンはそれを見届けると、格納庫へといそいだ。敵ASが近づいていた。

格納庫では、宗介がASを起動させていた。

「さっさと動け・・・」

ロシア製コンピューターの処理速度の遅さにいらだつ。轟音。穴だらけのシャッターが破られ、こちらと同じ型のAS Rk-92サベージの無機質な二つの目がこちらを見つめる。

そして、ライフルを向ける。

「早く・・・」

ライフルが火を噴くのと、宗介のASが伏せるのはほとんど同時

だった。

間一髪のところで、よけた宗介はそのまま敵ASに突っ込む。そして、ライフルを奪い、あっという間に、敵ASを行動不能にする。「下がっている。危険だ。」

かなめは忠告して、自身は肩越しに背後の敵を射撃する。

かなめはボーっとしているのか、こちらに近づいてくる。宗介はポリウムを上げ、もう一度呼びかける。

「危険だ。下がっている。聞こえないのか。危険だ下がっている」
ようやくかなめは物陰に隠れた。目の前には戦車と数体のASが迫っている。

「戦闘開始だ」

その後の戦闘もあっという間に終わってしまった。宗介の操縦するASもさることながら、シオンがもはや人間ではない（物理法則を無視したかのような）動きで敵を切り裂いていったからだ。

かなめはそんな光景を見せ付けられて、これは夢だと思い込みたかった。しかし、爆発の光景、爆風によって吹き付ける風、硝煙のにおいがこれが現実だと彼女に告げていた。

かなめとシオンをASの手に乗せて、宗介は飛行場へと急いでいた。

「あなたもだましてたのね？」

冷静になったかなめの問いかけにシオンは沈黙した。普通の人間を装っていたため、騙されたという感覚が大きいようだ。

「すまない。そのほうが動きやすかったからな」

悪びれることなく、シオンは告げた。しばしの沈黙。

「相良君も私の護衛なんだよね？」

宗介には聞こえない程の小さい声。しかし、シオンは返答した。

「ああ」

「じゃあ、ベランダに忍び込んだのも・・・」

「君を守るためだよ」

また沈黙。

「あの・・・、相良君？」

かなめの声は今度は明確に、はっきりと宗介に聞こえたのだが・・。

『ふせろ！』

宗介は、後方四時方向からのミサイルを迎撃し、木立の中へと入り込む。そして、疾走。

（まさか、この答えは！？）

シオンは焦った。その答えはあまりにも危険なものだった。

風間信二は、泣いていた。大泣きに泣いていた。

「ああ、アルトアイゼン、ヴァイスリッター、エステバリス、M9にナデシコ・・・。僕、もう、死んでもいいかも」

ナデシコからブースターを展開して飛び立つと、クルツはすぐさまシオンたちのもとへと向かった。

「まずは、爆弾の処理ね」

言って、マオは飛行機の方へと向かっていく、ダナンからのM9も一機そちらへと向かった。

日本刀状の単分子カッターで、飛行機の側面を切り裂き、中を探る。

「見つけた！」

マオは爆弾をつかむと、それを後ろにいたASに投げる。さらにそのASがそれを遠くに投げた。

爆弾が地面に接触する間際、それは爆発した。わずかに2分の出来事であった。

「エクセレン！俺達は足止めだ」

「りょーかい！」

アルトアイゼンとヴァイスリッターは発進してきたASとMSを迎撃している。オクスタンランチャーのビームモードを乱射するヴァイス。

そしてその合間を縫って、アイゼンが敵にステークを打ち込む。

「ゲキガンフレアー！！！」

ダイゴウジ・ガイも叫びながら、敵ASにエステバリスの拳を打ち込む。

ナデシコのブリッジでは、ルリが作戦の進行状況を報告する。

「救出用ヘリ到着。人質の搬入が開始されました」

「デイストーションフィールド全力展開！本艦が盾になります」

ユリカの支持のもと、ナデシコは敵から旅客機とヘリをかばうように動く。

ミサイルがフィールドに衝突し、かすかな振動が艦内へと伝わる。

アキトは、外を見た。ヘリへと向かう乗客たちが見える。そして、火星での出来事がフラッシュバックする。

瞬間、アキトは格納庫へと走り出していた。

神楽坂恵理は、ミスリル兵士に引きずられていた。しかし、それでも必死の抵抗を試みている。飛行機内に残っているのは彼女だけだった。

「離してください！まだ、生徒が！シオンちゃんと相良くんが残ってるはずなんです！それに、千鳥さんを置いて逃げられません！」

「落ち着いてください！大丈夫ですから！」

人質誘導をしている兵士が説得する。

「何を根拠に言ってるんですか！」

それでも抵抗する恵理。そこへ流れ弾が飛んでくる。それは運が悪かったとしか言いようがない。それくらいの確立だった。

しかし、その弾が飛行機に当たるとはなかった。

『残りの人をへりに！早く！』

アキトのエステバリスが、ディストーションフィールドを展開して、飛行機の盾になっていた。

爆風の衝撃か、恵理は気絶していた。

『おい！無茶しやがって！ディストーションフィールドは実弾兵器に対しては効果が薄いんだぞ！もっと威力の高いミサイルだったらどうするんだ！？』

ウリバタケが怒鳴りつける。

「すみません」

『そんなことないよ。アキトかつこいい！』

ユリカが通信に割って入る。

『黙っててください！あ、あと艦長も！危なすぎますよ！』

ウリバタケはユリカも叱責する。エステバリスよりも装甲も厚く、フィールド自体の効果も強いからといって、過信するのはよろしくない。

『大丈夫！ルリちゃんがフィールドを破るほどのミサイルは味方しか所有してないって言うてるから』

Vサインを出しながら満面の笑顔で反論する。

『う、わかりました……。しかし、あまり無理はしないでくださいよ！』

通信が切れると、アキトはラピットライフルを構えたのだが、

『人質の収容終わりました！全軍撤退を開始してください！』

活躍する間もなく、戦闘は終わってしまいそうだ。

敵は、レーダーや赤外線センサーには一切、反応しなかった。

そして、あらぬ方向から狙撃される。宗介はとっさに回避するが、

敵は追い討ちとばかりにグレネードを撃ってくる。

「宗介！グレネードは罠だ！」

シオンの叫びむなく、宗介はかなめとシオンをかばうように回避運動を取る。サベージは足の一方を狙撃され、地面にたたきつけられる。

「……！」

かなめをかばって落下したシオンは、声にならない呻きをあげる。目の前ではこちらに来ようとするサベージが銀色のASによって、徐々に破壊されていっていた。

そして、コクピットがあらわになる。

そのコクピットにライフルを突きつけながら、操縦者は言葉を発した。

『いい動きだったか……』

その声は、ハイジャックの額に傷のある男のものだった。

『読み間違えたな。こちらが欲しいのは、その娘だ。本気でグレネードなどブチ込むと思ったか？……そちらの男は気づいていたようだな』

『……もつともだ』

あきらめたように告げる宗介。すぐそこまでさらに二機のサベージが向かっていた。

『はん、あのときの生徒か。まさか高校生のエージェントとはな。さすがに俺も騙されたよ。ミスリル の人間か？』

『……答える義務はない』

『ふん。なら、死ね』

しかし、一向に引き金は引かれない。

『は……くはは……』

男はくぐもった声を漏らした。

『お前、カシムか！』

時は数時間ほど巻き戻る。

「ガウルンとはどういう男なんですか？」

作戦会議室へと続く通路でテッサは質問する。カーリーニンは重たげな口調で話し出した。

「・・・危険なテロリストです。これまでに30人以上の用心を暗殺しています。しかし、一般の軍隊にはあまり知られていません。ミスリル（ここ）に入る前、私とサガラ軍曹はやつと対決し、そして、サガラ軍曹が仕留めました」

表情一つ変えずにテッサは聞き入っていた。そして、話がいったん途切れるのと同時に言葉を投げかける。

「でも、違った」

「そのようです」

「残虐な男なのね？」

「はい」

彼女は沈黙した。シオンと宗介がいなければ、おそらくはもっとひどい状況になっていただろう。

敵があざ笑っているような気がした。

「上等だ」

テッサの雰囲気がいづもとは180度反転する。そして冷笑を浮かべながら、言い放つ。

「どうやら、そのガウルンとやらには、きついお仕置きが必要なようだな」

こういう時、テッサの本質は浮かび上がってくる。けっきょく彼女もその可憐な姿ににあわず、カーリーニン、シオン、そして、宗介と同じ側の人間なのだ。

いや、もしかしたらそれ以上の・・・。

宗介とガウルンが昔話をしている間に、シオンは立ち上がった。そして、凶悪な笑みを浮かべる。

「おい、ガウルン。そういうのは三流のすることだぜ？」

再び、引き金が引かれるその刹那、爆音が響きわたる。ガウルンのライフルが真つ二つになる。

ガウルンは飛びすさるが、それを追って、二発、三発と容赦のない砲撃がガウルンを襲う。

ガウルンはたまらず丘陵に隠れる。

『イイイイ・・・ヤッホー！』

M9はライフルを乱射しながら、着地する。

『ウルズ6、着地成功！7、ガルム1とエンジェルもいるぜ！』

言うが早いか、敵に向かって発砲。次々に弾丸が敵へと突き刺さる。

宗介をサベージから救い出しながら、シオンはパイロットに声をかける。

「遅いんじゃないか？クルツ」

『ふっ、かつこいい登場だろ？』

「言ってるよ。とにかく・・・」

『俺が足止めする』

「俺も行くっ」

シオンは即決して、宗介たちに告げる。

「後から拾うから、先に行ってくれ。場所は滑走路の南か？」

『その通り。さすがだな』

クルツはそう言つと、一足先に跳躍する。シオンも後に続いた。

Mission 7: Arbalest Apart (後書き)

Aパート終了しました。ようやく、次回更新で アーバレスト を
出せそうです。

にしても、シオンは強くなりすぎかなあ（まあ、設定上仕方ないん
ですが・・・）

では次回もよろしければ読んでみてください。

感想などもお待ちします。

Mission 7: Arbalest B part

クルツは罠を張った。ライフルの故障と見せかける作戦。それは見事に成功した。しかし、結果として、勝ったのは銀色のASだった。

銀色のASはとどめを刺そうとはせず。近くの木立に隠れる。

シオンはこれ幸いとばかりに、クルツを助け出す。クルツの左腕と大腿部からは血が流れている。

答えることなく、シオンはクルツを担いで急いでその場を離れた。爆音、クルツのM9は木っ端微塵となる。

（カリーニンさん、いい判断だけど、容赦ねえな）

味方によるM9の爆撃に少々驚くシオンだったが、それにかまっている余裕はなかった。味方の戦闘ヘリはこちらに気づいていない。通信機はさつき落下したときに壊れている。

（遠くへ、できるだけ遠くへ！）

シオンはクルツに応急処置を施す。クルツがシオンに問いかける。

「答えは見えてたんじゃねえか？」

シオンは、静かに答える。

「ああ、だが、言っただけ聞かないだろ？」

「まあな、あんなこと信じれるかよ」

シオンはクルツに肩を貸しながら、歩き出す。正直シオンにも信じられなかった。

（ラムダ・ドライバ、機械によって超能力を使う事ができるなんてな・・・）

まったくもってナンセンスだった。しかし、実際に事実としてそれは行使されたし、こちらの兵器の中にもそれを装備したものがあ

そんなことを思い返しながら歩くシオン、しかし、周りへの気配りは忘れておらず、とっさに人の気配を感じると、クルツを座らせて、自身は拳銃を構える。

ペンライトで照らされる二人、光源は宗介だった。

さらにそこから1時間歩いたところで、限界が来た。上り坂が終わり、下り坂になっていた。その先で、森は終わり、平原が広がっている。

「これじゃあ・・・」

かなめのつぶやきに宗介は答える。絶望的な答えだった。

「すぐに見つかってしまうだろうな・・・」

宗介は体の傷やもろもろの問題を考慮して、結論を出す。

「少佐、千鳥、聞いてくれ」

「却下する」

シオンは宗介の言葉を聞く前から、その言葉を否定する。

「な・・・」

宗介は言葉を失った。シオンはかなめに話をふる。

「だって、君自身、“宗介”と一緒に帰りたいんだろ？」

かなめは顔を赤らめさせ、手をばたつかせながら、言葉をつむぐ。

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってよ。私は別にそんな。確かに、みんなと一緒に帰りたいけど、別に宗介とだけ帰りたいんじゃないからね!？」

混乱して、変な言い回しになるかなめ。その様子を宗介は頭に疑問符をシオンとクルツは笑いながら、見つめている。

「まあ、護衛対象のわがままを聞くのもお約束って事で・・・、というより、わざわざ助かるチャンスを捨てるのはアホのすることさ」シオンの突然の言葉に、三人はその思考を止める。

「援軍さ」

そう言つて、上を指差すシオン。

三人が上を見上げると何かが降ってきていた。

盛大に砂埃を上げながら降り立つ物体。それに話しかけるシオン。
「相変わらず、無茶するなあ」

『それはお互い様だ』

少年の声が外部スピーカーから聞こえてくる。

「まったく、敵に気づかれた」

にやりと笑いながら、シオンはコンテナをもってきたものを見上げる。

「よお《エド》久しぶりだな」

『はっ、お前がくたばってなくて、俺はがっかりだよ！』

そんな会話をしながら、シオンはそれに乗り込む。彼の搭乗機、ヒュッケバイン Mk-2 に乗り込む。

『ロイドさんからの伝言があるぜ』

ヒュッケバインの正式な AI である《エド》は他の AI とは一線を画している。もはや人間の感情さえ持っていた。

「どうせ、壊さないでとか、きつちりデータを取れとかそんなんだろ？」

『まあ、そんなとこだ』

不審に思つたシオンは伝言を開く。

（シオンくん、この機体は通常モードじゃなくて、アバターモード推奨だから、気をつけてね。そして、無事に帰ってきてね）

伝言はほかに、救出場所を伝えただけで終わっていた。

「セシルさんからじゃないか」

『ちっ』

「ちっ、じゃないだろうが……。まあいい。話は後だ。……スケーラーイス！」

『アバターモード起動』

ミサイルポッドやフロートブラスターを設置されたヒュッケバインはそのパーツごと黒く染まる。

「索敵開始」

シオンはリーダーを呼び出す。

『後方にMSのワンオフ機が3機、量産型が3機、前方にAS・サベージが4機、ワンオフ機が1機』

「よし、行くか！」

エドが部隊構成を読み上げるとシオンはMS部隊に攻撃を開始する。

宗介はコンテを開く。中に入っていたのはM9に似たASだった。
。どうやら、無人のようだ。

手早く乗り込み、各種設定を終え、ASが起動。宗介はチェーンガンを行使する。

迫っていた歩兵部隊を一掃し、宗介はAS部隊に向かっていく。
「すごい」

かなめはつぶやく。あつけない逆転だった。

宗介の乗った白いASは、疾風のように駆け抜け、敵の砲弾をかわし、逆に敵を打ち倒していった。

桁違いの戦闘力で、たった58秒でその戦闘は終了した。

シオンはMS部隊にミサイルをお見舞いする。マイクロミサイルは量産機を爆砕。派手に爆炎が上がる中、3機のワンオフ機が現れる。

「やっぱり避けてくるか・・・」

『そりゃ、ACEクラスだから当たり前だろ？』

ヒュッケバインと同じように黒く染まったストライクガンダム。

その両手には巨大なビームソードが握られている。

「行くぞ・・・」

ストライクのパイロットは静かに告げた。

ストライクは飛び上がり、ヒュッケバインに切りかかる。左腕に装備されたビームブレードでそれをいなす。

そこへ敵のうちの一体、砲戦用のMSがビームを発射する。シオ

ンはそれをかわし、加速。

最大戦速で、バスターに似たそのMSへ突進する。そして、ビームブレードでなぎ払うが、バスターは飛びすぎり、もう一体のデュエルに似たMSがビームサーベルで受け止める。

と同時に黒いストライクが、ヒュッケバインに切りかかる。しかし、その攻撃はATフィールドで弾き飛ばされる。

『エクシード・チャージ』

ATフィールドをビームブレードに収束させ、一気にビームサーベルをはねのけ、敵MSコクピットへ斬りつける。しかし、すんでのところでかわされ、足を切断するだけにとどまった。

しかし、敵MSを戦闘続行は困難な状況においこむことはできたようだ。

『1機!!』

「宗介たちが心配だ。一気にかたをつける」

『了解。《第一の碑文スケイス、それは死の恐怖、すべてを破壊し、命を奪うモノ、そして、死を選択するモノ》』

機能呼び出しながら、シオンは空中に舞い上がり、2体のMSをロックオンする。

「『デスペラード!!』」

右腕に装備されたガトリングガンと、ミサイルポッドから夥しい数の破壊の衝撃が発射される。

全弾を発射し終わると、シオンは宗介たちのもとへと急いだ。

中破した黒いストライクから男がはいずりだす。あの弾幕の中でよく生き延びられたものだ。そこへ、パイロットスーツを着た女と男が近寄ってくる。後の二人も生き残れたようだ。

「まったく！なんなんだよ。あの化け物は！装甲がVPSじゃないや死んでたぞ！」

バスターのパイロット、ジャムス・コーザは虚空に向かって叫ぶ。
「シオン・ヴィタール、…… 死の恐怖」

黒いストライクのパイロット、スウェン・カル・バヤンはそうつぶやくと本部への連絡をとり始めた。

アーバレストは銀色のASの砲撃を転がりながら何とかかわす。どちらのASもまったく譲らない、砲弾を互いに浴びせ、それを避け、疾走し、また砲撃、これの繰り返し。

時間はすでに五分以上たっている。

「くそ、シオンはまだか・・・」

MS部隊との距離は結構離れているようで、シオンはまだ戻っていない。

不意にアーバレストが木を投げる。自然、落下する木で二体の姿が隠れる。2体のASはためめに発砲した。

両機とも被弾、敵はライフルが故障、アーバレストは頭部センサーが破損しただけ砲撃ができないわけではなかった。勝負は決まっていたかに見えた。

しかし、宗介の砲撃は、消え去ってしまう。

銀色のASは例の装置、ラムダドライバを発動させていた。

突然の砲撃に、シオンはとつさに回避運動をとる。

目の前には2体のMS程度の大きさのアンノウンがいた。

1体は全体的に赤く、両肩と間接部、胸部が鬼の顔をし、両肩の隣にはひとつずつ鬼の顔が浮かんでいる。手には日本刀のようなものが握られており、とても人間が作り出したようには思えず、どちらかというとな生物のような感覚がする機体。

もう一体は、白を基調とした機体で、。背中には赤いフロートユニットがつけられており、左手に銃が握られている。どうやら砲撃をしたのはこの機体のようだ。

『お迎えにあがりました。我等が同胞』

「なんの話だ？そして、お前らは誰だ？」

シオンは不気味さを感じながら、通信してきた白い機体のパイロ

ットに問いかける。

『この機体の名はランスロット、隣の機体はペルゼイン・リヒカイトだ。オレの正体には気づいてるはずだ。いや、答えは出ているはずだよ？そう、オレの正体はあんたが一番知ってるはずだ！！』

その声はシオンとそっくり、いや、シオンそのものだった。

（アレは、俺？馬鹿な！なんなんだ、この“答え”は！！）

『主がお呼びですの。ついてきてもらいますの』

赤い機体から声がする。シオンは、背中にじっとりと汗をかきながら、

「嫌だと言ったら？」

『力ずくでも、きて・・・もらいますの』

赤い機体が刀を振り下ろす。シオンはすぐさま回避運動をし、その刀から発せられる衝撃波を避ける。

『余裕だな』

ランスロットは一瞬で間合いを詰め、右手に赤い剣を握り、攻撃してくる。ATフィールドを展開するが、敵はそれを中和する。

シオンはとつさにビームブレードを展開し、斬撃を受け止める。

『拒絶できない！？』

エドの疑問に答えたのは、シオンではなくランスロットのパイロットだった。

『できるわけないだろ？オレはシオンなんだからな』

「違う！！」

シオンはガトリングとミサイルポッドをパージし、空いた手で殴りつける。軽々と吹き飛ばされるランスロット。

『グッ！？』

「お前は、俺じゃない」

ランスロットのパイロットは笑いながら、言い放つ。

『真実だ』

「違うな。まあ、詳しく説明するとだ。お前がいつの時点で生まれたかは知らないが、俺は昨日から確実に変化している。それはお前

も同じこと。いや、お前が変化しないならそれはそれだが。まあ、どちらにしろ、お前と俺は同じじゃない。いくら、姿形が似ていようともな」

『屁理屈だね』

もう一人のシオンを名のる者は一蹴しようとするが、しかし、それでもシオンは続ける。

「一番の理由は、お前と俺の力の差だ・・・」

そこで、シオンは一度言葉を切る。そして、後ろに迫っていたペルゼイン・リヒカイトをATフィールドの刃で切り払う。

「もし、お前が俺ならば、俺とまったく同じ力を持っていなければならぬはずだ。なのに、お前、弱いだろ？」

『アルフィミイ!!』

『一度・・・撤退・・・しますの・・・』

そう言うのと、まるで幻だったと言わんばかりに、ペルゼイン・リヒカイトは消え去る。

「まあ、仕方がないことだ。俺の進化は光よりも速い。全宇宙の何者も、俺の進化についてこれないのだから」

『中2病だな』

「・・・かつこよく決めてるんだから、横槍入れないでくれよ・・・」

「

エドの突っ込みに、肩を落としながら、シオンは言い返す。ちょっと落ち込んでしまったようだ。

『悪かったよ。中2病は言い過ぎた』

シオンを慰めていると、笑い声が聞こえてくる。シオンではなく、シオンを名乗る男のものだった。

『はははは!!』

「気でもふれたか？」

『いや、こんなにも傲慢な男だとは思っていなかっただけさ。光より速い？それじゃあ、見せて・・・』

ヒュッケバインは視界から消えていた。

「見せてやるよ。ここからは、全力全開のクライマックスだ！」

シオンは刃を振り下ろす。ランスロットはそれをかわし、左手の銃を撃とうとするが、ヒュッケバインの砲撃のほうが早い。フォトンライフルで銃を破壊されてしまう。

フォトンライフルをしまい、シオンは“現時点”での最強兵器を呼び出す。

『いくわよ！シオンくん！』

セシルの言葉と同時に、ブースターをつけられた銃が飛んでくる。

フォトンライフルより、少し大き目の銃だった。

ブースターがパージされ、銃を掴み取るヒュッケバイン。

「改良型の小型化したグラビトンライフル。威力はGインパクトキヤノンよりは劣る。しかし・・・」

グラビトンライフルの先端に目をかたどった紋様が浮かび上がる。

「アバターモードで使用すると思うでもない」

『エクシード・チャージ』

赤黒い光をたたえながら、パワーがたまっていくグラビトンライフル。

「アキシオンバスター」

ランスロットは動こうとするが、なぜか動くことができない。

『デット・エンド』

シオンのコピーは異次元への扉を開く。

「『シュート！』」

常軌を逸したエネルギーの塊がランスロットへと殺到する。しかし、間一髪で手下を盾にして、シオンのコピーは異次元の扉の向こうに逃げ去る。

エネルギーは手下を捉え。そして、爆発。あたりを昼のような明るさに変える。

「通信機を貸して！」

そう言いながら、クルツから通信機をひったくって宗介に通信する。一回目の衝撃波を偶然発動したラムダドライバで防いだ宗介だが、その後はよけるだけ、ジリ貧になっていった。

「相良君、聞こえる！？」

「千鳥、今は戦闘中だ！」

「いいから聞いて！そいつにはさっきの装置を使わなきゃ勝てないわ。集中して、イメージを・・・」

なおも攻撃をよけながら宗介は言う。

「無理だ。集中などできん」

「言い方を変えるわ。あいつは私を狙ってきてる。それで、捕まえて、ひどい実験をして、私を廃人にしようとしてる。それが許せる！？ム力つかない！？」

宗介は、過去に助け出した少女を思い返す。

（かなめがあんなふうになるのか・・・！？）

宗介は力がわいてくるのを感じた。それは怒りの力。自分でも不思議だったが、かなめがそうだったことを想像して、自分は怒っている。

「ああ、ム力つくな」

「その、気持ちを弾丸に込めるの！息を吸って！」

宗介は深呼吸をする。機体は完全に静止した。

「あきらめたか？」

ガウルンはその隙を突いて、一気に距離を詰める。

「1・2・今！」

ガウルンのASが目の前に来たとき、ショット・キャノンが発射される。ガウルンは今度も弾丸を吹き飛ばそうとするが、そうはならなかった。

ラムダドライバは作動していた、しかし、それはアーバレストにおいても同じだった。そして、アーバレストの方が勝っていた。

弾丸は障壁を突き破り、銀色のASへと吸い込まれていった。

爆発。銀色のASは破壊された。

「ふう」

かなめは腰を下ろす。

『大丈夫か？』

宗介に言われて、アーバレストを見上げながら、かなめは答えた。彼らを祝うように、空に爆炎が発生した。まるで花火のように・・。

アンノウンたちが空にいたおかげで、ナデシコが近づくことができたため、撤収は速やかに行われた。

「シオン？」

艦に戻ると、テッサが仁王立ちしていた。笑いながら、しかし、絶対に怒っているであろう彼女にシオンは軽口をたたく。

「ただいま。こっちに移って、待っててくれたのかい？」

「死にたい？」

「いやあ、死にたくはないな」

「じゃあ、言うことがあるはずよね？」

「うーん。いや、あれが最善の答えだった。だから、仕方ない。よって、謝る必要もない」

ついに、テッサはこめかみをぴくぴくさせながら、怒りを爆発させる。

「いい加減にしないで！あなたの能力は知っています。ええ、知っていますとも！でもね、私はそんなこと怒ってるんじゃないの、こちらにその情報を送ってくれば・・。」

シオンはそれを話半分で聞いている。シオンは知っていた。これは、完全な八つ当たりだと。

シオンはしばらく聞いていたが、飽きたのかテッサの肩に手をのせながら告げる。

「わかった。謝るよ。でも、ひとつだけ言わせてくれ・・、残念

だが、諦めたほうがいいと思うぞ」

とたんに、テッサの顔は曇り、さらに泣き出した。

「う、う、うわあああああ！」

「少佐！貴様いったい何を！？」

マデューカス中佐がとんでくる。彼もこちらに移っていたようだ。ダナンは安全な領域にいるらしい。

シオンはこともなげに告げる。感慨深げですらある。

「中佐、今テッサが大人の階段を一つ登ったところです」

「言い訳すな！」

「いやいや、失恋を重ねるごとに女は綺麗になって行って、人間としても大きくなれると思いますよ。それに、そういう答えが出てから、この恋は実りませんって」

「だからって、ストレートすぎるだろうが！」

「落ち着いてください。寿命が縮みますよ？」

「誰のせいだとおもっとる！」

シオンとマデューカスが言い争うその裏では、セシルがロイドを問い詰めている。

「シオンくんが真似しちゃったじゃないですか！？」

「でも、僕のせいじゃないでしょ？」

そんな、光景を目の当たりにしながら、かなめは思った。

（こんなやつらに倒されたガウルンって人が少しかわいそうになつてくるわね・・・）

そして、ハイジャックから始まった事件は、いったん幕を下ろした。

「年貢の納め時ってやつか？」

ガウルンは生き延びていた。しかし、片足を失い、失血多量、命は風前の灯だった。

「まったく、ムカつくぜ・・・」

悪態をつく。

『力があ・・・欲しいかあ?』

声がした。姿は見えない。

「もらえるんなら、もらっとくぜ?」

ガウルンは即答する。次の瞬間、ガウルンは光に包まれ、そして、消えた。

Mission 7: Arbalest B part (後書き)

今回は、この裏で起きた。第三新東京市の事件を終わらせるつもりです。

では、次回、「マークネモ」もよろしければ読んで下さい。
感想などもお待ちします。

Mission 8: マークネモ Apart (前書き)

久しぶりに短い戦闘 part です。(正直、結果だけでよかったか
もしれない・・・)

Mission 8：マークネモ Apart

いち早く出撃するエヴァ初号機。それを少し離れた山で見守る二つの人影があった。

「お、待つてました」

カメラをエヴァに向けながら歓喜するのは、相田ケンスケ。その隣には、口をあけながら、目をしばたたかせる鈴原トウジがいる。職員の目を盗んで、出てきたらしい。

初号機は発進すると、パレットライフルから弾丸を撃ち込む。そして、使徒と距離をとる。

しかし、使徒は健在で、触手を振るってくる。とつさに避けるがパレットライフルが、切り裂かれた。

「何や！？もうやられとるで！！」

トウジは言うが、ケンスケは平然としている。

「大丈夫、大丈夫」

初号機はすぐさま立ち上がり、予備のライフルを取ると、再び射撃する。そして、再び距離をとる。

「逃げてばかりやないか」

トウジは拍子抜けしたようだが、ケンスケはそうでもなかった。

（結構やるね）

シンジは、シオンのアドバイス通りに動いていた。距離をとることで、ケーブルに動きが制限されてしまうなら、攻撃の届かない距離から戦う方がいい。そういうことであった。

「待たせたなあ！」

忍の言葉と共に、ダンクーガとコンバトラーが出撃してくる。そして、一気に片をつけようとしたその時、不意に何者かが砲撃してきた。

さらに、ケーブルも切断されてしまう。

「どないしたんや！？」

「俺にもわからないよ!」

「どうしたの!？」

ミサトが叫ぶ。リーダーには7機ほどの機影が映っている。

「これは! Y-62タイプ。ドローメです!」

「妖魔帝国!？何で!？」

日向の報告にミサトは驚く。ここねらう理由がないはずだからだ。

タコやイカに似た戦闘機群に気を取られ、シンジは使徒の接近を許してしまう。

「しまっ・・・」

触手に足をとられ、そのまま投げ飛ばされる初号機。

「こっちに飛んでくる!？」

「うわああああ!」

ケンスケとトウジのいる山に落下する初号機。あと少しずれていれば、押しつぶされていたかもしれない状況に腰を抜かす二人。それでも、ケンスケはカメラを落とさなかった。

「どけっ!」

一体を殴り飛ばし、使徒に近づこうとするダンクーガ。しかし、次から次へとわいてくるドローメにさえぎられ、なかなか近づくことができない。

「超電磁ヨーヨー! くそっ! 何体いるんだこいつら!？」

いらだつ豹馬。

コンバトラVも敵をなぎ払うが、一向に敵は減らない。

シンジがふと見ると、そこにはトウジとケンスケがいた。驚愕し、瞬間硬直するが、影が頭の上に見えたことで、我に返る。そこには、使徒がいた。使徒の触手を受け止める初号機。

「何で、戦わへんのや!？」

トウジとケンスケは明らかに狼狽した声を上げる。

「僕らがここに居るから？自由に動けないんだ」

エヴァの活動限界は残り3分30秒。シンジはエヴァを触手をつかんだまま固定させ、エントリープラグを排出する。

『シンジ君！？何をするつもり！？』

ミサトの驚きの声を無視して、シンジはトウジとケンスケに呼びかける。

「その二人！早く乗って！」

『許可のない民間人を乗せられると思うの！？』

ミサトの声を無視して、二人が乗り込むとエントリープラグを元に戻す。

「ぐ……水やないか！？」

「げほっ……カメラ」

二人は多少LCLに慣れるのに、少し時間をとったが、しかし次の瞬間目の前の光景に釘付けになっていた。

トウジはシンジに声をかける。

「転校生？」

シンジはぶつきらばうに答える。

「黙ってて、集中できない」

「なんやと！？」

トウジは怒りに任せて、シンジを殴ろうとこぶしを振り上げる。

そして、それをケンスケが何とか押しとどめる。

『神経系統に異常発生！』

『二つも異物を挿入したからよ！』

マヤの報告に非難の声をあげるリツコ。

『バカ！勝手になんてことすんのよ！？私の指示を仰ぎなさい！他に方法はいくらでもあるでしょう！』

ミサトはシンジをかりつける。シンジはカッとなって、使徒を蹴り飛ばす。ミサトは決断し、

『今よ。シンジ君！後退して！』

しかし、その指示を聞いても、シンジは動かなかった。ただ方で息をするだけだ。トウジは不安な顔でシンジに問いかける。

「転校・・・、碇君？なんや、逃げろって言うてるみたいやけど・・・」

（逃げる！？嫌だ。僕が逃げたら、シノが死んじゃうじゃないか！それに、今のミサトさんの命令は聞きたくない！）

「逃げちゃだめだ・・・」

シンジの呟きにトウジが反応する。

「何やて！？」

「逃げちゃだめなんだ！！」

シンジは言い放つとミサトの命令を無視して、プログレッシブナイフを抜き放つて、使徒へと突進していく。

「おいおいおい！！」

「本気か！？」

トウジとケンスケは叫ぶ。

『シンジ君、待ちなさい！！』

ミサトも叫ぶが、その声はまったく届かず、シンジは使徒へと向かっていく。

使徒は触手を伸ばし、初号機の胴体を貫く。

シンジは苦悶の表情を浮かべるが、それでも、使徒へと近づき、ナイフを使徒の核へと突き刺す。

「はああああああああ！！」

シンジの絶叫を聞きながら、トウジとケンスケは生きた心地がしなかった。ナイフは激しい、火花を散らして、コアを破壊していく。

『活動限界まで、後10・9・8・7・6・5・4・3・2・1』

マヤの秒読みと同時に、コアの光が失なわれていく。

『0。エヴァ活動停止』

そして、エヴァの活動停止とともに、使徒は機能を停止した。

『使徒の活動停止を確認』

青葉の報告とともに、この作戦は終わりかと思われた。しかし・

『エヴァ上方に熱源Y-64タイプ!!ガンテです!』

日向の報告とともに、ミサトは指示を出す。

エヴァの頭上には手が浮かんでいる。それぞれの指はまがまがい、竜だった。

『はやく、エヴァの援護に向かわせて!』

『無理です!!ドローメの大群を何とかしないと!!』

ガンテは少しずつ、エヴァに近づく、もう少しで、射程に入るか入らないかというところで、その上に何者かが飛び乗ってきた。

その機体はエヴァほど大きかった。しかし、ガンテはまったく揺らがない。謎の機体は刀でガンテを一刀両断する。しかし、何も起こらなかった。ガンテは爆発もせず、墜落もせず、ただ、そこにあった。一刀両断される前と同じに、まるで時が止まったかのように。

いや、本当に時は止まっていた。すべてのものが停止している。人も、物も動かない。ガンテを叩き切ったその機体以外は。

さらに、その機体はドローメを次から次へと斬っていく。最後のドローメを斬ると、時は再び動き出し、ドローメとガンテは爆発した。

と同時に、その機体もどこかへ消えてしまった。

M i s s i o n 8 : マークネモ A p a r t (後書き)

次は会話 part です。そろそろ、ガンダムの話に移行したいのですが、最後に一つやらなければいけない話があるので、まだ書けません。詳細は次の part のあとがきで。長文失礼しました。

Mission 8：マークネモ B part

「あの時は・・・ごめん。私を守ろうとしてたんでしょ？」

第三新東京市に到着したナデシコから降りて、ネルフで一通りの検査を終え、宗介の運転する車で自宅に帰る途中。かなめは宗介に謝罪した。

何のことやらわからず。宗介はむっつりとした顔をさらにむっつりとさせ、聞き返す。

「何のことだ？」

「わからないなら、いいわ」

かなめは次の話題を切り出した。

「あなたはこの後どうするの？」

「逃亡中にも言ったが、次の任務に向かうだけだ。もう会うこともないかもしれない・・・」

少しさびしげな表情を浮かべながら、かなめは窓の外を見る。もう少して自宅だ。

「学校みんなにお別れを言いには来るのよね？」

「いや・・・」

かなめの自宅マンション前に到着する。かなめは最後かもしれない言葉を紡ぐ。

「じゃあ、相良君、元気で」

「千鳥、君もな」

宗介はそれだけ言うと、車を発進させる。かなめはしばらくそれを見守って、それから自宅へと戻っていった。

シンジとシノはシオンの運転する車で市内を移動していた。
「どこに行くんですか？」

「え？いや、君らが帰りたくないって言ったんだよ？行く当てなんて特にないんだけど・・・」

シンジの問いに、シオンは少々焦りながら言葉を返す。しばらく、走っていれば気持ちも落ち着くかと思っただが、どうやら駄目らしい。

「あ、すみません。僕らがわがままを言ってるのに・・・」

「気にすることもないけどね」

シオンは困ってしまった。シノはなにを聞いても空返事で、黙り込んでしまっているし、このままでは気持ちが晴れるどころか、ますます気まづくなるかもしれない。

そのとき、車のカーナビに情報が送信されてきた。

（エドから？鈴原トウジの情報？）

シオンは一縷の望みを託して、トウジの家に向かうことにした。

一時間前・・・

「どうして、私の命令を無視したの？」

ミサトは静かな怒りを向ける。それは14歳の少年に向けるような類のものではなかったが、しかし、作戦部長として、そして、保護者として当然の怒りだった。

「あの二人をエントリープラグに入れたのは許すとして、なぜ、後退しなかったの？運良く、使徒は倒せたからいいけど、もしそうじゃなかったらどうなったと思うの？」

「・・・すみません」

シンジの言葉が投槍に聞こえたのか、ミサトは感情を爆発させる。「すみませんで済む問題じゃないわ！私は作戦部長なのよ。あなたは私の命令に従う義務がある。わかってるの！？」

その言葉に、シンジはもう本当にめんどくさくなったような口調で、

「いいじゃないですか・・・、勝ったんだから」

パシン！

その言葉に、ミサトはつい手が出てしまった。

「あなた、自分の任務を何だと・・・、もういいわ。帰って寝なさい」

少し後悔しながら、ミサトはシンジが出て行く音を背中で聞いた。

同時刻、ようやく説教から開放されたシオンはナデシコの食堂に立ち寄った。とてもお腹がすいていた。マデューカス中佐の説教は長すぎるのだ。

シオンは控えめに聞いてみた。

「まだやってますか？」

「準備中だからねえ・・・。簡単なものならできるよ？」

料理人らしき女性の声にシオンは答える。

「それでもいいので、お願いします」

シオンが答えると、厨房のほうから包丁の小気味いい音が響いてくる。そして、何かをいためる音に伴っていい匂いがしてくる。

「はい、お待ち！ありあわせだけど悪いね」

出てきたのは、チャーハンと中華スープだった。チャーハンを一口ほおばると、米と具材が口全体に広がる。パラパラに仕上げてあるおかげである。中華スープのほうもあっさりとしていて、チャーハンとの愛称は拔群だった。

「うまい。うまいです！」

シオンはそれだけ言うと、黙々と料理を食べ続けた。

（エルザムさんに匹敵する味だ）

と思いはしたが、知らないだろうと思い直し、口には出さなかつ

た。

「ご馳走様！俺はシオンといいます。お姉さん、お名前は？」

「ホウメイだ。よろしく。」

それから、少し話をした。10分位して、呼び出しがかかり、シオンは格納庫へと向かった。向かいながら、シオンは思う。

（ああいう人がいるなら、民間からの抜擢が多いとはいえ、この艦は結構いいな・・・）

格納庫で、ロイドとセシルと共にデータの解析をし、獣戦機隊とバトルチームと今後の日程について確認しているときにその話題は出た。

「しかし、驚いたよな。あんなにいたドローメが一瞬にして消えちまったんだから」

豹馬の一言に雅人もうなずく。

「ホントだよな。まるで、シオンがアクセルモードを使ったときみたいだった」

「いや、あれは完全に時が止まってたって感じだぜ」

忍の言葉にシオンは反応する。

「時が止まる？」

「まあ、アクセルモードのときも同じなんだろうけどよ」

解散後、シオンはヒュッケバインに乗り込む。忍はあっさりとしていたし、考えても無駄という風な感じではあったが、しかし、シオンはどうしても引かなかった。

「第一、この機体以外に超高速戦闘が行える機体なんてあるのか？」

『まあ、無いだろうな』

「だろ？だから・・・」

『ハッキングか？・・・答えは出ないのか？』

「ちよつとぼやけてるんだよ」

そんな会話をエドとしながら、シオンはハッキング操作をしたのだが・・・。

「何でだ？」

『プロテクトだな』

「見りゃわかるよ」

おかしい話だった。碑文を使ってもハッキングできないなどということがあるはずが無いのだが……。

「まあ、いいか」

『いいのか?』

「今のところ敵対はしてないからな」

それだけ言っていると、シオンは機体から降りて、歩き去った。

シンジがシャワーを浴びて、着替え終わり、メインゲートの前に行くと、シノが立っていた。

「どうしたの?」

「一緒に帰ろう?」

外に出て、自宅へ歩く二人。そこに、車がやってきて、二人に声が掛かる。

「よお」

振り返ると、それはシオンだった。

そして、現在に至る。

トウジの自宅に入れてくれたのはいいが、

(なんなんだ?この状況は?)

シンジ、シノ、トウジの三人は居間でテーブルを囲んで、じっとしている。

(答えは出ないな……。どうしたもんだらう?)

「何の用や?」

ようやく、トウジの口から言葉が出る。シンジは困ったように答

える。実際、彼はシオンにつれられて来ただけだ。

「何の用って訳でもないんだけど・・・」

「まあ、ええわ。こっちから行く手間も省けたんやからな。・・・すまん！」

トウジは意を決したように、突然謝った。シオンは何のことやら、訳がわからなかったが、シンジとシノははったしたような顔になる。「今日のことやけど、妹にしっかりつけられてな。ほんまにすまん！」
「大丈夫だよ。気にしてないから。それに、耐性がついてよかったし・・・」

「なんや、ようわからんけど、それなら、良かったわ」

シンジの言葉は意味深であったが、しかし、トウジをホッとさせるには十分なものだった。

「クスクス・・・」

笑い声に、トウジが反応する。

「なんや。文句あるんかいな。神威」

「いえいえ。あれだけ強気だったのに、妹さんに言われたとたんですから。ねえ」

「う、うるさいわい！」

トウジは顔を赤くさせながら叫ぶ。

「まあまあ、落ち着いて」

シンジはなだめようとするが、トウジはなおもまくしたてる。

「落ち着けるかいな！お前もよう、こんなのと暮らしてられるなあ・・・こんななの？」

シノとトウジがにらみ合い、火花が散る。だんだんとシンジがいたたまれない状況になってきていた。

「君達！お腹すいてるんじゃない？」

シオンの言葉に、三人のお腹がグーッと鳴るのだった。

30分後・・・

「・・・うまい」

トウジは驚きの声をあげる。家にはたいした物はなかったはずだ。
「ふー、よろこんでくれて、よかったよ」

ホウメイに触発されて、あるだけのことで調理をしたのだが、存外にうまくできたようだ。

「シオンさんはいつも料理を？」

シンジが聞いてきた。その間にも箸は進む。

「まあね。上司が二人とも料理ができなくてさ・・・」

「ロイドさんはともかく、セシルさんもですか!？」

シノは驚いて、目を丸くするが、シオンは頭を抑えながら、

「ああ、できないってことはないんだけど、発想が奇抜というか、
なんというか・・・。他の家事は完璧なのに・・・」

シオンは前にブルーベリー入りのおにぎりを出されたことがある。

「はあ・・・」

顔面が蒼白なシオンの様子を見て、シノはそれ以上の詮索をやめることにした。

「でも、いいじゃないですか。ミサトさんは僕らにほとんどの家事を任せてますよ?」

シオンは目を点にしていた。まさかとは思ったが、本当にひどいらしい。シンジはいつも以上に饒舌に語る。

「それなのに、僕らに対するいたわりが足りないと思うんですよ」

「それは贅沢やで、先生!」

「せんせい?」

シンジの疑問にトウジは理由を説明する。

「エヴァに乗って戦うとるからな、いわば、ワイら人類の用心棒のようなもんや。せやから、“先生”」

「なるほど。それはいいとして、だらしなさ過ぎだよ?実際暮らし
てみたらわかると思う」

「まったくです」

シノもシンジに同調する。

確かに、シノの母親はすばらしい人物だった。それから考えると、
はなはだしい劣化だろう。

「それじゃあ、実際に見させてもらおうやないか？」

「ど、どうするんだよ？」

トウジはシンジに接近する。シンジは上体をそらしながら、聞き返す。

「お前の家に行くんや」

「今から？」

「今日はもう遅い。せやから、泊まっていき。行くのは明日の朝や」

「私も泊まるの？」

シノは表情を曇らせたが、

「別に、帰ってもええで？」

お前など眼中にないというような言い方にシノは、

「泊まるわ。妹さんの部屋使わせてもらうわね？」

「ええよ」

即決だった。

その後、シオンがミサトに連絡を取り、シンジとシノはトウジの家に泊まることになった。

「じゃあ、明日の朝に迎えに来るよ」

そう言って、シオンは外に出た。夜の冷たい空気が心地よい。

シオンは夜空を見上げ、

「なあ、これでよかったんだろうか？」

その場にいない人物に疑問を投げかけたが、当然答えは返ってこなかった。

超スローモーションの画像には一体の機体が映し出されていた。
「ネモ」か」

「廃棄されたはずではなかったか？」

ゲンドウの言葉に冬月は疑問を投げかける。

「そのはずだが、まあいい。精々、EVAを守ってもらつさ……」

シノは夢を見た。それは、行方不明になった母の夢だった。

（お母さん？）

母の後姿を見つけて走りよるシノ。

「お母さん！」

しかし、振り向いた母の顔は……。

そこではつと目が覚める。叫び声さえ出なかった。

母の顔は、“あの機体”のものだった。

「やっぱりお母さんは……」

その先の言葉を飲み込んで、シノは涙を流した。

Mission8:マークネモ Bpart (後書き)

感想などお待ちしています。

I n t e r m i s s i o n (前書き)

待っていた人は、長らくお待たせしてすみません。更新、再開します。

Intermission

家に帰ると、ミサトは存外にきちんとした格好で出てきた。

「お帰りなさい」

やさしい言葉をかけられて、シンジはびっくりしてしまった。しかられるかと思っていたのだ。

シンジは自嘲気味に言う。

「怒らないんで・・・」

「どうも、おはようございます」

「先日は大変申し訳ございませんでした」

その言葉をさえぎって、トウジとケンスケが挨拶し、謝った。ケンスケは、昨日話を聞いて、ついてきたらしい。

「！あなた達は、あのときの・・・」

「その節は大変すみませんでした」

トウジがもう一度謝り、さらにこの状況を弁明し始める。

「昨日は、ワイがさそったんです。だから、シンジは責めんといってください」

「ええ、悪いのは全部こいつです」

「こら、ケンスケ！おまえかて・・・」

ケンカが始まる。それを見て、シンジは笑っていた。なぜ、こんな気持ちになったのかは、わからなかったし、こんな気持ちは久しぶりだった。

「なに笑うとるんや！」

シンジはつかみかかれる。

「なにすんだよ！」

「だいたい、お前が諸悪の根源やろが！」

トウジの理不尽な言い分に、シノが反応する。

「あなたねえ、いい加減にしたら！？」

「うるさいわい！」

ケンスケは不穏な空気を読み取って退避した。ミサトはこめかみをぴくぴくとさせている。

「あんたたち・・・」

静かに言った後、ミサトは力を溜めて、声を張り上げた。

「近所迷惑よ！ケンカならよそでやりなさい！さもないと・・・」

さらに、ミサトがこぶしを振り上げると、シンジ達は蜘蛛の子を散らすように、いっせいに逃げ出した。

その頃、シオンはトウアハー・デ・ダナンにて懐かしいメンバーと再会していた。

「おひさー！元気にしてた？シオンちゃん？」

シオンはエクセレンの言葉に鋭く反応する。

「“ちゃん”づけは止めてくれ！」

「いいじゃない。減るもんじゃなし」

「減るんだよ！俺の魂が！」

「少佐は、どうされたのだ？」

宗介がきょとんしながら、疑問を口走ると、マオがくすくすと笑う。

「まだ、トラウマみたいね」

「トラウマ？」

宗介にしてみれば、シオンにそのようなものがあるなど信じられないことだった。知ってか知らずか、エクセレンはそのトラウマに触れる。

「そうそう、シオンちゃんに会えると思って、また新しい衣装を持ってきたの。着てみない？」

「着ないぞ！断じて着ない！」

シオンはそう言っ、キョウスケに話を振る。

「それにしても、キョウスケ。苦勞が絶えないね」

「まったくだ。だが、これで苦労も半減しそうだな」

背中にいやな汗を感じながら、シオンはキョウスケに話しかける。
「まさか、俺を生贄にするつもりなのか・・・」

「いや、そんなつもりはないさ。ただ、苦労が半減すると言っただけだ」

「結局、同じような意味じゃないか・・・」
がつくりと肩を落とすシオン。

「ま、頑張りなさいよ。シオンちゃん？」

「マオ！君まで！」

「ま、いいじゃないですか。シオンちゃん？」

「テッサ！？どこから、出てきた！？」

「さっきからいましたよ？」

いつの間にかいたテッサが、かわいらしい笑顔を浮かべながら、言ってくるのだが、シオンは全く別のことを感じた。

（あー、やっぱり怒ってんのな）

普通、好きな相手と絶対うまくいかないと言われて、怒らない人間はいない。

「死角に立たないでくれないかい？テッサ？」

思いつきり棒読みでしゃべるシオンに、テッサが静かに告げる。

「それは、あなたが悪いんじゃない？」

笑顔の裏に見える怒りに恐怖を感じ、シオンは内心でびくつとした。

「さ、ブリーフィングを始めますよー」

テッサの声に従って、各々席に着くと、今後の作戦展開や部隊の割り振りが告げられていった。

ブリーフィングの後、シオンはヒュッケバインの戦闘データを整理して、甲児達に別れの挨拶にでも行こうかなと考えていたのだが、

そうはならなかった。というよりも出来なかったのだ。

「さっきの割り振りは、別に個人的な感情は入ってません」

テッサにそう言われたが、何かピンとこない感じがした。そんなことは言われなくてもわかることだが…。

「悪かったよ。さすがにあれは言いすぎだった」

「いえ、別にそれほど怒ってませんよ」

目が怒っているものでそれほど説得力はない言葉に苦笑しつつ、シオンは先を進めることにした。

「それじゃあ、何で呼び出しを？」

「何か、隠していることはないですか？」

シオンは少し、考えた風に首を傾げる。少しするとはっとなったように手を打つ。

「あー、悪い。いっぱいありすぎてわからない」

「何をそんなに隠してるんですか！・・・ヒュッケバインのことについてです。あれは・・・」

「それについてはロイドさんに聞いたほうが早いと思うけど・・・」

シオンは真面目顔で告げるがテッサは食い下がった。

「でも、あのAIは・・・」

「バニが作り出した最高のAI。それ以上でもそれ以下でもないだろ」

「でも・・・」

「いい加減にしろ。バニは死んだんだ。どうあがいても生き返らないんだ」

静かに告げられた言葉に、しばらくの沈黙が流れる。それを嫌って、シオンは早々に話を切り上げることにした。

「すまん。また、言いすぎだな・・・。もういいか？」

「もうひとつだけ」

テッサは俯いているので表情は読み取れない。声からも感情を読み取ることができなかった。

「あちらに行ってもあまり、暴れないようにしてください」

「ああ、わかつてる。じゃあ、戻るな」

シオンは部屋を出て行った。テッサは机につっぱしてしまった。

「どうして、あなたは・・・」

空虚な言葉だけが宙に舞った。

シオンは自分の部屋に戻り、椅子に腰かけ天井を見上げた。

「これでいいのか？バニ・・・」

その時プライベート用の電話が鳴った。シオンが電話に出ると甲児だった。

「甲児か、どうした？」

「いやー、もうそろそろ行っちまうんだろ？」

「まあな」

「それでよ。最後の挨拶をな」

「お前にしては律儀だな」

「お前にしては余計だ！」

シオンは笑いながら、会話をしていた。

「それでよ、シオン。テッサのことなんだけど・・・」

「あ、それが目的なのか」

「いいから聞けよ。ボスがだな・・・」

話を聞いて、シオンは思わず噴き出していた。ボスとテッサでは付き合えたとして、まさしく美女と野獣なのだ。

「無理だと思うけどな」

「あー、やっぱりか。まあ、いいや」

「いいのかよ」

「まあ、あいつだってあきらめはいいと思うぜ」

「そうかもな」

「それじゃあ、達者でな」

「ああ。またな」

会話を終えて、シオンはもう一度考えてみたが、シオンはどうしてもテッサとボスが付き合っている姿を想像できなかった。

「しかし、俺が栄転とか・・・、ねえよ」
彼の机の上には、転属と昇進の通知が置いてあった。

Intermission (後書き)

シオン視点での物語はここでいったん終わり、次回はシュンや視点でお送りします。

Mission 9：火種 A part（前書き）

シンや編開始です。そして、ガンダムの話の開始です。
とりあえず、シンが空気にならないように頑張ります。（本編で
の扱いはひどいと思うので）

Mission 9：火種 Apart

少年は家族と共に、逃げていた。その上空では、モビルスーツが激しい火花を散らして激突していた。

今にも流れ弾が飛んできそうなそんな状況で、その家族は避難していた。

あと少しで、港に着くという時になって、少年の妹が携帯電話を落としてしまった。携帯は転がって、急な坂から転がって行ってしまった。

少年は携帯を取りに急な坂を駆け下りる。家族を坂の上に残して・・・。

そして、少年はもう二度と家族のまっとうな姿を見ることはなかった。

二年後、プラントのアーモリーワン。少年は買い物袋を抱えながら、街中を歩いていた。

「シユンヤ、何で最新機のパイロットを断ったんだ？」

少年は隣を歩いていたもう一人の少年に話しかける。

「まあ、俺が乗っても性能をひき出せないだろうからな」

「何言ってるんだよ。俺より成績いいだろ？」

こともなげに言ってみせるシユンヤに少年は反論する。シユンヤは苦笑する。

「俺なんかは、頭だけだよ。シミュレーションでは結局お前に勝てなかったしな」

「いや、それは・・・」

反論しようとしたとき、少年は誰かにぶつかってしまふ。バランスを崩したその誰かを支える少年。見ると、それは少女だった。

少女は何も言わず、それどころか支えてくれた少年を睨みつけて、走り去ってしまった。

「なんだ？」

「お前、胸を触ってたぞ」

「え？」

「ヨウランがいたら、確実にネタにされたな、シン」

少し笑いながら、シュンヤは少年に告げた。シンは焦りながらシュンヤに頼み込む。

「誰にも言わないでくれよ！」

「わかってるよ。言ったって俺の利益にならないしな。・・・時間ぎりぎりだな、急ごう」

シンはほっとした表情になり、シュンヤと共に彼らの居場所に戻って行った。

コロニー・アーモリーワン、現在ここでは、新造艦の進水式の準備が進められていた。新造艦ミネルバでも準備は着々と進められていた。副艦長であるアーサー・トラインはそんな中で仕事に忙殺されていた。

「全く、こんなにも仕事が多いとは・・・」

ため息をつきながら、運び込まれた機材のチェックなどを彼は進めていった。新造艦の副艦長になれたものの、やっていることは雑用ばかりのアーサーであった。

「戦闘でも起こらないかな・・・？」

「不謹慎ですよ」

ふと見ると、オペレーターのメイリン・ホークが飲み物を持ってきていた。それを受取りながら、アーサーは言う。

「ノックくらい・・・」

「もちろんしましたよ」

「しかし、勝手に入るなど・・・」

「飲み物が冷めちゃうじゃないですか」

「・・・、まあいい。さっきのはもちろん冗談だ。それにそんなこと起こるわけじゃないか」

戦闘を抑止するために作られたこの新造艦である。それが火種になつてしまつては、本末転倒である。

「まあ、そうですね。警備体制も十分ですし」

「そうだ。もう下がっていいぞ」

「はい」

そう、思いながらもアーサーはどこかで予感をしていた。なぜなら、モビルスーツの武装が妙だからである。

「普通なら、武装などさせるはずがないんだが・・・」

そう、ミネルバに収容された機体はともかく、収容されていない機体にまで武器が装備されている。

もし、それがテロリストにでも、強奪されたら・・・。いや、むしろ奪つてくれと言っているようなものだ。

しかし、アーサーはその考えを頭から追い出した。メイリンも言つたように警備は厳重だし、何より、今は仕事を急ぐべきだったからである。

プラント最高評議会の議長、ギルバート・デュランダルは、訪問者と護衛と共に式の準備が進む倉庫を見て回っていた。

「だが、強すぎる力は、また争いと呼ぶ!!」

訪問者の一言に、デュランダルは冷静に切り返す。

「いえ、姫。争いが無くならぬから、力は必要なのです」

その言葉に、訪問者は眉をひそめる。それは、ある意味難しい問題だった。どちらの論理も正しいからである。

数瞬の沈黙、それをけたたましい、警報の音が切り裂く。

「なんだ!？」

その言葉と同時に、一つの倉庫の扉がビームによって貫かれる。その瞬間、護衛が議長をかばう。

「カガリ!」

訪問者のほうも彼女の護衛に何とか守られていた。

破壊された扉の奥から、三機のモビルスーツが現れる。その三機は倉庫をすべて破壊しようと、無差別に攻撃を開始した。

それを迎撃するべく、次々とザフト軍モビルスーツが発進していく。

「新型・・・？」

訪問者の女性とその護衛は目の前のモビルスーツによる攻撃に驚いていた。

「あれは・・・」

「ガンダム？」

その間にも、戦闘は激しさを増していく。しかし、最先端モビルスーツと旧世代のそれとでは、やはり性能差が激しく、一方的にザフト軍は蹂躪されていく。

デュランダルは指示を出し、訪問者をシエルターに誘導させると、ミネルバにも、応援を命じた。

ミネルバ艦長、タリア・グラデイスは、アーサーに命じ、パイロットを招集させる。

「こんな形で、お披露目とはな・・・」

シユンヤは、誰ともなしに呟きながら発艦シークエンスを進めていく。

『範囲攻撃は使うなよ』

整備兵のマッド・エイヴスに言われて、シユンヤは言う。

「緊張してますからね。うっかり、スイッチが入ってしまうかもしれません」

『おいおい・・・』

「大丈夫ですよ。たぶんね」

そう、大丈夫。冷静に冷静になるんだ。そう自分に言い聞かせて、シユンヤは頭を切り替える。

俺はこれから人殺しになる。それでも、俺は・・・。

「世界を変える」

『シユンヤ・カムイ発進どーぞ。がんばってね』

「ああ、ありがとう。ゲシユペンストMk-2、発進する！！」

メイリンに軽く礼を言いながら。シユンヤは戦場へと踏み出した。

アスランとかがりは窮地立たされていた。議長にシエルターに誘導するように指示された兵士は、戦闘に巻き込まれ運悪く死んでしまったのだ。

アスランとカガリは何とか物陰に隠れて、爆発などの衝撃から身を守っていたが、それも限界が来ようとしていた。

アスランはとっさにカガリを連れて、近くに倒れていたモビルスーツによじ登る。そして、そのままモビルスーツに乗り込む。

素早く起動シークエンスを行っていくアスランにカガリが問いかける。

「お前・・・」

「こんな所で、君を死なせるわけにいくか！」

カガリの心配をよそに、アスランは決然とした態度で答える。問いかけに答える。

そして、ゆつくりとモビルスーツは起動する。しかし、運悪く、目の前には奪われたモビルスーツが現れる。

その黒いモビルスーツは、こちらにライフルを向け、そのまま発砲する。

しかし、その攻撃は当たらなかった。さすがは歴戦の勇士といふべきだろう。アスランはそのまま、黒いモビルスーツに体当たりを敢行し、相手の体勢を崩す。

相手は、ライフルを取り落としながらも、すぐさまビームサーベルを取り出し、接近戦に持ち込む。アスランも近接用の兵装を取り出して、応戦するが、性能差があまりにも開いており、いったん距離を置くしかなかった。

そこへ、もう一機の強奪されたモビルスーツが現れ、背後からアスランとカガリの乗るモビルスーツへと攻撃を仕掛ける。

とっさによけるアスランだったが、腕を一本持つていかれてしまった。と同時にそのモビルスーツに攻撃が仕掛けられる。

振り向くと、小型の飛行機と二つの物体が飛んできていた。それらは、飛行機を真ん中にして、空中にて一列に並ぶと、飛行機が変形し、そのままドッキングしていく。

そして、最後に後ろから飛んできた小さな羽根がドッキングして、それはモビルスーツとなった。

モビルスーツは大剣を振りかざし、アスランのモビルスーツを飛ばすように二機のモビルスーツに立ちふさがる。

「何で、こんなこと！また戦争がしたいのか、あんたたちは！！」
そのモビルスーツ、インパルスガンダムのパイロット、シン・アスカの叫びがこだました。

Mission 9：火種 B part

シンは大剣二振りの柄を連結させ、それを薙刀なぎなたのようにする。

「はああああ！」

気合い一閃、シンはその大剣を振りかざし、ガイアガンダムに切りつける。しかし、大ぶりにならざるを得ないその攻撃をガイアは難なくよけ、バルカン砲を浴びせかける。

しかし、特殊装甲のガンダムを実弾で傷つけることなどできるはずもなく、シンはひるむことなく、ガイアにビームライフルを撃つ。

一方シュンヤはアビスガンダムと交戦していた。アビスの5門のビーム砲をかくくりながら、アビスに近接していく。

しかし、間合いの長い長刀のような近接武器に阻まれ、結果として距離を取らされてしまう。

「ちい！ミネルバ！こちらシュンヤ！取り押さえられそうにない。

撃墜の許可、もしくは一部の破壊を許可していただきたい！」

右手に握られた実弾のマシングンを連射し、けん制しながら、シュンヤは口早に告げた。

『撃墜は許可できない！一部破壊は・・・、艦長！？』

『やむを得ないわね。一部破壊は許可します』

「了解！」

シュンヤはマシングンと左手の刃付きビームライフルを相手に向ける。そして、マシングンを連射し、弾幕を作る。

カオスは弾幕に気を取られ、そこにビーム砲を発射。しかし、その先にシュンヤの乗るゲシュペンストはおらず、一瞬の隙ができる。真横の方向に移動したゲシュペンストからのビーム射撃が肩に当たる。しかし、装甲が少し傷ついた程度だろう。だが、大きな前進である。

「よし！」

アビスは形勢不利とみると、仲間の元へと向かった。シュンヤは逃がすまいとそれを追撃する。

シンは、剣を分離させガイアに切りつける。ガイアは獣をかたどったモビルアーマーモードになり、それをかわし、インパルスの後へとビームを発射する。

シンは振り返らずに盾で防御し、ガイアへと片方の剣を投げ飛ばす。空中にいるため回避できなかったガイアは大きく吹き飛ばされる形になった。

そこへ、ミネルバから通信が入る。

『シン！命令は捕獲だぞ！わかってるんだろ？』

シンは忌々しく思いながら答える。言われなくてもそんなことは分かっているのだ。

「わかってますよ！でも、できるかどうか分かりませんよ。だいたい、何でこんなことになったんです！」

ガイアが突撃してくる。それをシンは受け止め、激しい火花が散る。二機の出力はほぼ拮抗しているようだ。

「なんだってこんな簡単に！敵に！」

空気がゆるんでいるのを看破し、グラデイスは喝をいれる。

「そんなおしゃべりをしている時じゃないでしょう！演習でもないのよ！気を引き締めなさい！」

アーサーとメイリンは面食らったような驚き顔になった。艦長が声を荒げるところを初めて見たからかもしれない。

しかし、明らかに空気は張り詰め始めていた。そう、ようやく全員が自覚し始めたのだ。これは実戦なのだと。

グラデイスは警備部に連絡を取る。

「強奪部隊なら、外に援軍がいるはずですよ。状況は！？」

アーモリーワンに近づくモビルスーツが二機存在した。しかし、ステルス加工を施していたため、発見されることはなかった。

いや、よくよく注意すれば見つけれただはずである。やはり、襲われることなどない、絶対安全だという思い込み、慢心があったと言わざるを得ないだろう。

「アラド、しっかりついてきなさいよね」

「わかってるよ」

「ホントにわかってるの？」

「わかってるから。ホント、心配性だなあ。ゼオラは」

モビルスーツに乗っている人間は少年と少女であった。しかし、作戦中にこんな会話ができるとはかなりの手だねのだろうか？

「あんた、成績悪いんだから、用心に越したことはないのよ」

少年のほうはそうでもないらしい。

「シミュレーションはシミュレーション。俺は実戦でこそ力を出せるタイプなんだよ。と教官も言ってた」

「え、ホント？」

『そんなことは言っていないわけだが・・・、というよりお前たち、任務中に私語とは随分と余裕だな』

母艦からの通信にゼオラは慌てて返答する。

「いえ、けしてそのようなことは・・・、アラドもほら！」

「どうも、すみませーん」

『まあいい、お前は一週間、飯のおかわり禁止だ』

その言葉にアラドは血相を変えて、涙目になりながら今度こそ本当に謝った。

「どうも申し訳ありませんでした」

『ははは、もうその辺にしてやれ』

そこへ、仮面の人物が話しかけてくる。声からしておそらくは男性だろう。

『それよりも、もうそろそろ時間だ。二人とも期待しているぞ』

「はっ、光栄であります」

ゼオラは素直に反応するが、アラドは少し違った反応を見せる。
「それよりも大佐。成功のあかつきには、ご飯のおかわりを許可し

ていただきたい」

「何、失礼なこと言ってるのよ!？」

『アラド。貴様ー!』

ゼオラと教官はそれぞれ、怒りをあらわにしたが、仮面の男はただ笑って、

『いいだろう。飯くらい何杯でも食わしてやる』

「ありがとうございます。話のわかる上官を持てて、自分は幸せであります」

『では、頑張ってくれ』

「はい!」

それで、通信は終わった。

「アラドのバカー!」

「なんだよ、急に・・・」

ゼオラの大声に、アラドは困惑を隠せない様子だった。

「もういい!」

そう言って、ゼオラが通信を切っても、アラドは茫然としたままだったが、気を取り直して作戦に集中する。なにせ、ご飯がかかっているのだ。

「よろしかったんですか?」

「ああ、うまくおだてて、最大限の力を発揮してもらえばいい。我々にとって、所詮彼等は、駒でしかないのだから・・・」

教官兼、艦長の男が仮面の人物に話かけると、男は静かに、そう、いたって静かにそれだけを告げる。

そして、時計を見ると、母艦による強襲を命じるのだった。

外からの強襲にコロニー内部が揺れる。アスランはその衝撃にかつてのヘリオポリスでの戦闘を思い出す。また、あの惨劇が繰り返されるといふのだろうか?

シンは苦戦を強いられていた。ガイアの機動性に押され始めてしまったのである。当然と言えば、当然である。シンにとってみれば、これははじめての実戦であって、戸惑いもある。

それに加えて、今のインパルスは大剣装備のソードシルエット。機動性で大きくおくれを取るのには仕方のないことである。

しかし、ガイアも決定打を打ち込むことはできなかった。それゆえ、モビルスーツ形態に戻り、再びインパルスと激突する。

激しく、火花を散らす両者。

突然、ガイアはすつと身を引く。警告音に振り返ると、背後の力オスが突然飛び、後ろにいたアビスがビーム砲を放ってくる。

とつさによけるが、さらに飛び上った力オスが下降しながら斬りつける。さらに体勢を崩され、そこへガイアのビームサーベルが炸裂。盾で防いだが、遠くへ吹っ飛ばされる。

「うわああああ」

そして、アビスがランスを振り降ろそうとしたその瞬間。一筋の閃光が駆け抜け、アビスの足の間接部分にぶつかる。そして、アビスはバランスを崩す。さらに、アスランのモビルスーツが体当たりを仕掛け、シンを窮地から救う。

アビス・カオスが振り返った先には、ゲシュペンストが立っていた。

「残心という言葉を知らないらしいな。君たちは」

「シュンヤか？助かった！」

「一気に片を付けるぞ。それと、そのザクのパイロット、下がって大丈夫だ」

アスランのモビルスーツに言うなり、シュンヤはビームライフルのビーム刃を発動させ、カオスに斬りつける。カオスはそれをビームサーベルで受け止める。

状況を打開するため、カオスは背部に取り付けられたビームポッドでシュンヤを攻撃する。ビームライフルで応戦しながら、シュンヤは後退。その隙に、ガイア、カオス、アビスは撤退を開始する。

それを追って、二体も飛翔する。

しかし、そこに通信が入る。

『シン！シュンヤ！戻れ！緊急事態だ！』

「強奪された機体はどうするつもりですか！？」

アーサーの緊迫した声にこちらも緊迫した声で答えるシュンヤ。

『それは、放っておけ！！それよりも、帰還するんだ。ユニウスセブンが、地球に向かってている！！』

「は？いったい何を言ってる・・・」

シンは全く理解できない様子で言葉を返す。一応、両機は強奪された機体を追うことは止めている。

『ユニウスセブンが地球へ落下するかもしれないんだ！！』

その言葉を聞き終わらないうちに、シンとシュンヤは矢のようにミネルバに帰還する。

戦争の火種は確実に動き出していた。

「さあ、行くのだヒロ。オペレーション・メテオの開始だ」

老人に言われて少年はスペースシャトルの様な物に乗り込み、一言だけ告げる。

「任務了解」

そして、少年は地球へと旅立つ。すべての運命が交差する地球へと・・・。

M i s s i o n 9 : 火 種 B p a r t (後書き)

いかがでしたでしょうか？次回は、ユニウスセブン落下の話です。
ご意見・ご感想をお待ちします。（何かの番組風にしてみました）

久々すぎる更新です。待っていてくれる人には、本当に申し訳ないです。

続きはできるだけ更新したいと思います。

インパルスとゲシュペンストを收容すると、強奪された機体を追うような形で、ミネルバはコロニーから出港した。強奪されたモビルスーツはコロニーに穴をあけ、逃走してしまっている。

しかし、強奪部隊は別の部隊にまかせ、ミネルバは最大戦速で移動するユニウスセブンに向かっていた。

その艦内でシュンヤ達は、テロリストの犯行声明をモニターで再度見ていた。

『我々、コーディネーターはナチュラルより格段に優れている。しかし、彼等はそれを妬み、我々を迫害した。加えて、前大戦ではプラントに核攻撃まで行った。我々は多くの同胞を失った。その報復のために、そして、今なお我々を滅ぼそうと画策しているナチュラルどもを滅ぼすために、我々はユニウスセブンを地球に落下させる！』

シュンヤは怒りを露わに声を荒げる。

「こんなことをして、一体、何になると言っんだ！」

「仕方ないんじゃないの？言ってることも分からなくはないし・・・」

シュンヤは振り返り、発言したヴィーノの襟をつかみ上げる。

「もう一回言ってみろ！」

「わ、悪かったって・・・」

周りの視線を感じ、シュンヤは襟から手を離す。

「すまない。しかしな、ヴィーノ。やつらがやっているのはテロだ」「シュンヤの言う通りだ。彼らがやっていることは、我々コーディネーターの評価を著しく低下させる行為だ」レイがシュンヤに同意する。それに続いて、メイリンもうんうんとうなずいた。

「でも、なんだってこんなことに・・・」

シンが、怒りを抑えながら、誰ともなしに言っていた。あたりを

沈黙が走る。そう、モビルスーツの強奪という、非常事態に加えて、テロリストによるユニウスセブン落下の危機。まさしく、プラントにしてみれば、泣きつ面に蜂状態だろう。

これが、ナチュラルとコーディネーターの確執のせいだと言えば、それまでかもしれないが、それでも、何かの陰謀が動いている気配が漂っている。

『パイロット各員は、最終調整に入ってください』

アナウンスに従って、シュンヤ達はそれぞれの機体の最終調整のために、休憩室を後にした。

アスランとカガリはザクでミネルバに着艦した後、兵士に連れられて、デュランダル議長と再び相對していた。

「我々も困惑しているのです。姫。確かに、強奪に関しては私たちの落ち度でしかありませんがね」

「それはわかる。私が言いたいのは対応についてだ。なぜ、全力で強奪した部隊を追跡しない!？」

カガリの言葉に、デュランダルは苦しい表情をする。

「姫は、まだご存じなかったんですね」

その言葉に、今度はカガリが困惑する番だった。そして、デュランダルの次の言葉によって、その感情は焦燥へと変わる。

「ユニウスセブンが地球へ落ちようとしているのです」

「!」

「それもコーディネーターの手によつてです。我々はこれをなんとかしても阻止しなければならぬ。それゆえ、我々は部隊を追うのを半ばあきらめたのです」

アスランとカガリは凍りついていた。そんなことになったら、オリーブは、それどころか地上の人々は壊滅的なダメージを受けるだろう。

「理解していただけましたか？」

「ああ」

デュランダルは少しだけ柔和な表情になり、二人に向かって告げる。

「つきましては、お二人には艦を降りて、プラント本国で待っていていただきたいのです」

「そんなことはできない。私たちも黙って待っていることなどできない！」

「アスハ代表。ここは議長に従いましょう」

「アレックス。私の性格はよく分かっているだろう？」

カガリはアスランを偽名で呼びながら見つめてくる。アスランはため息をつきながら、それでもそれを否定した。

「分かっているからこそです。ここで、あなたを失うわけにはいいかない」

「わかった。そこまで言うならな……。議長、あなたに従おう」
デュランダルはほっとしたような表情をしながら、彼らと共にシヤトルに移動し始めたその時だった。

ドンという爆発音とともに、ミネルバの船体が揺れる。デュランダルは、困惑の声を上げる。

「なんだ!？」

ブリッジは慌ただしくなる。全くの奇襲だった。

「ブリッジ遮蔽!!アーサー!モビルスーツ部隊を展開させて。敵機は？」

「急速接近中の機体……。10!戦艦1!これは、ヴェスパの機体です！」

ユニウスセブンの破壊を急がなければいけないかの状況で、これは最悪だった。

そこへ格納庫空通信が入る。

『ブリッジ！試したいことがある。先に出撃させてくれ！』

「シュンヤ！？いったい何を！？」

シュンヤの提案に、アーサーは困惑の声を上げるが、タリアは納得したように指示を出す。

「わかったわ。範囲兵器の使用を許可します。その後、敵援護警戒のためにモビルスーツを出撃！」

「範囲兵器ですか！？しかし、あれは・・・」

「今は、時間をかけるわけにはいかないわ。準備はできているのね？」

『もちろんです』

シュンヤは自信に満ちた表情で答えた。

「あれに、新型が？」

ヴェスパのパイロットの一人が、部隊長に問う。

『そうだ。だが、我々の目的は・・・』

「分かっています。時間稼ぎですね」

『そうだ。新型については警戒だけしておけ』

「了解」

しかし、この部隊長は判断は誤りだった。まあ、新型はインパルス一体だという情報である。彼らにもっと情報があれば、その運命も違ったものになったかもしれない。

「分かっているとは思うが、はずすなよ」

『分かっています』

シユンヤはメカニックのマッドからの忠告にうなずきながら発信シークエンスを進めていく。その内心はとても冷ややかだった。いや、若しくはあざけているのか・・・。

（この機体のことについては何も聞かされていないらしい・・・。
哀れだな）

『進路グリーン。発進どうぞー！』

『ゲシュペンスト、発進する！』

メイリンの言葉と同時に、ゲシュペンストは虚空の闇の中へと吸い込まれていった。

「何で、シユンヤだけなんだ？」

シンは、待機をしながら、ぶつくさ言っている。それを、聞いたルナマリアは、シンをちやかす。

「なーに？自分は出れないのが、悔しいの？シンちゃんはかわいいですねー」

「そんなんじゃ・・・、それよりもその呼び方は、やめてくれ」

「可愛いという表現は止めないんだな・・・」

レイの言葉にシンははつとしたように付け加える。

「俺が可愛いって、どういうことだよ」

「幼いって意味よ。幼くて、かわいいシンちゃん」

「だから・・・、俺はシュンヤ一人で大丈夫なのかって、思っただけで・・・」

シンは諦めたのか、静かに語りだす。いまさら遅いのは言うまでもないが・・・。

「確かに、1対10じゃ厳しいかもしれないが・・・、シン、機体のスペックは全員分、頭に入っているな？」

「いや、俺はインパルスのマニュアルを頭に入れるので精一杯だったから・・・」

「入ってないんだな」

「・・・はい」

レイは深いため息をついた。作戦のスムーズさをはかるために、ミネルバに配置予定の全モビルスーツのスペックを覚えるのは必須なのである。

確かに、ザフトのモビルスーツは多種多様に存在するが、コーディネーターであるならそんなことは関係はないはずだ。

要は一人一人のやる気の問題である。

「あんたねえ、本当に同じコーディネーター？」

「当たり前だろ！？」

ルナマリアの質問にシンは喰ってかかるが全くと言っていいほど説得力がない。まあ、インパルスに乗れることから、運動面では問題ないようだが・・・。

「シン、この戦い、おそらく一瞬で勝負はつく。スペックが分らないのであれば、仕方ないが、それほどの兵器が搭載されてるんだよ

あれには・・・」

「そう、それも味方まで全滅させてしまうような兵器がね」

「そうなのか？」

「ああ」

息をのむシンにレイは静かに、うなずいた。

『ミネルバ、敵の掃討に成功、これより帰還する』

ちょうどその時、シュンヤから敵の全掃討が終わった。知らせが届いた。

「本当なのか・・・」

「シュンヤお疲れ様」

ヴィーノから差し出された、タオルで顔を拭きながら、シュンヤは改めて決意を固めていた。

（今度こそ、完全に人を殺してしまった。もう後戻りはできない。殺してしまった人のためにも俺は・・・）

「どうした？シュンヤ？」

ヴィーノに声をかけられて、シュンヤは我に帰る。

「ああ、すまない。緊張がほぐれて、ぼうつとしてた」

「お前でも緊張とかするのか？」

ヨウランが茶化すように言ってくる。シュンヤは微笑みながら、

「俺だって、人間なんだ。緊張もすれば、怖がりたりもする」

「お前が怖がる場所なんて、想像つかないな・・・。まあ、それは置くとして・・・」

「ああ、機体損傷が激しすぎるな・・・。一回使っただけで、これだけの損傷となると・・・」

「使う用途は狭まるな、それに、使った後はしばらくは発進できない」

シュンヤはたった今、降りてきたゲシュペンストを見上げる。そ

ここには各部の装甲がめくれ上がったたり、関節が壊れた機体の姿があった。頭部については半壊し、モノアイの部分がむき出しになっている。

（威力は十分だが・・・）

「これはひどいわね・・・」

女性の声に振り返ると、シン、レイ、ルナマリアが機体を見上げながら、近づいて来ていた。シンは啞然としたように、シュンヤに問いかける。

「なあ、シュンヤ。これは一体・・・」

「お前のことだから、スペックは覚えてないんだよな」

「そんなことは・・・」

シンが言いよどむと同時に、レイとルナマリアが感嘆した表情をする。

「よくわかるな」

「付き合いは長いからな、というか、腐れ縁だからかな」

「ふーん、そうなんだ」

ルナマリアがそういった時、階段の上から、声が聞こえてきた。聞き覚えのあるその声をつ聞いたその瞬間、シンの表情が憎しみにゆがむ。

そして、次の言葉が聞こえた瞬間に、シンの怒りは頂点に達した。

「だいたい、なぜ必要なのだあんなものが!!」

シュンヤは、はっとしてシンを止めようとしたが、時すでに遅し、シンは怒りの声をあげていた。

「さすが、きれい事はアスハのお家芸だな!!」

そして、シンは声をぶつけた人物、カガリを睨みつけてから、さっといなくなってしまった。

あわてて、ルナマリアが後を追う。

「すいません、議長シンには私から、よく言っておきますから」

レイも議長に一言告げてから、シンの後を追った。

「申し訳ございません。姫」

「それよりも、彼は一体・・・？」

「それについては私から説明しましょう」

「お前は・・・」

「お久しぶりです。アスハ代表」

カガリは驚きのあまりに声を失ってしまう。そして、なんとか声を絞り出した。

「シユンヤなのか・・・？」

シユンヤはただほほ笑むばかりだった。

「たった一機？」

ヴェスパ兵が言葉を発した瞬間、全員に慢心が生まれた。一機だけなら、撃破など簡単だと、しかし、その慢心が彼らの敗因だった。ゲシュペンストの各部から閃光があふれ出す。

「自爆!？」

ヴェスパ兵たちはそのまま無へと帰っていった。そして、青い機体だけが存在するのみとなった。

「すまないな。君達の犠牲は無駄にはしない」

「さっきの彼は、シンと言います。前大戦のオーブ戦時に家族を亡くしています。かと言って、さっきの言動が許されるものではありませんが・・・」

シュンヤはそう言ったが、彼の表情は穏やかなものだった。

カガリはやはり、ユニウスセブンに同行することにしたようで、VIPルームで会話をしていた。カガリは表情を曇らせる。

「そうだったのか・・・」

「まあ、そんなに気にすることはないですよ。というか、もうそろそろ、割り切ることも覚えましょうよ」

シュンヤは軽い感じで言葉をかける。カガリは気に障ったのか、突然怒鳴る。

「お前は！人の死をなんだと思ってるんだ!？」

「重大なものだと思ってますよ。だからこそ、俺たちはその死を無駄にしない為に頑張っていかなければいけないんです」

「それなら・・・」

「しかし、いちいちその遺族のことばかりは気にしてもいけない。

為政者が前に進めなくなつてはいけません。為政者が迷つてしまつたら、それにつき従う人はどうすればいいんですか？」

静かでありながら、強い言葉にカガリは何も言えなくなつてしまった。反論する言葉を彼女は持ち合わせていないのだ。

「シュンヤ、それくらいにしてくれないか？」

思わず、アスランが助け船を出す。カガリがシュンヤに論戦で勝つたことがないのは知っていたがここまで一方的になるとは思わなかったのだ。

シュンヤは呆れたように、肩をすくめ、ため息をつく。

「ふう、相変わらずですね。まあ、そこがあなた達のいいところなんでしょうけど・・・」

苦笑いをしながら、話すシュンヤにアスランも苦笑を返すしかなかった。

そこにアナウンスが入る。

「まだまだ、言いたいことは、山ほどありますが、この辺にしておきましょう。準備ができたみたいですので・・・」

しかし、シュンヤが立つても、カガリは立つ様子を見せない。アスランがカガリを気遣う。

「どうした、カガリ？」

「やはり、私はここに残ろうと思う。これはオーブにも関係のある話だ」

アスランはやれやれといった感じで、カガリを説得にかかるが、その前にシュンヤが告げる。

「覚悟の上のことでしょうか？我々は、戦場に向かっています」

「・・・ああ、覚悟はできている」

少しの間をおいて、カガリは答えた。シュンヤは嘆息しながらも、それに応えて告げる。

「わかりました。それでは、議長に報告させていただきますので、これで・・・」

シュンヤが去った後、カガリはどっと疲れた様に、ソファーにも

たれかかる。

「カガリ・・・」

「あいつはもつと色々と言いたかったんだろうな。・・・私はあいつに一度だって勝てなかった。そう、一度も。そして、あいつの言ってることは正しい。解ってるよ。解ってるんだよ。アスラン。でもな、これだけは譲れない。私は行く末を見届けなければいけないんだ」

そこまで言って、カガリは黙り込む。なぜそう感じたのかは関係ないのだろう。つまり、彼女の直感である。

アスランはこういうときに彼女を諭すことが出来なかった。迷ってしまうのである。自分に自信が持てないわけではない。しかし、誰かに言われたことの意味をきちんと考えないと反論できないのだ。シユンヤやシオンならばそんなものは感情論だの一言で断じられていたことだろう。

シユンヤは呆れかえっていた。ここにカガリを残すことに同意した議長にもだが、それ以上にここに残ると言いだしたカガリにである。

「未だに感情を優先させているのか・・・」

シユンヤにしてみれば、カガリがプラントに来たこと自体、理解のできないことなのだ。

カガリは、一年たったとは言え、オーブでの基盤が確立されたわけではない。セイラン家のほうが実権を握っているのが現状だ。彼等は、政治の面では確かに優秀だ。権力を握るのもわかる。

だからと言って、オーブにふさわしいかというと、そういうわけでも無かったりする。

「だから、今はしっかりと勉強して、基盤の確立をーーーー！！政治はきれいな事だけじゃ済まない事をわかってくれーーーー！！」

そして、文句はアスランにもあった。彼とカガリは恋仲である。

それを政治利用するのはどうかとも思うが、二人が婚約をしてくれれば、ナチュラルとコーディネーターとの懸け橋として有効に作用するだろう。

「だいたい、セイラン家はその権力をより強固とするために、カガリと許婚いいなすけなどと言っているんだ！！なのに、アスランは不快じゃないのか！？本当に好きなら、早く娶ってくれよ！！そうすれば、カガリのオーブでの基盤もより構築しやすくなるっていうのに！！」

思い返す内に頭にきたようで、本人の前で言わなかったことを廊下にて大声でぶちまけるシュンヤ、しかも途中からは壁に頭をぐりぐりと擦りつけている。

これで、廊下に人が通りかかったら、変人扱いである。まあ、運のいいことに、人は通りかからなかったが・・・。

どうやら、兄妹そろって、怒ると人の目や自分の立場を忘れてしまうらしい。

頭をこすりつけることはやめ、再び歩き出すシュンヤ。更衣室に入り、パイロットスーツに着替える。

「集中しろ、俺。これから行くところは今までにない危険な場所なんだ」

冷静さを取り戻すために、シュンヤは自分に言い聞かせるのだった。

待機室にシュンヤが現れると、室内はビックリしたようにざわめく、シュンヤの他には三人しかいないが・・・。

「出撃できないはずじゃ・・・」

他のメンツもおおむね同意のようだ。

シンの言葉にシュンヤはすぐさま答える。

「イレギュラーで搬入されてたのがあるだろ？あれに乗る」

イレギュラーで搬入とは、アスランが操縦してきた機体のことだ。三人は納得するが、しかし、レイがそれは出来ない旨を告げる。

「あれには、アスランが乗るらしいぞ」

「は？」

シュンヤはぽかんとした顔になる。アスランが本名を名乗っていることもだが、それよりも出撃すると言いだしていることに、理解が追い付かなかったのだ。

数瞬した後、シュンヤは理解すると同時に、表情を曇らせる。いや、曇らせるどころではなく、それはゆがんだ表情。

「どうした？顔色が優れないようだが・・・」

「本当ね。医務室に言ったほうがいいんじゃない？」

「大丈夫か？医務室に行くならだれか呼ぶけど・・・」

レイ、ルナマリア、シンがそれぞれ心配して、声をかける。しかし、シュンヤはそれにこたえることが出来ない。

そして、彼は無言のまま、待機室のエレベーターに乗って格納庫へと降りて行ってしまった。

「なによあれ！？感じ悪いわね！」

シュンヤの態度にルナマリアは当然のごとく憤慨するが、レイの反応は少し違っていた。

「いつもの彼らしくないな・・・」

その言葉に、ルナマリアは少し考え込むような仕草で、レイに問

いかける。

「そう？いつもとあまり変わらないと思うけど・・・」

「彼はいつも周りに気を配っている」

「確かに、空気を読むのはうまいわよね。やっぱり、・・・らしくない？」

そう、本来の彼であるならば、無視するなんてことはしないのだ。
「わかるような気がする」

シンの一言に二人が注目する。シンは促されるままに、続ける。

「アスラン、あの人は確かに、コーディネーターで、昔はプラントにいて、元Z A F T だけど、今は関係ない。部外者だよな？」

二人はその問いに、ためらいながらも、首を縦に振る。それを見て、シンはさらに話を進める。

「そんな部外者に、感情だけで戦闘に出られても困る。それに、MSに乗るってことは、国の機密を少なからず握るってことだ。なのに、議長はそれを認めた。俺たちより、今は部外者であるはずのアスランを信頼したんだ。そりゃ怒りたくもなるさ。それに、あいつって意外とプライドが高いしな」

「なんか、最後のほうはシユンヤの器が小さいように聞こえるけど？」

ルナマリアが茶化すと、シンはちょっとびくつとして、それに猛烈に反論する。

「別に、そんなことを思ってたんじゃない！」

「ふふ、冗談よ。・・・確かに、シンの言う通りね。理解もできるでも、議長には議長の考えがあるはずよ」

「そうだな。議長が考えもなしに許可するなどあり得ないよ。シン」
ルナマリアの言葉に呼応して、レイもシンを諭す。だが、シンはまだ不平を洩らす。

「まあ、そうだけどさ。なんか、納得できないんだよなー」

「おこちゃまねー」

「おこちゃま、いうなー！！」

『パイロット各員に通達、コンディショニングエラー、繰り返す。コンディショニングエラー。コクピットで待機してください』

なんやかんや、やっている内に、戦場が近付いてきたようだ。3人がエレベーターに乗り込もうとするとその前に扉が開いた。中からはシュンヤが出てくる。

「さつきは、すまなかった。ちょっと気が動転してね。みんな無事で・・・」

開口一番に一気に告げられて、三人は少しだけビックリしたが、それでもさつきの誤解は完全に解けた。それは、彼の表情、本当に苦しそうなその表情。

「大丈夫。心配すんなよ」

「そうよ、忘れたの。私たちだって赤服なのよ」
「ああ、そういうことだ」

そう言つて、三人はそれぞれのMSへと向かつて行く。シュンヤはそれを見送ると、壁を思い切りなぐりつけた。
シュンヤは自分の失策を呪っていた。結果的に自分だけが危険な任務を避けてしまったのだ。そんなことは彼は望んでいない。

「王」が動かなければ、誰もついてこないのだから・・・。

まあ、アスランが乗ることなど予想もしていないことだ。そう言ってしまうばそれまでなのだが、彼はそれすらも自分の失策としてしまっていた。

覚醒にはまだ遠い。

「つていうか、なんででしゃばるんだあの人は—————!!」

・・・覚醒しないかもしれない。

アスランはシュンヤの言葉を考えていた。

俺は部外者だ。それなのに、こっやって出撃しようとしているのは、正しいことなんだろうか？

俺の「今」の仕事は力ガリの護衛だ。全く、俺は愚かなのかもしない。だけど、今は俺はこれをしたと思った。しなきゃいけないと思ったんだ。この気持ちは間違いない。

いや、違う。シュンヤは俺が出撃することをとにかく言っていたんじゃない。彼が本当に言っていたのは・・・。

シュンヤは「仲間」を守ってくれと言ったんだから。

俺はそれに答えなければならない。そう、絶対に・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248c/>

スーパーロボット大戦G . U .

2010年10月10日03時45分発行